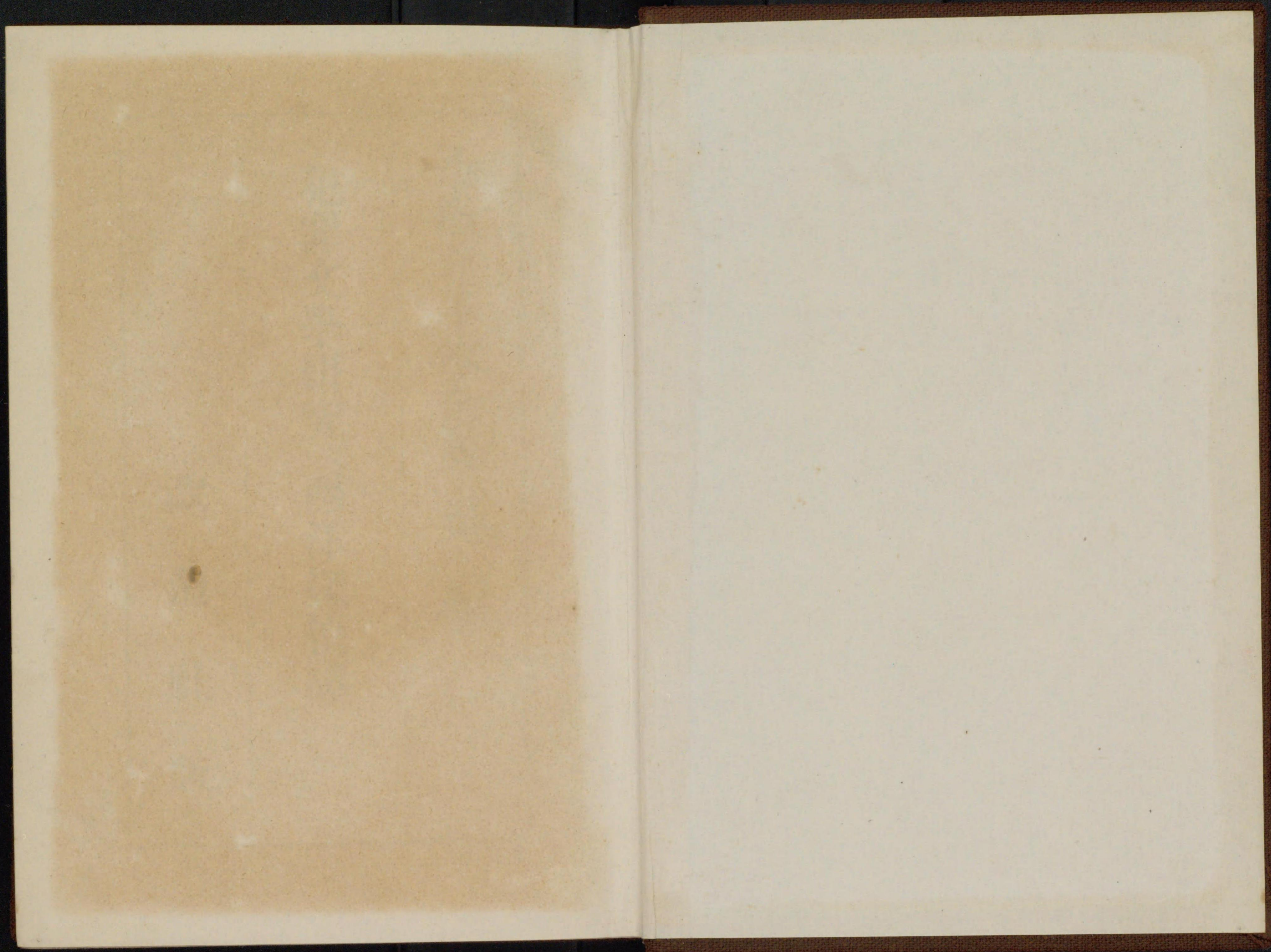


598-5



1200501528787







小酒井不木全集 第二卷

犯罪文學研究<sub>及</sub>西洋探偵譚

改  
造  
社  
版



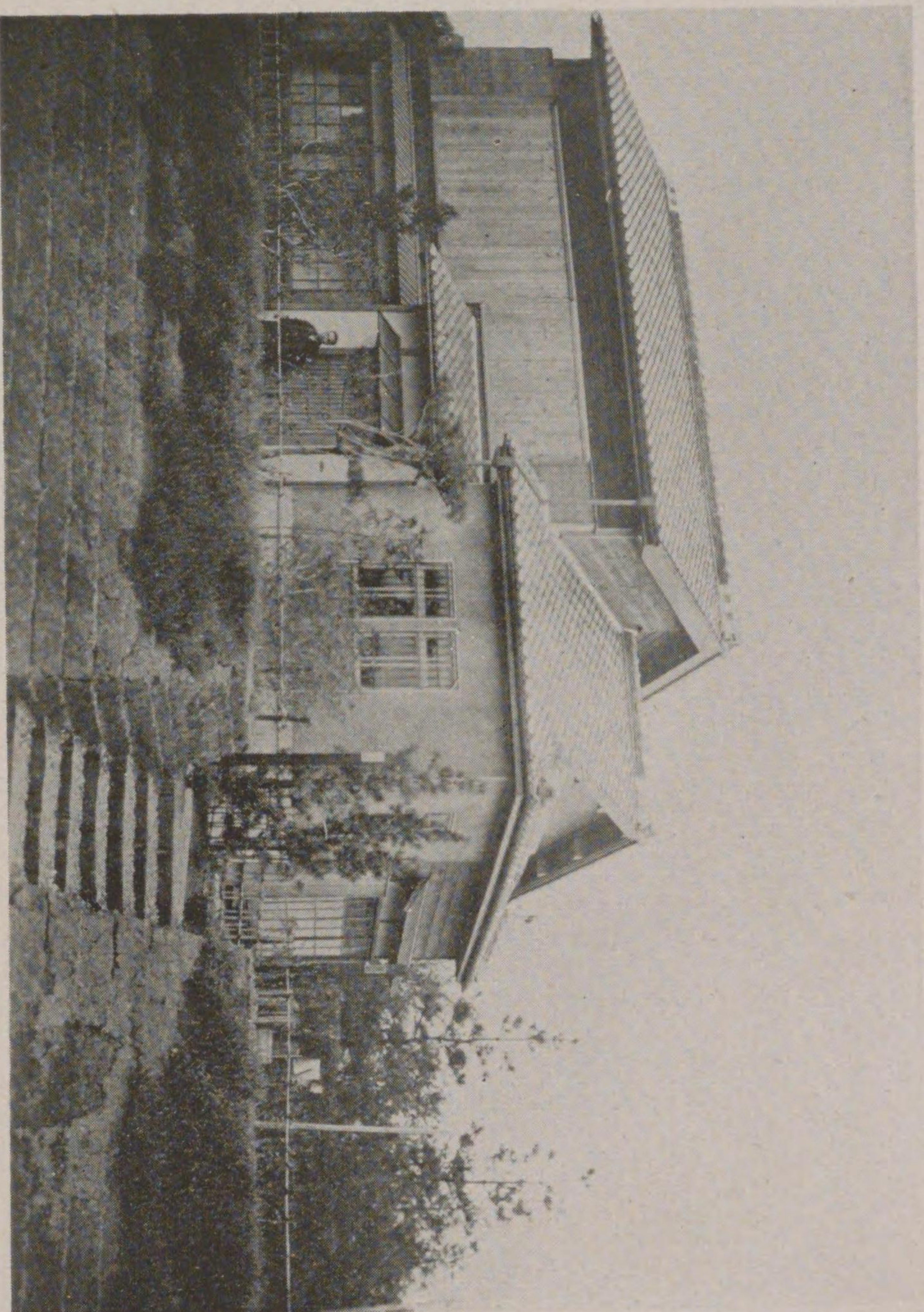
598  
51



著者最終直後死の願スケツ子

87W73129





新築當時の邸宅(立著者・洋窓のありあつた二階に際しては現在も残り  
右に空に建つて増えつた家が築屋に左に空に建つて増えつた家



第二卷 目次

犯罪文學研究

はし が き……………一

日本の犯罪文學……………五

櫻陰、鎌倉、藤陰の三比事……………七

探偵小説としての三比事……………一七

三比事に書かれた探偵方法……………三

三比事に書かれた特種の犯罪方法……………三

三比事に書かれた犯罪心理……………四七

詐欺騙盜を取扱つた文學……………五

兩用心記の比較……………五

兩用心記に書かれた詐欺方法……………六



曲亭馬琴の『青砥藤綱摸稜案』……………七四

青砥藤綱の裁判に對する態度……………七

『摸稜案』の最初の物語……………八一

暗號解讀……………九一

『摸稜案』に書かれた女性の犯罪心理……………九四

犯罪文學と怪異小説……………一五

江戸時代怪異小説……………一七

主觀的怪異を取扱つた物語……………二〇

ラフカヂオ・ハーンの翻譯……………二七

古今奇談英草紙……………三〇

淺井了意と上田秋成……………三六

御伽婢子と雨月物語の文章……………四三

御伽婢子と雨月物語の内容……………五一

近松篁林子とシエクスピア……………一五六

『マクベス』の研究……………一七六

默阿彌の悪人……………二二六

ポオの『マリー・ロオジエ』事件……………二三六

**西洋探偵譚**

はし が き……………二六三

プランセス街の祕密……………二六七

髑髏の身許鑑査……………二八七

バークマン博士殺害事件……………二九六

肉片の身許鑑定……………三〇八

グーフエ殺害事件……………三二六

見證による犯人探偵……………三三八

名探偵ブルックスの功名……………三三七



寫眞と探偵……………三五二

探偵スウィーニーの功名……………三五九

足跡の鑑定……………三六九

遺留品による探偵……………三八〇

ブリッ格斯殺害事件……………三八六

血痕及毛髪の鑑定……………三九七

マリー・パロー殺害事件……………四〇九

犯罪者の心理を應用した探偵方法……………四一九

山中の殺人事件……………四二六

名探偵バース……………四三四

セント・ルイスの警官殺害事件……………四五四

**近代犯罪事實談**

近代犯罪の特徴……………四六三

日本最近の犯罪……………四六九

硫酸投注……………四八五

主権者殺し……………五〇二



# 犯罪文學研究

## はしがき

文學に現はれた犯罪又は犯罪者の研究は可なり古くから行はれて居る。古いと言つても、犯罪學そのものが比較的新しい學問であつて、犯罪學らしい犯罪學の發達したのは、所謂、犯罪人類學の開祖たるロムプロゾー以後のことであるから、まだ凡そ六七十年来にしかならず、従つて文學にあらはれた犯罪又は犯罪者の研究が科學的に試みられるやうになつたのも、五六十年來のことである。

實際、文學に描かれた犯罪者を科學的に研究した最初の有名な著述は、ロムプロゾーの高弟で、犯罪社會學を開いたエンリコ・フェリの『文藝に於ける犯罪者』であつて、これは一八九二年ピサで講演した所を補つて一冊の書物としたものである。この中にはシエクスピアの戯曲、『マクベス』、『ハムレット』、『オセロ』を始め、シルレルの『群盜』、ユーゴの『死刑囚の最後の日』、ゾラの『テレー



ズ・ラカン」その他、及び、イブセン、トルストイ、ドストイエフスキー、ダナンチオ等の作品が研究され、なほガポリオーやサルドゥーの探偵小説まで研究されてある。

フェリのこの研究の要點は、フェリの『犯罪者の分類』を文學的作物によつて證明しようとした所にある。フェリは犯罪者を五種類に分つた。即ち一、狂的犯罪者、二、先天的犯罪者、三、常習性犯罪者、四、偶發性犯罪者、五、情熱性犯罪者がこれであつて、彼は文學に描かれたところの犯罪者も畢竟この五種以外のものはないことを指摘し、それと同時に『犯罪人類學』は、犯罪人類學を知らなかつた文豪たちによつて、知らず／＼に理解されて居つたといふことを論じて居る。

フェリ以後は、コーラー、ゴル等幾多の犯罪學者によつて、部分的に文學の犯罪學的研究が行はれたけれども、最も徹底的な研究をしたのはドイツのエーリツヒ・ウルフェンである。ウルフェンはフェリとちがつて、主として犯罪心理學の立場から、文學にあらはれた犯罪者を研究し、その著『シエクスピアの大犯罪者』と『ゲルハルト・ハウプトマンの戯曲』は極めて名高いものである。前者にはマクベス、オセロ、リチャード三世の性格と犯罪との關係が遺憾なく説明され、後者にはハウプトマンの戯曲十種に就て、深い犯罪心理學的研究が試みられてある。

犯罪の研究も證じつめて見れば『人間』研究の一部分である。そして人間をよく知るためには『科學』ばかりでは不充分である。『科學』は主として、多數の材料をあつめて、そのうちから共通な點を

歸納しようとするのであるが、そればかりによつて人間研究を完うすることが出来ると思つては間違ひである。だから偉大なる科學者は必しも、人間をよく知つて居る人（即ちドイツ語で所謂『メンシエン・ケンネル』でない。）否、『メンシエン・ケンネル』は、古來、むしろ偉大なる文豪に多かつた。従つてそれ等文豪たちの作品には、科學者達の普通氣附かぬ人間の性質が描かれてある。こゝに於て文學の科學的研究の必要が起つて來るのであつて、かういふ立場から、『文學の犯罪心理學的研究』を試みたのがウルフェンである。その著『シエクスピアの大犯罪者』一卷は、むしろシエクスピアが如何に人間をよく知つて居たかを證明したものといつた方が適當であつて、『文學の犯罪學的研究の價値』を説いたものと見ても差支ない。例へば晩近明かにされた『不具と犯罪性』との關係は『リチャード三世』の中に遺憾なく描かれ、『癲癩と犯罪性』との關係は『マクベス』の中に説き盡されて居る。だから優れた文學的作品の研究は犯罪の科學的研究の先驅たり得る見込さへあるのである。

さて、犯罪に關する文學といへばその範圍は極めて廣い。善と惡との葛藤を描いた文學はある意味に於ては悉く犯罪文學と言つても差支ない。西洋ではホーマーの二大詩篇も見様によつては一つの犯罪文學である。然し乍ら、犯罪を描いた文學が、犯罪文學として、特に人々に興味を興へるやうになつたのは、犯罪が如何に探偵されて行くかといふことが描かれるやうになつてからのこと、即ち所謂探偵小説なるものが起つてからのことである。西洋の探偵小説の鼻祖は通常エドガー・アラン・ポ



オとされて居るから、所謂犯罪文學の勃興は第十九世紀の半ば以後のことである。チャールズ・ホーンはその著「小説の技巧」の中に、探偵小説を「技巧の小説」の一種と見做し、その特徴は、構構が故意に逆に示されてあつて、讀者は自分自身の機智を働かして、謎を解く努力をし、探偵の仲間入りをし得る所にあると言つて居るが、この點がやがて讀者の興味を中心となることは言ふ迄もないことである。又、必ずしも構構が逆に示されて居なくても、犯罪が一步步わかつて行く経路の描かれてあるものは同様の興味を與へるものであつて、ドストイェフスキーの「罪と罰」や「カラマゾフ兄弟」の面白味は、その探偵味をたつぷり含んだところにあるといつても、恐らく誰も異存はあるまいと思ふ。

近頃では「探偵小説」なる名稱が廣い意味に用ひられ、ホーンの所謂技巧の小説（恐怖、密謀、探偵、ミステリーを取り扱つたもの）を始め、ある種の冒險小説をも含ませらるゝに至つたので、探偵小説は必ずしも犯罪文學ではなくなつたけれど、やはり探偵小説の名の示すとほり、犯罪の探偵を取り扱つたものが、數に於ては一ばん多いやうである。これはいふまでもなく、人々が犯罪といふものに一種の魅力を感じるためである。このことに就ては拙著「殺人論」に述べたことであるから、茲に繰返さないけれども、センセーショナルな殺人事件があると、各新聞紙はその紙面の大部分を割いて之が報導に力を注ぐところを見ても、思ひ半ばに過ぎるであらう。

近時、實際の犯罪探偵に科學が應用されるに至つたため、探偵小説にも主として科學的搜查による探偵事件が描かれるけれども、やはり、興味の多いのは心理的に、所謂人間性を巧みに應用した探偵事件である。さういふ探偵小説は、シエクスピアの戯曲その他の純文學的作品と同じく、犯罪學的に研究する價值があるのである。

それ故私はこれから犯罪に關する文學の犯罪學的考察を試みようと思ふのである。主として探偵味を含んだ文學に就ての研究ではあるけれども、さもないものについても研究の歩を進めて行くつもりである。

## 日本の犯罪文學

探偵事件を取り扱つた小説が、日本で廣く世に行はれるやうになつたのは徳川時代以降である。慶安四年、支那の裁判小説『棠陰比事』の日本語譯『棠陰比事物語』が刊行されて非常な人氣を得てから、これに類似した裁判小説が續々刊行された。即ち元祿二年には井原西鶴によつて、櫻陰比事が書かれ、寶永五年には月尋堂の鎌倉比事、次で寶永六年には、作者不詳の桃陰比事（後に藤陰比事と改題された）が出た。この外に、裁判小説専門ではないが、安樂菴策傳の醒睡笑（寛永五年）の中に、



板倉伊賀守の取扱つた裁判物語が書かれてあつて、これは多く實談であるらしいが、兎に角物語として讀んでも甚だ面白く、鎌倉比事の中には、この中の話を焼き直したものもある。

この外、支那の杜騙新書、騙術奇談と類を同じくする騙盜を取り扱つた物語に、西鶴の弟子團水の著はした『晝夜用心記』(寶永四年)と月尋堂の『世間用心記』(寶永六年)とがあつて、いづれも、多大の人氣を得ることが出来た。

これ等の小説が出てからは、江戸の末期に至る迄類似の書物の刊行がなかつたやうであるが、馬琴の『青砥藤綱摸稜案』が出るに及んで、裁判物語中、人氣の焦點となつた。又、かの『大岡政談』として現今に至るもよく讀まれて居る實録小説は、誰の作かはわからぬけれど、棠陰比事などの物語も可なり澤山取り入れられて居るやうであつて、『青砥藤綱摸稜案』も、大岡越前守の政談がその骨子とされて居る。

明治の中葉には海外の探偵小説の翻譯が盛んに紹介され、次で現今の最隆盛期に達したのであるが、海外小説の影響を受ける以前の日本の探偵文學はその源を支那の棠陰比事に發すると見て差支ないのである。棠陰比事は、宋の桂氏の著はした小説で、約百五十ばかりの短い話が集められてある。現今の言葉でいへば民事上の裁判も刑事上の裁判も含まれて居るのであるが、犯罪捜査にしても、審問にしても、裁判官一人の智慧で行はれるのであつて、探偵の経路などはあまり書いては無く、多く

は裁判官の機智によつてたちどころに明快に決斷されて居るが、中には犯罪者の性質を穿つた探偵方法も書かれてあつて、犯罪學的考察に値するものが少なくない。

櫻陰比事以後の日本の探偵物語も、騙盜を取扱つたもの、外は、棠陰比事と同じく、裁判官が中心となつて事件を解決するやうに書かれてある。もとより短い話ばかりで、叙述の仕方、あまり巧いとは言へないけれど、その當時の世相をしのぶことが出来ると同時に今も昔も變りない犯罪者の性質を伺ふことが出来るのである。西鶴にしる、月尋堂にしる、かやうな探偵小説は人間の「智」的慾望を満足せしめるために書かれねばならぬものだとは思つて居なかつたらしく、やはり通俗小説と同じく犯人が早く罰せらるればよいといふ氣で書かれたらしい跡があり、と見える。

私は左に櫻陰、鎌倉、藤陰、三比事について考察して見たいと思ふのである。

### 櫻陰、鎌倉、藤陰の三比事

この三つの比事はその書き方が皆一樣であるから、一しよに論じようと思ふのである。藤陰(桃陰)比事の序を讀むと『棠陰比事あり、櫻陰比事あり、このごろ又鎌倉比事あり、棠陰は唐土事にして、和朝の者心をみかく種とはなりがたし、櫻陰、鎌倉の兩比事は、又作意のみにて誠なし。今此書は



昔、賢君の世に在て萬民の鏡とならせ給ひ、くもらぬ御惠を今の世に語り傳へて悦びをのべし賤が物語を綴り集めて七巻とし、唐土の書になぞらへ桃陰比事といふ事しかり」と書かれてあるけれど決して櫻陰、鎌倉をけなし得るだけの優れた物語ではないのである。尤も匿名の出版だから、かうした思ひ切つた事が言へたのかも知れない。さすがに月尋堂は、そんな悪口は言はないで、その鎌倉比事の序に『棠陰櫻陰は和漢の兩比事にして、世の人知るところ、其言の葉茂れり。予がなせる全部六巻の書は、往昔の物語を集め、これを狂言綺語になぞらへ、北條家のまつりごとをしるし、鎌倉比事とはいふ』とおとなしい文字をつかつて居る。西鶴の櫻陰比事には、かくのごとき序がないからわからぬが、何れにしてもこの三つの比事は作者こそちがへ、同じ行き方である。尤も文章そのものにはそれぞれの特徴があつて、西鶴の筆は如何にも冷靜な運び方で、かうした探偵物語を書くにふさはしいやうである。西鶴のどの小説を讀んでも、恍然として感興に乗じて書いたと思はれる所はなく、いつも冷かな理性を以て、批評しつゝ書いて居るやうに見える。かういふ筆の持主が探偵小説に成功するか否かの議論は別として、兎に角、櫻陰比事の書き方は如何にも冷靜そのものゝやうである。今その一例として、第四巻の『善悪二つの取物』といふ物語を原文の儘掲げよう。

『昔、都の町に車の玉鉾の道筋を狭めて、祇園祭の眞似して童子集り山の形を造りなせるに、守も無い子に無用の刃物を持たせける、其の中に七歳の童子遊び所を争ひ、九歳になる兒を大小刀にして口

を突裂き、立所を去らず相果てける、死せたる方の親の歎き殺せし方の親の迷惑、一町の詮議にも未だ智慧無きもの、仕業、とかくは堪忍したまへとさまゝあつかひしに、なか／＼合點いたさず、是非に敵を取るべしと人のいふ事うけ入れず、殊に母親辨別なく御前へ駈出づるを引留め、神主出家衆を頼み一代坊主にいたし、其兒の後を弔はずべしと、一親に詫びても取合はず、遂に御前に出でける。未だ七歳ならば何の差別もあるまじきと仰せければ、人を殺すほどの存じ立常々も外の倅とは格別と申上ぐる、時に機關細工の人形、金子一兩御出し遊ばされ、此二種を明日其童子に取らして見るなり、金子を取れば心あるによつて命を取るなり、人形を取れば命を助くるなり、善と悪との大事ここに極むるなり、愈よ明日連れて罷出つべしと仰付けられ、いづれも罷立ち宿に歸り、一門懇ろの衆中集りて御前で見しに變らぬ人形を調べ、これを小判と排置き、金子を取れば命の果つると嚇し、夜中同じ事を百度も教へて、又其朝も言聞かせて兩方御白洲に出でける。時に件の二種を御出し遊ばされ、人形取れば助くる小判取れば命を取るぞとの御意ある時、此の童子立行き小判を取れば、殺されし方の親類進みてかやうの不敵者と申上ぐる、又一方の一家は唯悲しくて覺えず聲を立て、歎く、仰せ出されしは、扱は智慧なき倅に極まるなり、命を取るといふに構はず小判を取る所偽爲し、命の外大切のものありや、こゝを以て助置くと仰せ出されけるなり』

全篇みなかうした書き方であつて、いかにも冷かに筆が運んである。鎌倉比事も藤陰比事も書き方



はこれによく似て居るけれど、全體を讀んで見ると、多少の暖かさが無いでもない。今左に比較のため、鎌倉、藤陰比事から、物語を一つづつ選んで、原文の儘掲げよう。

鎌倉比事卷の三『命は入相の金子』

『人の身はつほのごとし、魂は雀に似たり、鳥の來てつほの中に入る、網をもつて口をおほふ、網破るれば飛んで空にけかへるとかや、其頃鎌倉米町に天まやといふ兩替屋ありしが、ある日小者に同商賣のかたへ、取替金百兩もたせ遣しけるが、此小者道より行がたしれず、いまだ取逃げ欠落をする時分にてもなし、主人も小者が親も、草を分けてたづねれども、さらに行方なし、二日過ぎて暮方に鎌倉東土手をたづねてあるきしところに、鴉のあまた集りて鳴くを不審に思ひかなたこなたをうかやひ見る所に、土手の下に埋れ井あり、その中に小者が死骸切殺して有りけるをもとめ出しぬ、親どもの歎き、主人も召使ひたるもの、事なれば、ふびんに思ひ、此段を経時公へ申上ける、上より死骸を御あらためなさるゝに小者が口に木綿着物の裾らしき物をくはへて死にけり、是は切殺さるゝ時、下よりしがみ付裾をくはへるたるが、裾はなれぬ故に切殺したる者己と着物の裾をきつて捨ぬると御覽じて、扱此くはへたる裾を御詮議の種とおほしめして、主人に何にても思ひあたる事はなきかとの御たづねの時、私近所に梅野吉兵衛と申して、日ごろ男だてをしてその日すぎの者にて御座候が、此

ものかねて小者に衆道の色あるよしを申かけしを小者承引致し申さず候よし、日ごろ承はり候へども、此度の儀につき疑はしきことは御座なく候、此外に別に心にかゝる事、さしあたりては御座なきと申上る、そのものに女房はあるかとの御たづねにて、吉兵衛が女房召出され、おのれ少しもいづはるな、花いろの布子の裾は何としたぞと御たづねあれば、女房、その布子の裾は夫が炬燵にてあやまちに焦し申されて、つぎをいたし候、只今にても御覽下さるべく候と右の布子をさし上るに、つぎのあたり焦てあり、おのれ悪事は顯れたぞ、まことに焼けたらば、この焦たるぶんを残らず取かゆべきに、所々焦た所を少しづつ残したは何事ぞ、此布子の焦たか焦ぬかとの詮議が何としてあらんと思ひけるぞ、有體に申せ、己いつはるに於ては、いはせやうがあるぞと仰せらるゝときに、女房恐れ乍ら是までは陳じ申したり、有體に申上べし、私夫かの小者を切殺し候よしをひそかにたりしゆゑ、それはいかなる事ぞとたづね候へば、夫が申すに、かねて其方にはかくし、かの小者とは兄弟分の約束せし所に、ふと、いきぢをいひつもの、むねうちを二つ三つ打ちしが思はず刃がまはりて疵を付たり、主人もあることなれば後日の難儀を思ひ一向に切殺したり、此上は我も腹切らんと申せしを押しとゞめ、何とぞつゝまれんだけはかくし給へと、達て私の申せしなり、女の身にて何とやら嫉妬がましく思はれん事もかなしく、一つは夫が難儀を救はんと存じて布子のつぎも右の通りに拵らへ申候、是につけても夫の吉兵衛にはうらみ御座候、其金子を奪ひ取り申され候事、ただいままで



も私には知らせ申されずと一々に申上げける、此おもむきを吉兵衛に御たづねありければ、陳じ申すに及ばずつひに刑ををこなはれける」

藤陰比事卷の三「隠家を知る道角が耳」

「當二十七日よりこのかた、手負の療治仕りたる外科本道のこれあるに於ては、早々申來るべし、隠密に致し置、後日にあらはるゝにおいては曲事に可申付者也、地頭御在判  
乍、恐言上仕候、私儀は磯木村に住宅仕候、若田道角と申す外科にて御座候、一昨二十七日の夜、無僕にて庚申参詣り下向の節、松井橋を渡り候所に、向ふより虚駕籠を昇來候者、若田道角とさへたづね申さばまされあるまじと物がたりをいたし通り候故、まさしく私をはじめて尋ねまるる者と存じ、道角は某事なり、いつかたよりの使とうけ給り候へば、黒雲町澤田屋松右衛門方に急病人これあるよしにて、むかひ駕籠つかはし申すの口上ゆるゑ、しかと近付とは覺えず候へども、私失念を致したるか、又醫家のならはしにて承はりおよびて參候ものもあまた御座候へば直にかの駕籠に打のり罷越候所に、手負三人御座候ゆる外治内藥餘慶の望みにて、又駕籠にて送られ、私宅へ罷歸り藥をつかはし候へば、程なく夜も明候て、つくづく思案仕るに、闇の夜大雨なり駕籠にて十四五町まるるほどの間とは存じ候へども、方角東西のわかちも覺えず、そのうへ今

月三日何の沙汰も申來らず、不審に存じ、黒雲町澤田屋方相尋ねさせ候所、黒雲町と申所も、澤田屋と申者も、當地には御座なく候よしにて、兎角方角しれ不申、始終こゝろもとなく奉存候處、御觸のおもむき拜見仕候ておどろき入、御斷申上候、龜急なる儀を仕り後悔不念千萬に奉存候故、一札さし上候以上。

月 日

磯木村 若田 道角 判

地頭仰られしは、手負の療治は此方より指圖なくては致さぬ筈、卒爾に仕るのみならず、その病家も覺えざるとは段々不届なり、右の手負の宿所よく見届けずしては、こゝろ覺えになる儀はなきかと御たづねあるに、つり鐘の聲ちかく聞え候と申す、寺町ちかき所にはいづかたも同前にちかう聞ゆれば、證據には成がたし、其外には琴三味線尺八の音仕りたると申す、それも家々に慰みに仕るか、警女座頭は常に指南仕る所あまたあれば、それ等を證據に所は知れ難しと仰せあるに、道角又おもひ出し、瀧の音手ちかく聞え候と申し、しからは山よせの家たるべしと、すでに瀧ちかき寺社民家御詮議に極るとき、公事役の老體まかり出、これもたしかに所はさゝれ申まじく、大雨の夜なれば築山の谷あひ、泉水などに落こむ音、時ならぬ瀧に相きこゆることあるべし、其外にしかといたしたる手がかりを思ひ出さねば、其方の難儀なりとあるに、道角眉をひそめ、しばらくありて申上るは、私むかしある國の守の側ちかく奉公仕相所に、古主能藝対申せしが、大事に仕るほどの音



曲うけ給り覺え候。しかるに此手負の合壁に、石橋の獅子の笛をひそかに吹すさむ音相聞え候と申上る、地頭役人これ詮議の種なりしかれども一儀相濟までは道角は町内へ御預けにて、扱此石橋の笛のゆるしを得たる者吟味あるに、二人のうち一人は關東にくんだり、今一人の住居せし町内の名主五人組をめしよせられ、町中に裏座敷か隠居がまへの貸屋もちたる者の屋敷を微細に詮議あるに、笛吹甚四郎が北隣のうち座敷に、月切にかりたる者共、手負てしのび居たりけるが、盜賊におし入ける高家方にて、見合されて切たてられし者共にてめしとられけるとなり』

この二つの探偵物語の構想は可なりによく出来て居るが、後者は板倉伊賀守の裁判談の焼き直しである。京都のある外科醫が駕籠に迎へられてある山奥に連れられて行き、金創の治療を頼まれて歸される。で、不審に思つて届出ると、板倉は何か手がかりになるやうな事はなかつたかときく、すると醫師は佛法僧といふ鳥の鳴く聲をきいたと答へる。板倉は直接松尾山へ捕手を向けると、果して山賊どもの隠れ家が發見された。これは板倉が、松尾山に佛法僧のなくといふ古歌を知つて居たからである。

前者の物語も或は何處かにあつた話の焼直しかも知れぬが兎に角探偵味には富んで居る布子の焼けた部分をつぐのならば、焼けた部分を皆切り取つてつぐべきであるのに、所々焼けた所を残して置いたのは怪しいと睨むところ、一寸シャーロック・ホームズめいて居る。

櫻陰、鎌倉、藤陰の三比事の中には、この外に、まだ可なりに探偵味に富んだ物語が數多くあるけれども、どれも皆何となく物足らぬところがある。尤も文章が短かいための物足らぬ感じもあるけれど、初め相當に讀者に期待を抱かせて、結末は平々凡々に終るのが、物足らぬ原因の主要なものである。結末に於て讀者の意表に出るといふ書き方のものは一つもなく、いはゞ尻切れとんほの感じがあら。その例として、私は鎌倉比事中の「茜細工は奥の間のたたみ」といふ物語を述べて見よう。

鎌倉谷の末町に家來を一入召し使つて居る浪人が住んで居る。日ごろ出入りする絹屋の手代が節季に金を取りに來たので、いつもより機嫌よくあしらつて金子を渡して請取を書かせ、さてそれから、奥の間に見せるものがあると言つて手代を導き、家來と二人して斬り殺してしまつた。

先日來、この浪人は細工をするといつて茜を買ひ、夫を戸障子や壁にこぼして、血の樣に見せかけて置いたので、手代を殺した血が飛散しても、旨く茜のとほつちりと紛れて了つた。

それから其浪人は絹方屋へ人を遣はし、最前手代に金を渡す時に註文した羽二重をまだ持つて來ないのはどういふ譯かと尋ねさせた。すると絹屋の方では、まだ手代が歸りませんから、歸り次第様子を見て御届しますと答へた。が、手代はその日から行方不知になつたので、絹屋では、その手代が懸金を集めて逃げたのだらうと推定し、請人と親許へ談判した。

話變つて、毎晩浪人の門では、夜更けに犬が頻りになくので附近の噂の種となつた。この噂を聞き



た手代の母親は、上へ訴へ出た『私の悴が毎晩夢にあらはれまして、自分は人に斬り殺されたから、どうか敵をとつてくれと申しますから、悴が懸金にまはつた先を御調べに預りたい』と歎願した。上では之を尤もに思ひたまひ、手代が當日廻つた先を一々御調べになつたところ、浪人の言ひ分に曖昧なところがあつたので、浪人の家來を別室に御招きになつて、『主人が白狀した上は主人に科はない、汝は黙つて居たから、科人は汝にきまつた』と、高飛車に仰せになると、家來は驚いて罪狀を逐一白し、『先日來、手代の死骸を捨てようと思つて、夜更に門をぬかすと犬が頻りに吠えますので、幾度もかつぎ出しては戻り、只今は座敷の下に御座ります』と言つた。

この自白を書き取らせて今度は浪人に御見せになると、浪人は其場で恐入つた。『私は西國方の武士の悴で御座いますが、御主人の勘當を受けて鎌倉へ參りました。その節には少々金銀の貯へもありましたが、ふと龜ヶ谷の遊女町へ足を踏み入れたが病附で、しまひには武器馬具迄も賣拂つてしまひました。ところが馴染の遊女の親が永々のわづらひで困却して居りました擧句、愈よ飢ゑ死しなければならぬやうになりましたので、遊女は年期を切増すと申しましたのが不憫になり、何とかして金を拵らへてやりたいと思ひまして、悪いこととは知り乍ら、絹屋の手代を殺して、その懸金を奪つたので御座います。一人の家來はその節國許へ遣はしてありましたので、その場の手傳ひを致したのでは御座りません。歸つて來ました時にその話を聞かせたので、うろたへて、そのやうに白狀したので御座

いませう。絹屋の手代一人を殺すに何として家來などに相談致しませう。私一人の仕業で御座います』かういつて浪人は家來の罪を潔く我身に引受けて刑に行はれた。

讀者はこれを読んで、これだけの材料があつたなら、もつと面白く書くことが出来たらうに、と思はるゝであらう。手代を殺すために、豫め、茜を買つて、細工ものをすると見せかけ、赤いものを疊や壁に打かけるなど、中々巧妙な計畫といはねばならない。その折角の計畫も、物語りの中では一向花を咲かせて居らない。又夜更けに犬の吠える話も頗る興味があるけれど、それがあまりに呆氣なく手代の母親に知れてしまふのは何となく物足らない。

之を要するに、三比事に載せられた探偵物語は、讀者に考へさせるといふよりも、やはり感じさせるやうに書かれて居るに過ぎないのである。

### 探偵小説としての三比事

前章に私は、櫻陰、鎌倉、藤陰三比事の内容が、互に似通つたものであることを述べたが、物語そのもの、性質からいふと、それぞれ多少の特色を持つて居るやうである。尤も櫻陰比事と鎌倉比事は形式も内容も殆んど同じであるといつてよいが、藤陰比事は、これ等とは少しちがつて居る。前にも



示したとほり、その形式が地頭への訴状によつて犯罪なり争論なりの内容が示されてある點に於てちがふばかりでなく、ユーモアに富んだ話が比較的澤山集められて居る點に於てもちがつて居るのである。

抑も探偵小説には「推理」以外に、ミステリー（怪奇）と、ホーロウ（凄味）と、ウィット（機智）と、ユーモア（諧謔）のどれかなくてはならない。ところがこの三つの比事には、ミステリーとホーロウとは極めてうすく、ウィットとユーモアと多少の「推理」とが認められるだけである。その「推理」もどちらかといふと大したものではなく、「探偵」の任を兼ねて居る裁判官は、屢ば直観によつて事を断じて居る。で、残るところはウィットとユーモアだけであるが、そのうちユーモアは、櫻陰、鎌倉の二比事に乏しく、藤陰比事に於て比較的豊富である。だから、探偵小説としては藤陰比事が三つのうちで最も勝れて居るといつてよいかもしれない。私は左に藤陰比事中のユーモアに富んだ話の二三を紹介して見ようと思ふ。

白石町に小細工屋の平内といふものがあつた。ある日つらつら考へて見るに、京都のやうな大きな都會では毎日死ぬ人の數が随分澤山あつて従つて葬式の數も随分澤山ある。ところが、昔からの習慣で、葬式の際には、棺桶の中へ六道錢といつて烏目を六文づつ入れて死人と共に葬る習慣になつて居るから、これを全體に計算して見ると、よほどの金錢の費である。だからこの浪費をふせぐために、

錢の形をしたものを拵らへ、それをやすく買へるやうにして、六道錢の代りとしたならば世間の人も大に助かる譯である。そこでその六道錢代用のものを專賣特許にして貰へば自分は大に助かる……かういふ蟲のよい計畫を立て、地頭のところへ願出た。

地頭は早速平内を御召しになつて、徐ろに仰しやつた。「いかにも其方が申す通り、大切な寶を土に埋めたり火に焼いたりすることは國家のつひえである。けれど、六道は地藏が管轄して居るといふことであるし、なほゑんま王の承諾を経なければ、六道錢の規則を變へることが出来ない。で、其方は早速冥土へ行つて地藏菩薩とゑんま王に對面してくるがよい。娑婆のいとまは即時にとらせるから」平内はぶる／＼と身を顫はせて、夢中で我家へ走りかへつた。

「あらお前さんどうしたの、頭から血が流れて居るわよ！」と、女房は驚いてたづねた。

この言葉にはつと我にかへると、平内は頭のとつべんにはけしい痛みを覺えた。彼はあまりにあわて、走り出た／＼め、御門のくゞりで、した／＼かその頭を打つたのである。――

この物語のおしまひのところは、探偵小説として相當の出來だと思ふ。

壺井町に辰巳屋藤兵衛といふ絹布商があつた。家族は先妻の子藤六と後妻との三人、外に手代小僧をつかつて、可なり盛大に暮して居たが、藤兵衛が病死するなり、後妻は繼子の藤六をうるさがり、手代と心を合せて、長崎へ遊學に出さうとした。そこで藤六は我家の將來をおもんばかつて、地頭に



向つてこの旨を訴へ出で繼母に意見をしてもらふやうに願つた。

地頭は双方を呼び出して調べて見たところが、繼母の方が悪いので、今後は睦しく暮せと諭して歸した。後妻は濫い顔をして歸つたが、どうせ繼子との仲は圓滿に行く譯もないから、こんな家には見切りをつけて、その代り故人が平素大切にして居た寶刀を奪つて分れようと決心し「家に居ては煩悩の種ですから、出家致したいと思ひますについて、故人をしのぶために、故人の残して行つた刀を形見として頂かせて貰ひたい」と地頭に向つて言葉巧みに願ひ出た。すると地頭は尤もに思召され、藤六を呼んで繼母の希望を告げ、刀を譲るやうに承諾せしめた。

この刀は故人が毎日、持佛堂へ看經する度毎に錦の囊から取り出して、「この刀の功德で七十までも生きる事が出来たのだ」と禮拜したものであるから、彼女は、此家に傳はる第一の寶であると思ひこみ、少くとも百兩や二百兩の値はするだらうと察して、形見分けとして目をつけたのである。だから地頭の處置で、否、地頭をだましてまんまと譲り受けたことを彼女は内心大に誇りとした。

ところが、愈よ縁を切つて、さてその刀を方々の刀屋へ見せると、鏝一文の値打もないといふことであつた。彼女は大に驚いて自分の見込みがひを歎いたが、今更どうすることも出来ず、ひたすら、自分の奸計を呪はざるを得なかつた。それにしても故人は、何故にその刀をあれ程に大切にしたのであらうか。

それは故人が若いときのことである。ある日稻荷祭を見物に行つて、一杯機嫌で附近の若いもの口論し、遂に脇差を抜いて先方を斬りつけたが、刀がなまくらであつた、めに先方はかすり疵だに受けず、そのうちに仲裁がはひつて、血を見ずに喧嘩は終つた。酒がさめてから藤兵衛はつくづく思つた。「あゝよかつた。若しこの脇差がなまくらでなかつたなら、自分は必ず人殺しをして、自分の命を無くして居たかもしれない。して見ればこの刀は自分の命の恩人である」かう思つて其後彼はこの刀を錦の囊に入れて、毎日取り出しては感謝することにして居たのである。

これも中々氣のきいた話だと思ふ。刀を大切にしたり理由など頗る面白く、取り扱ひやうによつては相當な探偵小説になると思ふ。

このほか、附近の出火に際して、ある絹布屋が葛籠を七つ運び出すと、いつの間やらそのうち三つが、わざわざ俵とすりかへられて居たが、その實、盗まれた葛籠の中身は相場附けの書状や反古や下男に着替であつて、之れに反して、山葵は、青物町が焼けた、めに高價に賣れ、却つて絹布屋が儲けた話。鎗持の我左衛門といふ者が頓死して、寺で僧侶が引導を渡して居ると、急によみがへつて、僧侶たちに喰つてかゝつたので、僧侶が棒を持つてた、き殺さうとすると、我左衛門が竹縁の丸太柱を引抜いて大立ちまはりを演じるといふ話。むかで屋といふ代々評判の饅頭屋の隣りに新らしく饅頭屋が出来、而も暖簾に同じく『むかで』の形を染抜き赤前垂の女を澤山雇つて商賣したので、本家は急



にさびれてしまひ、本家の主人は憤慨のあまり地頭に訴へ出ると、新らしく出来た饅頭屋は呼出されて、『わたしの家の暖簾に染め抜いたのは、むかではなくけじくで御座います』といった話など、いづれもユーモアに富んで居ると思ふ。

藤陰比事の中にはこの外にもまだユーモラスな話が相當にあつて、どちらかといふと、すべての話の底にユーモアがかくされてあるといつてもよい程である。之に反して、櫻陰鎌倉兩比事にはユーモアが乏しい。全然ないではないけれど、たまくユーモラスな話だと思ふと、『醒睡笑』の模倣であつたりするのである。

### 三比事に書かれた探偵方法

櫻陰、鎌倉兩比事にはユーモアの少ない代り、探偵方法に色々奇抜なものがあつて、その點は藤陰比事の及ぶところでない。

むかしの探偵方法には色々あるが、第一は直観、第二は迷信的方法、第三はトリック（詭計）を應用する方法、第四は手がかりから推理を行ふ方法などがこれである。三比事を通じて、直観によ

る探偵方法の應用された物語は相當に澤山あるけれども、その興味はむしろ、犯罪そのものにあつて、探偵といふ立場から見るとは頗る物足りない。で、私は前述の第二、第三、第四の探偵方法の取り扱はれてある物語を順次に紹介しようと思ふ。

迷信的探偵方法とは迷信的な鑑定方法による探偵を意味するのであるが、現今から見れば『迷信的』であるものゝ、その當時に於ては、立派に『科學的』であつたのである。だからその當時の『科學的鑑定』といへぬことはないけれど、その當時の『科學的鑑定』の意味は現今のそれと根本的にちがつたところがある。それは何かといふに、その當時に於て、鑑定の結果はその儘『動かぬ證據』であつたのに反し、現今では鑑定の結果は、推理の基となる一つの『手がかり』に過ぎないのである。言葉をかへて言ふならば、むかしの鑑定は絶対的で、今の鑑定は相對的である。こゝに所謂『見込搜索』と『科學的搜索』との區別が存在するのである。

さて、櫻陰、鎌倉兩比事の中にどんな鑑別法があるかといふに先づ第一には血液の鑑別法である。これはいづれ支那で行はれたものをその儘引用したらしい。櫻陰比事には男女の血液によつて、その男女が姦通したか否かを鑑別する話がある。

『昔都の町、猪熊通りより染帯を拵へて丹波の山家に通ふ商人あり、此者の妻、舊は御所方の末の女藤役してありけるが、流石風儀は花の香今に残りて人皆目に懸けける。身代輕きものなれば一人の留



守を配慮しながら渡世は是非なし、殊更此男格氣深く、旅立つ折ふしは女の知らざるやうに守宮の血を取つて左の腕に附置ぬ。これを「蟲しるし」とて、其女、男にまみえぬうちは何ほど洗ふても落ちざる例あり、昔日いかなる好色人かこれを工夫仕出されける。此商人の同町に浮世男ありて此女を眼にて忍び、ものは謂はずしてこがれけるに、女も自然と此男に思入りしに、一夜枕並べし夢を見しに、男もまた其夜忍び入りて契をこめし夢見る事、互に不思議なる縁と思ひける折から、若い者大勢語りぬる中にて何の遠慮もなく、此事を夢談話の種として大笑ひ扱は世間は種々なり、其後彼の男丹波より歸りて心だめしに「蟲しるし」を見るに消えて跡なき事を疑ひ出し、我女房の自由はさまざま、無理に懸つて強く詮議すれば、罪無き身にも悲しく留守中の事は少しも包まじと、諸神に誓文を立て彼の男の夢までも語り聞かせければ、それは隠れなき美男にていよく氣を廻し、世上を聞き合すに、彼の男の夢物語彼方此方に沙汰あれば、扱は二人が不義外に知られて其口留に斯くはいひけると聞えたり、これは吟味すべき所と分別して、たとひ夢物語にせよ男のある女の事を身に添ひたる風の風聞堪忍ならず、女も夢に逢ひしといへり、此分にては不思議晴れず、これ密通に紛れなしと此事御前へ申上げ、兩方召出され御聞届け遊ばされ、これは不義の證據なし、然れども夫のある女の事戯れて取沙汰する事落度なり、又女も夢なればとて無用の申事なり、愚なる男の疑ふも道理なり、密通か夢の契か、此二つをためし、其上にて申付くべしと、銀の猪口二つ御出し遊ばされ、女の指の血を兩方へ

搾り込ませ、本夫の指の血一つに搾り入れさせ、又密夫の指の血を搾り入れさせ、少時置きて御覽なされけるに、本夫の血は女の血と一つに凝固りぬ。また密夫の血は女の血と筋立ちて分れぬ。これ眞の契を籠めざる證據見せたまひ、格別なる御詮議に男胸を晴らし、此女に仔細なく添ひけるとなり「蟲しるし」の迷信、即ち守宮の血を女の腕に塗ると、男に關係しないうちには消えぬといふ迷信はたしかに漢の武帝の故事から来たものであらう。端午に蜥蜴を捉へて丹沙の中に入れ置き、翌年の端午に之を碎いて丹沙と調合し、後宮の婦人の腕に塗ると男に關係して居ないものは洗へばすぐに消えるが、關係したものは赤い痣が残るといふのである。趣は反對であるけれど、「蟲しるし」の迷信は支那から傳はつたものにちがひない。又銀の猪口の中へ男女の血を滴らして、肉體關係の有無を知る方法もかの洗冤録などに記されてある「一滴血の法」即ち父子か父子でないかを、血を滴らしあつて見る方法から思ひついたものであるにちがひない。尤も洗冤録が日本に廣く讀まれるやうになつたのは西鶴以後であるが洗冤録の出來たのは宋時代であるから、西鶴は讀んだと見ても差支ないであらう。無論洗冤録以前にもかういふ迷信はあつた筈で、いづれにしても支那から輸入されたものである。

次に鎌倉比事には一旦又について洗ひ落した血を再びあらはす方法が書かれてある。  
 『小人は閑に居てよき事をなさずとかや、鎌倉の青侍に青木藤内といふ者、稽古矢の遺恨によつて、山村平次といふ者を討果す期にのぞみて、傍輩共兎角とあつかひ、左右方宿意なく中和りして、後に



藤内闇打にあひて死す。親類ども相手は平次なりとて敵にとらんといふ。平次大小を投げ出して身に覚えなし、一たび遺恨のやみて別心なきしるしに、盃までさしかはしたり、それに討べき仔細なし、腰物にふしんあらば、いかにも存分ならんといふ。さはいへ藤内が身にとつて意趣あるもの外になしとて御前に罷出ける。最明寺殿平次の大小を召され、御吟味の上にて仰せらるゝには、平次が所存覚束なし、武士のたやすく大小を投出して吟味を乞ふ段あるまじき仕方なり、さらば茸毛馬の糞にて血付の刃物をぬぐへば、さらにあとなし、しかれどもそれを火にてあぶれば其血の油あらはるゝなりとて、御前の火鉢にてあぶらせらるゝに、成ほど油のしとひ出たり。紙にてぬぐひ取りて見るに、血まざくゝと付たり。扱も未練の心底やとて切腹にも仰せ付られず首を刎させ給ひけり』

上記の血痕鑑定法が支那から渡つたかどうかを私は知らない。西洋では百年ほど前に血液に硫酸を混じてガラス棒でかきまはすと、そのにほひによつて、男か女か、他の動物の血かわかるといふ血液鑑別法があつたが、いづれも現今の科擧では説明することの出来ぬものである。

この外に櫻陰比事には迷信的な醫學鑑別法が二つ掲げられてある。一つは毒藥を飲まされて口のきけぬ男に、ある妙藥をのませると、飲ませた相手の名を呼ぶといふ迷信で、『……残らず召出され御詮議さまゝなれども、本人夢中なれば、いづれをさして御吟味なり難し、少時御思案遊ばされ、御手前醫者仰付られ、斯る時申傳へし妙藥を世のために吞せ見よとの御意にて俄に拵へける。故き鼓の破

革を黒焼にして彼の病人に與へたまへば、腹中に入ると、毒を飲ませし相手の名を自然に呼ぶといふ事、唐土の醫書にある故、今此の不思議を見るなり、大事の聞きものぞと仰出されし時、これはと驚くものあり、また何をか疑ふものもあり、各々心々に耳をすましかけるに、しばらくあつて病人唇に動ありて、咽内にてそれが名を指して太鼓の茂六々々といふ事ありと聞え……と書かれてある。唐土の醫書とことわつてあるから、この迷信が支那の起原であることはいふ迄もない。今一つは罪を犯したものの脈はいかに平靜を装つても地脈と異なつて大に騒いで居るといふ迷信である。これは支那から來たものかどうかわからない。一寸きくとミユンスターベルヒなどの提唱した心理學的探偵法に似たところがあるけれど、これで有罪無罪を決定するのは頗る危険である。

なほ老人が生ませた子は旭日にうつしても影が出来ぬといふ迷信によつてある裁判を行ふ話もあるが、これは明かに支那の棠陰比事にある話を模倣したものである。

## 二

次は探偵が犯罪者に對して行ふトリックである。三比事に犯罪者の心理を應用したトリックの話が多い。

櫻陰比事には、『惡事見え透く揃へ帷子』と題して次のやうな話がある。姉ヶ小路の針屋に容貌の人



れば夜も日も明けぬといふ有様であつた。後にはたうとう『御前様』とよばれる身分になり、侍女を多くつかふやうになつたが、ある日夕食を攝つたところ、どうした譯か俄かに腹痛を催ほし、手足がすくみ呼吸が困難になつたので、大騒ぎになつて醫師を招いたけれど手當の效もなく絶命した。醫師が早速食物を吟味すると、味噌の色が怪しいと思はれたので、飼猫に食はせて見たところ、猫は果して、暫らくの間に死んだ。そこでいよく毒殺であるとなつたので、主人の大名は自分で犯人の詮議も出来かね、ある發明な人に探偵を依頼した。雇はれた探偵は犯人が女中のうちにあると睨み、總計十六人に絹の帷子を着せ、一つの座敷へ追込んで『此度の犯人はこの中にあるから、明日拷問する』といつて、灯を消して外から戸に錠を下した。折しも夏のことであつて、蚊は窓から遠慮なく飛込んで彼女たちを刺したので、皆々あばれまはり、騒ぎ合ひ、ふざけあつて、やつと苦しい一夜を過ぎた。朝になつて探偵は彼女たちを一人々々呼び出して吟味したが、そのうちの一人の着た帷子に皺のよつて居ないのがあつたのでその女に向つて犯人はお前だらうときめつけると、顔色をかへて自白した。それによると以前この家に居た御妾に頼まれて『御前様』を殺したのだと言つた。探偵がどうして犯人を見つけたかといふに、身に覺えないものは樂寢をして、衣服に皺がよるが、犯人は一夜中眠らないから衣服に皺がよらぬのだといふのである。鎌倉比事にも、『祕事は鎌のごとし』と題して次のやうに書かれて居る。

『……中にも西ヶ谷の織殿やは、此度の御悦びに、絹布卷ものあまた賣り、金銭の山をなし、此はひとて、其日は織ものやにも弟子どもをやませ、おもての長のうれんをおろし、外よりの人の出入をやめて、よるひるのわかちなく酒宴をしてぞ遊びける。其夜に金子十兩包 失せたり。いろ／＼詮議すれども無に極りて後亭主ある人に此ぎんみを頼みけるに、此人新らしき三方に大神宮の御稜串を弟子十七人の數ほどこしらへ置いて、朝手水をつかひて一本づつ取り、暮にまたひとりづつ持よるべしと弟子共に言ひ渡し、扱此人亭主に小聲になりて、弟子どもの聞くやうにきかぬやうに、されば此金子をぬすみたるものには大神宮の御罰にて長き串をあたへたまふ是神道祕密の術なりと語り、さらぬ體にて歸りけり。扱暮方になれば弟子共残らず、取たる御稜串を持出るに、すぐれて短き串を持出る弟子あり、それをとらへて詮議しければ、いまだ金子の不足もなく出しぬ。心正直なるものはなんの事もなく取たる御稜串を其まゝ出す、心のわだかまりたるより、我にこそ神明の長きを與へ給はんとて、串を折りて出しける。其折たる程、餘の串よりは短くて、我と我身の科をあらはしけるとなん、おろかなりとも又神明の御罰おそるべし恐るべし』

以上二つは犯罪者の犯行後の心理を巧みに應用してトリックを行つた例であるが、現今でもこれに似たトリックは極めて有効であると思つて度々行はれるものらしい。

この外にまた、櫻陰、鎌倉兩比事にはトリックによつて犯罪者を自然にあらはれ出さしめる話があ



る。櫻陰比事の中に、頼母子講の懸金を盗んだものを詮議するために、懸金に集つた男たちのうちに犯人があると睨んで、その男たちの妻又は姉妹とその男たちとをそれぞれ一組にして、講の場に居合せた罰として毎日大きな太鼓をかつがせて市中を廻らせ、その實その太鼓の中に發明な小坊主をかくして置いて、夫婦又は兄妹の話を盗みきかせ、遂に、ある妻が不平を言ひ出したのを、夫が宥める言葉から、その男が犯人であることを知る話や、矢を射こまれて死んだ男の犯人をさがすために、ある夜の附近で、「泥棒、泥棒」と叫ばせ、弓をかゝへて走り出た男を犯人と見做す話などがあるが、鎌倉比事には、「因果はめぐりあふ常陸帯」と題し、次のやうに書かれてある。

「鎌倉本町に定都といふ旅籠屋あり、毎年のほる常陸商人、只一人とまりたり、其夜あるじの女房を何ものとも知れず殺しぬ。この商人のわざなりとて敵に取られぬ。鎌倉中の取沙汰に最明寺殿には常にかはりて龜末なる成敗かなと諸人さゝやけども、そのみにて一とせと暮れ二とせと過ぎ、今は三年の後に、常陸商人の弟、鎌倉こそ兄の最後所と思ひ、せめてなき跡なりともとむらはんとて鎌倉へのほる通すがら、先にたつて男二人行きけるが、物語るをきけば、それはもはや三とせになる、おもはずも無實をうけて常陸商人こそ殺されたり、おもへば不便のこと也。今は隠すべきにあらず、かの旅籠屋は盲目ゆゑ、女房に心をかけてたび／＼言ひ寄ると雖も承引せず、あまつさへ夫に告げんといひける故恐ろしく一向身の難儀に及ばんよりとひそかにしのびこみ刺し殺したり。我故に科なきも

のを二人迄命をとりしとおもへば未來も覺束なしといふを、あとよりとくと聞すまし、其ものの這入たる家をよく見届けて、すぐに言上しければ、最明寺殿、それ常陸のものを出牢させて、弟にあはせよと仰せられて、生きて二たび兄弟の對面をかぎりなく喜ぶうちに、かのまことの人殺しをからめ來り御成敗なされける。三年以前に殺されしものは外に成敗なさるべき科人を、常陸商人の小袖を着かへさせて常陸ものなりと御觸あつて御仕置になされける。誠に鵬鵠の心燕雀は知らずとは是なりとて諸人かんじにけり」

この話は『大岡政談』の中の小間物屋彦兵衛に關する「皮剥獄門の件」と頗る似た所がある。『大岡政談』の作者が果してこの話に依つて小間物屋彦兵衛の事件を潤色したかどうかはわからないけれども、兎に角、犯人を見出すには頗る巧妙なトリックといふべきであらう。

## 三

最後に「手がかり」を基として、推理によつて犯人を探偵する方法に就て述べよう。これは前にも述べたごとく三比事を通じて話の数が比較的に少いのである。前章に私は、いづこともなく駕籠で連れられて行つた醫師が、石橋の獅子の笛が隣家で聞えたといつた言葉から、地頭が犯人の住家を探し當てるといふ藤陰比事の話を紹介して、板倉伊賀守の裁判談の焼直しであらうと言つたが、櫻陰比事の中にも同じ話があるから一寸紹介して置かう。やはりこれも板倉伊賀守の裁判談の焼直しであら



う。題は『大事を聞き出す琵琶の音』といふのであつて、一條のある外科醫がどこともなう連れられて行つて二十日ばかり滞在し、金瘡の療治をさせられて歸される。この事を訴へ出ると裁判官は、何か先方で變つたことはなかつたかとたづねる。醫師は、窓から山が見えたこと、月夜に琵琶の音をきいたこと、月の二十三日の夜に、一晚中、山で群集の聲がしたことを語る。裁判官はそれによつて、山の群集を愛宕の參詣と判断し、後、京中の琵琶法師をたづねて、近い内に嵯峨へ招かれたものをさがし出し、遂に金瘡療治を頼んだものたち——即ち盜賊——を捜し當てるといふのである。

藤陰比事の中には、盜人から切り取つた片腕によつてその盜人をアイデンチファイする物語が書かれてある。土藏の屋尻を切る音で主人が眼をさまして様子をうかがふと、盜人は、切口から片手をさしこんで、金銀の革袋を盗み出さうとしたので、主人は飛びかゝつてその腕をつかんだが、先方は大力で今にも振りはなしさうになつたから、己むを得ず刀でその腕を切り落とすと、盜人は一目散にどこかへ逃げて行つた。そこで主人はその腕をもつて地頭に訴へ出ると、地頭はそれを見て、太鼓師だと判断した。といふのは指ごにたこがあつたからで、それから眞犯人を逮捕することが出来た。

指のたこだけで太鼓師だと判断することは出来さうもないことだが、兎に角手がかりによつて判断した好箇の例である。然し同じく藤陰比事にある『身の上知らぬ五助が呼聲』といふ物語りは、人の言葉つかひを手がかりとして判断した最も興味ある例であつて、現今の探偵の參考にもなり得ると

思ふ。

『乍ら恐言上仕候、私儀は北村の重兵衛と申者にて御座候、南村の七九郎と申ものと當月毎年申合せ、河内へ木綿買に罷越候に付、此度も申合せ、同道仕る筈に前夜約束仕り、今朝小瀬川と申す舟渡し場にて、出會申す時取いたし候故、早天にかのわたし場へ參り相待申し、はや六つになり候へ共、七九郎見え申さず候に付、あまりふしぎにぞんじ、わたし守五助をやとひ七九郎かたへさそひにつかはし候へば、約束の通り今朝七つまへに宿を出申候よし、女房返事仕り候候故、不審に存じ候處、七八町川下の井關に死人ながれかゝりこれあるよし風聞仕り候に付、はせ參り見申候へば、七九郎丸はだかにて相果これあり候故、早速七九郎女房かたへまゐり告しらせ候へば、女房かへつて私をうたがひ、木綿買申すもとで金二十兩銀五百目持參申候へば、これを取らんとて殺したるものとねだり、男のかたきとのしり申候、私毛頭おほえ御座なく候間、御吟味被遊下され候はゞ、ありがたく可奉存候以上。

月 日

北村口重兵衛判

地頭聞しめし届けられ、七九郎が女房を召出され、夫は何時に宿を出しぞ、七つまへと申す、わたし守が七九郎をさそひにまゐりたるは何時ぞ、明ヶ六つと申す、渡し守は何と申してきたりしぞ、お内儀々と申しておもての戸をたゝきたると申す、地頭おほしめすは、七九郎が名をこそ呼びて起す



べきに、女房を呼おこすこと不思議とおほし召し、急いでその渡し守をめしよせられ、拷問仰付られければ、「金銀はいまだ一分も取申さず、そのままこれあり候、ひよつと深夜に候故出来心にて仕候、命の儀はおたすけと白状申すにつき、盗賊人殺しの重罪たる御仕置仰せつけられるとなり」短いけれども、行き届いた物語であつて、三比事を通じての白眉といつてよいかもされない。が然し、繰返して言ふ通り三比事の物語は全體を通じて言へば優秀は殆んどないといつてよい。私は次章に三比事にあらはれた犯罪及び犯罪心理について書いて見ようと思ふ。

### 三比事に書かれた特種の犯罪方法

櫻陰、鎌倉、藤陰三比事に描かれた犯罪方法に就て考へて見るに、これといふ珍らしいものはないけれど、中には多少奇抜なものがないでもない。奇抜なといつても西洋の探偵小説などを讀んだ眼から見れば何でもないけれど、兎に角、その當時では多少目新しく思はれたにちがひない。尤も三比事の作者が實際にあつたことを物語としたか、或は全く空想で拵らへあげたのかわからぬけれど、なるべく奇抜な謎を提出してそれに自然な、合理的な解決を與へようと思つたことは明かであつて、こ

のことは、今の探偵小説作家の態度と少しも變らないのである。

さて、三比事を讀んで氣のつくことは、他人の迷信を應用する犯罪物語が、三比事のどれにも載せられてあることである。これはその昔實世界に於ても、極めて屢は行はれた所であつて、現今に於ても盛んに行はれて居る。かの有名なロシアの怪僧ラスプーチンの犯罪はこの種のものに屬せしめてもよく、近ごろ日本でも和製ラスプーチンとか言つて騒いだことなどを考へ合せて見れば明かである。幽霊や八卦をだしにつかふ犯罪などは、人間の存在する限り、恐らくその跡を絶つまいと思はれる。私は左に三比事に描かれた二種の物語を紹介しよう。櫻陰比事に「參詣は枯木に花の都人」と題して次の物語がある。

「昔、都の町より萬人信心して松の尾の奥山へ參詣する事あり、旅僧こゝに庵を結び、諸病を一日の内に平癒いたさせけるとの取沙汰、次第に籠堂建て續きてなほ奇瑞をあらはし、膝行は立ちて歸る、啞は又ものいひ、聾は人の言葉を通じさせ、之を薬師如來の如く申立て、晝夜人の山、谷は切草履にして埋みぬ、其頃錢の相場のがりしは毎日此所に散錢とまるゆるぞと、兩替屋仲間に心をつける程なり、或時此法師のいへるは、我諸天に大願あり、これ皆衆生の爲なり、志成就するに就ては當山の諸木立枯して、明の春また原の葉色を顯すべしと語りぬ、此言葉に違はず、見え渡りたる梢自然枯木となれば、随分賢き人もこれに疑晴れて崇めければ、愚かなる人はなほ感涙を



流しける、此坊主賣僧にて最前の病人も仲間の慥へもの、散錢取り込みよい程に立退く用意する時、山里は構はざりしに、麓の里人申しけるは此山の木にて海道筋の橋を先年より懸け來りたる所に、諸木立枯れして、末々の事心許なし、御法力にて舊の如くになし給へと、百姓多勢に催促せられ、俄かに立退く事も散錢のしまひ方なく、とやかく思案するうちに申上げられ、御前の沙汰になりて出家里人を召され、右の次第を御聞き届け遊ばされ、それ草木も心ありて萬花の色を顯はし、梢蔓れば自然と國土の爲になるに、なんぞ若木を枯す故なし、汝其以前は醫師の賣僧になれるなるべし、仔細は肉桂を立木の皮の中に籠らせ置けば、何によらず其の木が枯るゝといふ事を鍛錬して、人の氣を取ること無用の企世の費なる曲者なり、世の仕置者なれども一度出家の形をいたせし身なれば、一命は助け置くなり、これより直ぐに丸裸になして五畿内を拂ふべし、散錢は少しも相違なく勘定を仕立て、これを丸村として預け置き、永々道橋を懸け渡すべしと仰せ付けられける彼の法師御目がねに違はず、身を長羽織になして伊勢の國山田にて朝脈にまかりけるとなり」

詐欺的奇蹟を應用して金錢を奪ふ犯罪は他人の迷信を應用する犯罪のうち最も普通なるものであるに拘はらず、現今に於ても依然として盛んに行はれて居るところを見ると、如何に人間といふものがあまく出来て居るかを知らることが出来る。「鎌倉比事」にも、「心を磨く寶珠の曇」と題し次の物語がある。

「鎌倉樂師堂の谷の邊に、淨密といふ獨り住みける僧あり。庵の前に優曇華の咲たりとて、近國在所々聞つたへく、貴賤男女群集して是を見ること夥し。最明寺殿此よしを聞たまひ、優曇華とやらは世に稀なる事にたとへたるに、今如何なるいはれによつて咲へしとも思はれず——近弘上人を召して優曇華の事をたづねらる。上人申されけるは、抑も優曇華と申すは、此世界の人の壽八萬歳の時にあたつて、轉輪聖王とて須彌の四州を領したまふ威徳不思議の大王世に出給ふ。一千人の皇子を持ちたまひ七寶を身に帶し、不足なること一つもなし、國ゆたかに民賑ひ、風枝をならさず雨つちくれ破らず、五穀は耕作せざるにおのづから地より生じて糠糟なし。衣裳は枝にあらはれ裁縫といふ事もなし輪王すなはち車に召されて須彌の四州をめぐりたまふに、大海の渚黄金の砂の上に三千年催して優曇華の開き出で、盛りは久しからず、干汐に咲いて滿汐に散り候、かゝる仔細は人の知る事にあらずと言はれける時、扱そのうどんけは如何なる花の形にてか、木にて候や草にて候やと問れて此上人屹度つまりて、それまでは覺えずとて、御前を立てかへられたり。扱も麓末なる學者かなと笑ひたまひて、青砥藤綱御前會議につかはされければ、芭蕉の花の咲きたるにて、今は大方散り果たりとぞ言上す。芭蕉の花の咲くことは珍らしければ、世の人は是をうどんけといひならはして、貴賤群集して見に來るも尤も之とて何の御沙汰もなかりけり。爰に天水坊といふもの、都東山六道小野篁の夢想にさづかりし玉とて莊嚴勿體よくこしらへ、此玉にむかひて



一念のざんけし、念佛を唱へて目をひらきて、其身の玉にうつる姿を見れば、後世の障なき人は正しくうつる。又、未來の罪ふかき人は、其身逆にうつりて、現世において善惡の二つを見せしめたまふ。いよく極樂往生すべき人は報恩謝徳の念佛を唱へ、罪ふかくして其身さかさにうつれる人は滅罪生善のために念佛怠ることなかれ、かの地獄の主焰魔王の前にたておかる、淨破利の鏡になぞらへ、善惡光明玉と名づけて、在々里々を経めぐりて老若男女ひとりづつかの玉に向ひて拜するに、始めをがみし人も逆様にうつりしを後に拜みし人にかくし、後に拜せし人も逆さまになる事を始めの人にかくし、いづれも我ばかりこそ罪ふかくして逆さまにうつる、人は皆正にうつると、心から身を恥ぢて、かの僧に過分の布施を運び、滅罪の縁を結ぶ、かくすること一村にて二日三日四日とは一所に居とまらず、その所を早く立のき、五里七里道をへだてたる在々所々へ立こえ、群集をさせても、所の守護よりとがめのない内に立さり、大分の金銀衣服を、ほしい顔もせずむさほり取る由、鎌倉へきこえて、武士をつかはし、この僧を召され、最明寺殿光明玉を御覽あるに、御形逆さまに見えければ、かの僧を強くいましめ給ひて仰せらるゝには、惣じて水晶の丸きにて人の形を見るときは逆さまにうつるもの也。畜生の形は真正にうつる。これによつて狐狸の人に化たるには是をかゞみに見せて正すなり。皆よりて形を見よとて、御近習の衆御覽するに、いづれも形さかさまにうつりて正にうつるは一人もなし、されば後生罪なき善人とて諸人をも引導する僧の形

を見せよとて、玉の前に引するゑさせ僧が顔を見るに、さかさまにぞみえにける。遂に由井ヶ濱に引出し、首をはねられける」

水晶の丸きで人の形を見れば逆さまに見え、狐狸の人に化たるを見ると正に見えるところの最明寺殿の仰せは、もとより信を措くに足らぬけれども、例へば凹面鏡を「善惡光明玉」として使用するならば、前記天水坊のやつたやうな詐欺は出来る筈である。そして、この詐欺に於て、人間のデリケートな心理状態、即ち逆さまに映つた——心が悪いからだと思つて、それを他人に語ることを欲せぬ性質が利用されて居るところは、頗る巧妙なものだと思ふ。若し詐欺方法を「上等、下等」で區別するところが許されるならば、かういふ方法をこそ「上等詐欺」といふべきであらう。詐欺については、後に詐欺を描いた文學を論ずる際に委しく述べるつもりであるから、こゝではこれ以上論じないが、いづれにしても、かうした犯罪は、今後の探偵小説の題材としても屢ば選ばれるであらう。

神佛の御告げを偽つて人々に色々のことを言ひふらし、以て巧みに自己の貪慾を満足せしめようとする犯罪も、迷信を應用した犯罪と見做して差支ないであらう。藤陰比事には「仙術を賣る志津山村の百姓」と題し次の物語がある。

「乍、恐言上仕候、私儀は志津山村の百姓良太夫と申者にて御座候、しかるに此志津山の麓の水海に、いつ頃よりか、ひらたぶねを浮べ、白髪なる老翁これに乗り、平生釣を垂れ、詩



歌をうたひたのしみ候體、さながら范蠡が五湖に竿さし風月に嘯きたるも、かくやと奉存候たゞ人ならぬ有様に、こゝろある百姓舟のほとりに近づき候へば、舟をはるかに退け物言ひかはすもむづかしき風情に相見え候故、何人と名を尋ぬるものなく候、推量仕るに仙人か神ほとけの變化かと存するばかりにうち過ぎ候所に、當村の百姓太郎兵衛と申す者、ある時酒をたづさへすゝめ候へば、こゝろよく酌かはし、雑談常の人間にかはる事なく、それより折々かの舟にのりうつり、酒宴をもよほし、うちとけてかたり申され候は、某は大和かつらぎ金峰山よしの野大峰に年久しくこもり、神佛山道一致のさとりを開き、近年此湖水に逍遙す、されば此志津山の奥に楠の大木の小影にほこら一つあり、これ此國の守淺江備前守先祖靈屋なり、一亂の後その子孫といへども知るものなし、過ぬる夜、此靈神形をあらはして某に告げられしは、近き頃百五十年忌にあたりて、上天の果ありといへども鬪諍の餘執にひかれて、いまだ三熱のくるしみをまぬかれず、此たび神社を再興し、一字の精舎を建立し、百石の田畠を寄進し、永代法燈斷絶なく、すなはち某を開基の導師にたのむ由、子孫淺江備前に勸化すべきよし、まのあたり告げられしなり、國の守もし違背あらば、淺江の家滅亡ちかきありとかたり申され候を、右太郎兵衛承たるよし申候故、右の神社佛閣寺領等、御寄進御建立仰せつけられ候は、御國長久の瑞相と奉存候故、乍レ恐御注進申上候以上。

月 日

志津村 十郎大夫判

淺江 大守 様

御近習御披露

太守聞し召し上られ、注進の所存神妙なり、しからばその老人と太郎兵衛を召しつれまるべきよし、かしこまつて兩人を同道しけるに、老翁の體相いと殊勝に、八字の眉霜ふり、縞衣に錫杖かしらに雪つもり、役の優婆塞の木像いきてはたらくがごとく、寛々と敷臺に安座す、太守仰出されけるは、其方は此淺江の家にかなる筋目ある人ぞと御たづねあれば、老人こたへて、お家に所縁はあらずと申す、時に太守、然れば先祖の靈神、まさしく國の滅亡子孫斷絶せん事を告げんとならば、ゆかりある某を始め、譜代忠臣の者、血脈相續の者にはいかなれば遠慮して、ゆかりなき其方に神社建立の望みをたのむべきや、さらに承引するにおほつかなし、まづその方佛者ならば立竝微妙の道理を説べし、もし正法は文字によらずといはゞ平話の一句を聞かん、若又仙人ならば雲に乗り地をくゞる通力を一見すべし、もし又神道不測の奥義に達せば、その方談を聞べし、さなかに形をつくり、愚者をたぶらかすの偽者たるべし、まづすぐに白狀せざるにおいては、水火の呵責にかけて問べしと仰られければ、老翁俄にふるひ出し、夢物がたりをあれなる太郎兵衛に、ちよつといたし候ばかりにて御座候、もとより夢のことなれば、何かやくたい御座あるべし、わたく



しは新言秘密護摩の灰のかしらなれば、首の儀は御たすけと申せば、太郎兵衛も取持たる同罪に、五ヶ國追改せられけるとなり』

この外に、櫻陰比事に、『煙に移氣の人』と題し、山伏が奇蹟を示して人々を欺く犯罪があるが、以上の三つの例によつて、その當時に於ける迷信利用の詐欺がどんなものであつたかを略ぼ知ることが出来ると思ふ。何となれば、たとひ作者の空想の所産であるとはいへ、小説はある程度迄、時代の反映と見て差支ないからである。

## 二

前にも述べたごとく、三比事の中には、これといふ目新しい犯罪方法は描かれて居ないけれど、他人の迷信を利用する犯罪以外に多少注意すべきものもないではないから、二三その例をあけて置かうと思ふ。

隠顯インキを利用して手形に署名し、その手形を無効ならしめることは、一寸考へると比較的新しい犯罪のやうに考へられるが、櫻陰比事の中には、『手形は消えても、正直が立つ』と題して次の物語がある。

『昔、都の町に北國の買問屋して、六角通ひに手前宜きあり、親の代より懇せし方へ銀子五貫目貸して預り手形取置かれ、年々斷りにまかせて八年相待ち、其大節季に入用とて人遣はしけるに、

手形持たせて御越しあるべし、銀子返進と申せば、右の手形箱を開けて内見するに、これ白紙となつて不思議晴れ難し、あまたの證文吟味いたせしに外の別條なし、何とも思案に及ばず、潜かに此段を貸したる方へ申せしに、いづれ其銀子は濟したやうに覺えたり、何分にしても手形無くては不埒と、其後はいよく相濟したに極めて、結句貸方の人悪く沙汰せられて、世上に外分失ひ、爰に堪忍なり難く、銀子の損は格別、せめて我正直を知せたく願ひ、ありの儘に書付け申上ぐれば、兩方召出され、先づ町の者に兩人が身代のほどを御尋ね遊ばしける、財寶かけて八百貫目をさして相違御座なく候と申上ぐる、又借申す方は三十貫目ばかりと、見及びの程、ありていに申上ぐる、然れば此銀子は借つたには紛れ無し、譬ひ手形は白紙になるとも銀は屹度相濟すべく、おのれ恐ろしき所存世の仕置きものなれども、相渡せば仔細なしと仰せ出されし時、何とも御返答あり難く、銀子相立て申す御請合申上ぐる、其後貸方のもを近う召され、定めて此手形はあの者が宿より書調へ持参いたしたかと御意のありしに、仰せの通り私宅より認め参りし、印判は見覚え別條無く存す請取置き候段々由上ぐる、重ねては眼前にて書かせ商賣の事まで念を入るべし、都にもあの如くなる悪人あり、此度の手形は豫て拵らへたるものなり、烏賊の黒みに粉糊を磨交せて書けるものは、三年過ぐれば白紙になるといふ事木草に見えたり、まさしくこれなるべしと仰せけるとなり』



烏賊の黒みが果してかやうな性質を持つて居るかどうかは、私自身實驗して見たことがないからわからぬが、ヨードの極少量を糊汁に混ぜた青い液で文字を書けば、空氣中では、日ならずして消えてしまふ。數年前、ロンドンで、ある男が競馬の賭にこの液を用ゐて逮捕された話がある。彼は紙片にこの液で馬の名を書いて先方へ渡し、それと同時に、書いた當座は見えないで、後になつてあらはれる液を以て別の馬の名を書いて置いたため、先方のものが日を経てその紙片を見ると、別の馬の名があらはれ、賭金を詐取せられたといふのである。quinoline blue の如き色素で書いた文字も、日光にさらせば消失するから、時折犯罪の目的に使用されるといはれて居る。

大岡政談を讀まれた人は「三方一兩損」といふ話を記憶して居られるだらうと思ふ。ある男が三兩の金を拾つて持主に返さうとすると、持主は、拾つたものはお前のものだから受取らぬといひ、拾ひ主は、金は持主のものだからどうしても受取れといふ。やがて、受取れ、いや受取らぬ、と争ひ出して終に大岡越前守の裁判となり、越前守は自分で一兩を出して四兩となし、それを二分して二兩づつ二人に與へ、落し主もつまり一兩の損、拾ひ主も一兩の損、自分も一兩の損だと目出度くさばいたといふ話である。この話は多分、櫻陰比事の物語『落し手あり拾ひ手あり』の話を焼き直したのだらうと思はれるが、櫻陰比事では、これが一種の犯罪の手段に用ゐられようとしてあるだけ、大岡政談よりも却つて一層面白いやうに思はれる。

『昔、都の町はづれより加茂川の岸傳ひに北山へ歸る老人あり、折ふし十二月二十八日の夕暮、世間は春の事ども取急ぎ心忙しき今日も、御堂下向の道芝に、紙包見えけるを拾ひ上ぐれば、小判三兩と書付けあり、いかなる人の節季をしまふ心當にもやと、跡先見しに往來もなく、遙かの松蔭に柴賣と見えし人の立休むに追付き、其方はこれを遺失し給はぬかといへば、いかにも我等遺失したれども、其方の手に入るからはそなたのものといふ、これは近頃迷惑なる申され分なり、たとひ此主の無きとて取つては歸らじ、況して主ある金子を取りて歸るべきかと、其者に渡せば、拾ひし者に返しぬ、投げ遣れば投付け、暫時此論やむ事なし、後には黒木賣、牛使ひ立どまりて、今の世には例なき事ぞと、兩人の志を感じける、いよく互に道を立て、此小判納まり所無く、とかく此論、下に濟み難く、兩人御前へ罷出で、右の段々申し上ぐれば、當番の役人衆聞給ひて前代に無き事、これは都の今聖人なるべしと、此段御沙汰申上けらる、折ふし、御前には御氣色悪く、前後に京中の醫者衆相詰められける、時に御名代の家老職を召され、智慧だめしに此裁判を仰付けられしに、こゝを大事と思案して、其拾ひし三兩の小判を出させ、御前の小判三兩合せて六兩を取りませ、三所に置いて先づ遺失したるものに二兩渡して一兩の損なり、又拾ふたるもの二兩取ればこれも一兩の損なり、御前の金も一兩御失墜なり、兩方ともに罷立てと申付けられけるを、いづれも發明なるさばきなりとこれを感じ、これを御耳に立つるになかく、御同心無く、其方どもが氣の着け



所相違なり、此二人内談にて斯く取結びし作りものなり、其仔細は拾ひしもの其主と論に及ばず、捨てやうはさまざまありしに、こゝに出でける所第一の聞なり、正直者と都に顔を見知らせ、未々人をかたりの巧みせしには違ふまじ、其二人呼返せと又御前に召出だされ、右の段々仰せ渡され、ありの儘に白状申さぬに於ては拷問と、厳しく御詮議かゝれば、出家のもの驚き、あの者に頼まれ、何心もなく言含め候通りに、拾ひ手に罷成り争ひ候と申上ぐる、されば悪事は遺失手めが巧みなり、見分家に杖つく年齢をして無用の心根仕置にもすべきなれども、おのれが身の上ばかり他に障らぬ事なれば、洛外までも拂ふべし、又頼まれし者めは久しく住所の鞍馬に近き麓里を追拂ひ給けるとなり」

如何に正直であつても、拾つたものを返す、受取らぬで裁判所にまで出るはをかしい、これは正直であるといふことを世間へ知らせる手段にちがひないと睨んだ『御前』の眼力は、大岡政談の中にあられる『越前守』のそれよりも遙かに鋭いといはねばならない。探偵小説として二つを比較して見ても、三方一兩損で結末をつけるより、將來の犯罪の手段だと解決した方が一層の興味があると思ふ。この外、櫻陰比事には、「あぶないものは筆の命毛」と題して、馴染の女郎を棺桶の中に入れ、取人として厳しい門番の眼をくらませて連れ出す話があり、鎌倉比事には、「智慧の左繩」と題して、人を毆打して過つて殺した死體を、自ら縊死したやうに見せかける話があり、藤陰比事には、「不審を肩に

知る木割の木工平」と題し、他人の女房を盗むために、頓死した女の首を切り落して胴體だけを亭主の家に残し置き、女房が何ものかに殺されたやうに見せかけ、女房を我家へかくまひ置く話があるが、いづれも、さほど奇抜なものではなく、ことに、この藤陰比事の物語は支那の棠陰比事の話を焼直し

### 三比事に書かれた犯罪心理

櫻陰比事の作者井原西鶴、鎌倉比事の作者月尋堂、藤陰比事の作者無名氏が、各々その比事を書くに當つて、犯罪者なるものに關し、どれ程の研究をしたかは知る由もないが、もとよりその當時系統立つた犯罪學者のあつた譯ではなし、又、彼等自身が犯罪者について特別な研究をしたとも思はれず、恐らく、直観によつて書きなぐつたものであるにちがひない。彼等は犯罪者が一種特別なタイプに屬する人間であるといふことはもとより知らなかつたであらうし、男性犯罪者の犯罪心理と女性犯罪者のそれとがある點に於て根本的にちがつて居るといふことなどはつきり意識して居なかつたであらうと思はれる。三比事の各種の物語中に、犯罪者の特種の容貌の描かれて居るのは一つもなく、又、女性が中心となつて居る犯罪の数は、男性が中心となつて居るものゝ十分の一にも達しない。尤も現



今の探偵小説でも男性犯人を取り扱ったものが女性犯人を取り扱ったものより遙かに多いから、或は當然の現象といつて差支ないかもしれぬ。もとく探偵小説は興味を中心として書かれるものであるから、多くの作者は犯罪心理の考察などは第二の問題として居るらしく、現今の歐米の探偵小説を見ても、犯罪学者の研究に資し得べきものは極めて少ないのであるから、日本犯罪文學の搖籃期を作つた犯罪探偵物語の犯罪心理を考察するなどは野暮の骨頂かもしれない。然し乍ら三比事の中には、作者が知つて知らずにか、犯罪者の特殊な心理を巧みに描いて居る物語があるから、後に近松巢林子などの文學を考察する際の比較のために、その二三を紹介して置かうと思ふのである。

犯罪者の特殊な心理を應用して探偵の實をあげる物語については既に述べたところであるから、ここではまづ鎌倉比事と櫻陰比事に描かれた女性の犯罪心理について述べて見よう。

むかし都の町千本通りに一人の浪人があつた。音曲の名人で大名方へ呼ばれては生活を立て、居たが、あるとき某家に招かれると、庭に鶯が来て居て、主人は何とかしてあの鶯を飼鳥にしたいものだと云つたので、浪人はすぐ様西の京の餌差をよんで来て鶯を捕へさせた。主人は大に喜んで澤山の褒美を與へたので、浪人が翌日餌差のところへ挨拶に行くと、餌差の女房は浪人につかみついて「良人をどこへ連れて行つたか」と泣きながらきめつけた。浪人は驚いて少しも知らぬといつたが女房はいつかな聞き入れず、遂に御前へ訴へ出た。拷問の結果浪人はいさぎよく罪を引き受けて、自分

の家で殺したといつたので、女房はさもく悲しさに浪人を怨んで泣いた。そこで御前は浪人に向つて、死體の在所をたづねられたが、意外にも浪人は言葉につまつたので、御前は犯人が別にあると睨み、死體を探させになると、餌差は以外にも竹田道で斬殺されて居たので、御前は女房に向つて、多分強盗の仕業であらうが、不運とあきらめて良人の冥福を祈るがよい、明後十九日は、自分の家の法事をするので、お前の良人のためにも弔料を少し與へたいから、身内のものか、懇意のものを取りよこすがよいと諭して、女房を御かへしになつた。さて十九日になると年頃二十四五の男が弔料を取りに來たので、召捕つて色々拷問すると、たうとう、女房と密通し、二人で謀つて餌差を殺した旨を自白した。

大岡政談の『鐵砲彌市の件』といふ物語もこれと同じやうな筋であるが、自分が殺す計畫をして置き乍ら、さもく悲しいやうに装ふ女性の犯罪心理はこの短い物語にはつきりと寫し出されて居る。女のかやうな偽善的な惡魔的な心は、姦夫といへども後には呆れ恐れるものであつて、鎌倉比事の、『情は敵、怨は恩』の一篇の如きは、この間の消息を遺憾なく傳へて居る。

『呂東萊が弱きは天下の大害なり、又學者の大患なり、人の善をなさざるは志をたつる事の弱き故なりといへり、すべて志のうすく根の弱きものは勞して功なし、善をするは剛きよりこそなれ、萬の惡の源は弱きよりなるとなん鎌倉市町に魚屋半助といふ者の女房、あたりちかき馬醫の



新平といふ者と密通して、此四五年の間、夫半助七ツ起して魚市に出たる留守ごとに忍び入て、不義の枕をかはしぬ。又も夫市に行きたるをうかゞひて新平忍び入けるところへ、半助道より小もどりして、今朝は霜ふかく風もはげし、我はとて道を行けば寒きを壓はんやうもなし、跡にてねざめ寒く、嘸くるしからん。此羽織を上に着よと脱ぎ捨て走り行ぬ。女房跡にて、扱もうつけかな、己が寒きを苦しめてと言ふを、密夫新平聞て涙を流し、夫の有る身として我になじむさへ恐ろしきに夫の深き志をもわきまへず、悪言に及ぶ心底いかにしても堪忍なりがたしとて取て引よせ、たゞ一刀にさし殺して歸りぬ。其後夫歸りて盗人のしわざか不便やと歎く體。なほと新平心にこたへてかなしく、我と此段々を書き附けて、最明寺殿へ申し上げ、密夫の御仕置のがれがたしと、いさぎよき覺悟の心底を御前にも御感じあつて、命を助け、此魚賣が奴となし扱殺されたる女房の死骸とならびに密夫新平と言ふ名ばかりを書附けて、諸人にさらし見せしめになし給ひぬ。最明寺殿の御慈悲、新平が誠、半助が情、時の人感じて、いよく女の死骸に唾をはきけるとなり』

誠に立派な一篇の悲劇である。作者が、萬の惡の源を、「弱」に歸して居るのも、中々面白い考へだと思ふ。然し私たちは、女性の弱さが、ある場合には、「装はれたる弱さ」であることを忘れてはならない。

私は拙著『近代犯罪研究』の中に「自白の心理」と題して、犯罪者が、その罪を自白するに至る心

理の數々を述べたが、藤陰比事には、先天性犯罪者に見られる打算的な自白心理を取り扱つた、「大赦に漏る自業の訴訟」といふ一篇があるから、左に紹介しよう。

『乍レ恐言上仕候、私儀は山科より伏見へ毎日のほりくだりの歩荷物を渡世に仕り候久助と申すものにて御座候、當月二十一日大津の問屋、北國より上り候干鱈干鮭蒸鱒の荷物、ふし見へ持まるれによし、不斷出入仕候へば、大分の金銀にても、請取り申はと數年顔見しられ、右の荷物をも相認て狼谷の茶屋にかたを休め罷在候うち、一荷ゆく方なくとられ申候につき、みちすぢ追かけ、ぎん味仕候へば、いなりまへにて右の荷物を荷ひ行候ものをとらへ、奪ひかへし申べく存候所、此盗人竹田髭六と申す強力の雲助にて、かへつて横道を申懸けかへし申さず候を、ねぢあひた、きあひ申すにより、近所の者共出合、右の段々を申ことわり、町中へ預け置罷歸り候間、召出され、急度荷物を返し候上、如何様共被二仰付一可レ被レ下候は、忝可レ奉レ存候以上

月 日 にあけ 久 助 判

地頭聞召しあけられ、大津の問屋ならびに、かの髭六を預け置たるいなり町の者共まで召出され、御穿鑿ありければ、髭六ちんじて私盗みたるにて御座なく候、籠相にて荷物取ちがへたるなどと申上げけれども、糺明のうへ落度極まり籠舎仰付られける、二十日あまり過ぎて天下に大赦行は



れぬるにより、諸國私領公領の罪人のこらすたすかりけれ共、此髭六と小罪の者二人そのまゝ籠に  
 残されしかば、此者共訴訟申上けるは、此たびの大赦には、極悪死罪の人数さへ出籠仰せつけられ  
 候うへは、我等事少分の御咎のもの共に御座候へば、早速御たすけ可レ被レ下所、そのままこ  
 れあり苦しみ候間、急に出籠仰付られ下され候はば、有がたかるべきだん申上ければ、目代、  
 これは御前へ申上るに及ばざる儀なり、其仔細は、最前籠舎御ゆるされありしもの共は、大罪の者  
 共にて、かならず死罪に極りたる故に、早速御免ありしなり、其方共はいまだ、御仕置の品さだま  
 りがたき程の小罪の故に相残りたり、直訴申上たりともかなひがたかるべしと申聞せければ、扱は  
 大罪の者はかへつてたすかるならば、我々も人知らぬ大科を申立御免をかうむるべしとて、舊惡を  
 おもひ出して願ひ申上ける、一人は西樂寺の什物を盗み出し、金子百二十兩に賣り博奕を打、五百  
 兩勝て町遊女をかへてゆるりと渡世したりけるが、此科する人なし、此度籠に入しは、少の事を  
 いひつものり、相手のあたまをたき破りたりといへども、死ぬる程の深手にあらず、され共、さき  
 さまおびたしく訴へし故に、當分の籠舎と覺え候なり、大罪右白狀に相違なしと申す、一人は  
 東國がたの者なりしが、十三年己前に生國にて人を切殺し、上方へにけのほり、似せ銀を吹て渡世  
 仕り候へども、人知ることなし、此たびの籠舎はかけ落者の羽織をひとつ預りたる少科として、  
 入籠仰付られけると申す、さて髭六は六年己前に盜賊に入、家内の者を柱にしぼりつけ、金銀を取

り、その家に火をかけ、首尾よく、その場をのがるといへども、その翌年より七年の間楊梅瘡を煩  
 ひ、腰ぬけのごとく、大分の藥代等に、かの金銀をのこりなく、漸く命助かり、手と身にてかちに  
 もち、前の惡事、人夢にもしらざりけるが、此たびの荷物わづかなる事にて此仕合と白狀申ける  
 に、大赦の日限ははや過て、籠舎御免なり難く、右二人は磔にかけられ、髭六は火あぶりになり  
 けるとなり』

この外なほ犯罪者が、一女性の心に感じて改心する話が櫻陰比事であり、放火者の心理を取り扱つ  
 たものが藤陰比事にあるが大して興味のある物語ではないから、その記述は省略する。

詐欺騙盜を取扱つた文學(晝夜用心記と世間用心記)

櫻陰、鎌倉、藤陰三比事が『探偵』の面白さを目的として書かれたといふよりも、むしろ教訓を目  
 的として書かれたものであることは言ふ迄もないことであるが、それと同じくその時代に書かれた騙  
 盜小説も、やはり、教訓小説の一種と見做すべきである。私はこれから、三比事と同時代の騙盜小説  
 として名高い『晝夜用心記』(寶永四年刊行)と、『世間用心記』(寶永六年刊行、最初儻偶用心記と言つ  
 た)との二種に就て述べようと思ふが、『晝夜用心記』は、『櫻陰比事』の著者たる井原西鶴の弟子北條



團水の著はす所であり、『世間用心記』は、『鎌倉比事』の著者月尋堂の著はす所であつて、團水も月尋堂も、共に数多くの教訓小説の作者である。例へば團水には、『武道張合大鑑』『日本新永代藏』などの述作があり、月尋堂には、『今様二十四孝』『子孫大黒柱』などの述作があつて、これ等の小説は、いづれも『教訓』を主として居るのである。

すでに、書名となつて居る『用心』といふ言葉そのものからでも教訓の意味は察し得られるが、兩書の序方を見ればなほ一層明かである。即ち『晝夜用心記』には、湖西繁平といふ人が、

『此晝夜用心記全部六冊は、鳳城團粹居士醉中の戯れに書捨てられしを撮萃めて一帙と成せり、大概世間に謀計子といふ者、偽をたくみ辯舌もつて人を誑かし、金銀を掠め奪ひし方便、古今の間語り傳へしを、三十六種に書きつらねたり。這裏虚あり實あるべし、只民家用心の爲に記して、眞偽覺悟の種に編める者也』

と序し、『世間用心記』には、定延といふ人が、

『儻偶とは頭のことか、それは天邊ぞや、何のことぞ、答へて申しける、凡こと葉は折からの童謡にて、ふしは替れど事の道理はちがはず、古き神の代も、慮りに計りるましける、釋迦も方便の脇腹から生れ、孔子も欺く事なかれと教へ、大和歌には二おもて、をなら坂の兒手がしはにたとへ時雨にくらべし偽り名を、末の諺にだますといへり、かたられしといへり、うつむけにしやるの

といひ、一ぱいくはした、ちやかしたと申す、其名儀の翻譯かぞへるに盡きすちかき此頃よりはちらてんといへば、てれんと中略し、いふも聞くも、てれんの心は通ひぬ、かならず大鼓のひゞきにあらず、また三味線かぶる鼠にあらず、あたまの黒い儻偶子に用心し御座せとや』と序して居る。

然し乍ら、こゝでいふ『教訓』といふ言葉は必ずしも勸善懲惡の意義を有しては居ない。何となれば、詐欺を取り扱つた小説の大部分は、詐欺の方法そのものが興味の中心となつて居て、詐欺師は逮捕されもしなければまた罰せられもしないからである。この取扱ひ方は、現今の探偵小説にもその儘應用せられ、詐欺小説の讀者は、詐欺の方法が巧妙であればある程痛快を感じ、詐欺にかけられた方の人に同情するものはめつたに無いのである。だからうつかりすると、詐欺小説を讀んだものは、自分も同じやうな方法を實地に試みて見ようなどといふ悪心を起さぬとも限らず、教訓小説が却つて『悪』を鼓吹する役をつとめる場合がなきにしもあらずである。この點に於て詐欺を取扱つたこれ等の小説は、探偵小説として、より現代的であるといふことが出来るのである。たとへば、兩用心記の中の物語をその儘現代語に翻譯しても探偵小説として相當なものが出来、又、歐米の現代の騙盜小説の中には、兩用心記の物語の内容と頗る似て居るものがある。それ故、櫻陰、鎌倉、藤陰の三比事、探偵小説として頗る幼稚なものであるに反して、兩用心記は、探偵小説としては比較的優れた價值を



持つて居るのである。

### 兩用心記の比較

櫻陰、鎌倉、藤陰の三比事が、支那の棠陰比事の影響を受けて居ることは既に述べたところであるが、晝夜、世間兩用心記もまた、支那の騙盜小説『杜編新書』、『騙術奇談』などと、その趣を同じうして居たのである。晝夜用心記には總計三十六の物語があり、世間用心記には總計三十の物語があつて、その書き方は大たいに於て似寄つたものであるが、取扱はれて居る材料には多少の差異がないでもない。一口に言ふと晝夜用心記の物語は、殆ど皆、金錢又は物品を詐取する話であるが、世間用心記には、金錢又は物品を詐取する話以外に、所謂手練手管を取り扱つた人情話が澤山あつて、中には殺人などを取り扱つた探偵小説まではひつて居るのである。

文章の巧拙に至つては、私にはよくわからぬけれど、世間用心記が頗る凝つた筆の運び方をして居て、よく味つて見ればはじめてその意味がわかるに反して、晝夜用心記の方はすらくとした筆の運び方で、すぐその意味がわかる。今左に兩者の文章を比較するために短い物語を一つ宛引用して見ようと思ふ。

### 御祈禱申せば大吉院(晝夜用心記)

『本石町に唐津屋とて、虎の生贍、白象の鼻油、獵虎の毛貫袋、天龍の涎、一切の珍物、阿蘭陀、東京、三韓の藥種、此店に無いものはどこにもなし。ある時若黨草履とり挾箱持めしつれたる侍、此見世に腰かけて、朝鮮人參極上々を見たきよし、吟味のうへ、當年は殊の外の高値は合點にて此店にある程の高、髭折七十三兩、所々見合はする中、是よきに極まれば、皆召さるべし。代金は念のため一往旦那へ披露の上相渡すべし。則ち亭主の弟八之丞同道して、挾箱に入れさせ、屋敷へあゆみける此比目黒臺座町の裏店に、大吉院とてかくれもなき祈禱者、うせ物、待人、相性、門出、今朝晴と大看板をかけて、萬見通しの大法印あり。此行者へ八之丞をともし、法印に對面して、きのふ物がたりいたしたる氣違、只今めしつれ参りたり。約束のごとく先づ一七日御留置き、加持祈念頼み申したし。當座の御初尾として銀貳枚さしだして病人まゐれといへば、かの八之丞を連れて出るとき、興さめ顔になつて申すやう私事病氣の覺えなし、人參の代銀取りにまゐりたれば、御渡しなされよといふに、此侍すこしも驚く氣色なく、此四五日人參々々と、晝夜口はしり候といへば、法印つくづくうちながめ、此亂氣上性より起ると見えたり、氣違は力つよきものぞ。林學坊、不動坊、愛染坊と手をた、けば、かけ出のあら山伏四五人出て、左右よりすがり、すこし



もはたらかせず、先ず護摩の壇をかざらせて、佛眼金輪五壇の法、五大虛藏八字の法、金剛童子擊縛の法、たとへいかなる生靈死靈、狐狸の障碍なりとも、急々に去れくと、鈴錫杖をおつとり、飛びあがり踊りあがり、既に祈禱はじまれば、侍は皆々御大儀頼み存すと暇乞して歸りける。かくて二夜三日汗水になつて祈りけれども、さらにしるし無かりければ、法印をはじめ各退屈して、一休みこそ休みけれ。時に八之丞涙をはらくとながし、まことの氣違よと、いづれもかたりにあらはれたり。此上は法印も同類の訴人仕るべしと、かけ出すを引きとゞめ、段々様子を聞き届け、かの藥種屋へうかゞひけるに、一昨日より弟歸らざるにより只今公儀へ罷出る所へ此仕合。法印は相盗のいひわけは立ちぬれどもその侍の行方たしかならざるを、わづかなる賄にふけり、理不盡の仕方、珠數袈裟頭巾までを人參代に賣りたて、唐津屋へ晦日ばらひ」

餘談ではあるが、昨年五月八日發行の The Detective Magazine に R. Ajavez といふ人が、「一時的發狂」と題して、全くこれと同じ趣向の探偵小説を發表して居る。ある美しい婦人が醫師をたづねて私の良人はダイヤモンド商であるが、近頃大損をしたゝめに、少し氣が觸れて、ダイヤモンドのことばかり言つて居ますので、明日連れて來るからどうか診てやつて頂きたいといふ。翌日その女は約束の時間より少し早く醫師をたづねて應接室に待つて居ると、一人の男がはひつて來て、御注文のダイヤモンドの頸飾を持つて來ましたといつて渡す。女はそれを受取つて代は主人が拂ふからといつて診

察室へ行き、醫師に向つて良人をつれて來たから診てやつてくれといつて男を案内する。醫師は、大きくうなづいて男に向つて色々質問する——その問答の場面が頗る滑稽である。遂に二人が女の詐欺にかゝつたことを發見したときには女はもはや逃げた跡である。即ち彼女は醫師の妻として頸飾を寶石商なるその男に注文し、醫師に向つては寶石商の妻だといつて、まんまと頸飾を詐取したのである。この物語の作者は、恐らく、二百年も前の日本の物語に同じ趣向のものがあるとは氣附かなかつたのであらう。いや、或は何かゝら傳へきいて翻案したのかも知れない。

身は祝ひがら宵待戎(世間用心記)

「世になき物は野郎の脇差に小づか、はかまきた坊主、名の立たぬ若後家、女はどれも同じ事を、かみきりと言へばこのもしがる、氣のまへな人心、しがや辻のまるぎんちやくとて、終によめ入りせで、一そくがみの細元のひ、仕出しごかしの、つられ女、大豆板御用ならば、仰せつかはさるべし、こゝに天外町二丁目、八まんや矢右衛門後家、夫にはなれて跡しき大ぶんの身代、いかな、少しもくつろがせず、金銀は飴に似たり、細う長う延びる棚おろし、ことしは七廻忌、梅月佳春信士のため御代官所へ、御ことわりを申し、當所仕合橋、福德ばし、よひまつ橋、右三ヶ所のはし板、ふしの抜穴を見つくるひ、あやうきを取替へ申したきおもむき、是れは萬人夜の行來も心やすく、



よろこぶ功德、大きなる追善なり、しかし右の橋いづれも、八年このかたに、上より丈夫にかけ渡され、さのみ破損に及ぶまじ、同じくは、この橋の大破を見立て、造作仕れとの上意。かへし申すもは、かり乍ら、橋は勢至菩薩の御背中、ふみ行くあしの、おそれ覚えぬ人のつみとがや、夫存生のとき、あさゆふ此三つの橋を、見つくろひ、二まい目の板を兩むかひながら、取りかへける。此後家の兄、大佛師しうけい方へ、六まいの板を取りこみて、細工手ぎはを見せて仕合戎、福徳戎宵待戎、と橋の名をよび付に取つて、しかも十月二十日に賣出しける時節の持ちこみよく、商人前後を争ひ買ひもとめける、是れ名は祝ひがら。人の氣のまへに迷ふをつもつて、目出度い橋の名の、板きれて、戎を作りて、賣出すために、七年忌までを取りこして、手れんのたねとなしぬ、後は六枚の橋えびすを、皆賣りしまひてあらぬ木の、えびすもそれなりけりに賣つて、とほる人檢むるべきしるしもなく、知らぬが佛、正直のかうべに、いたゞく人によるこび來り、賣物はするぶん利をとれば、何よりの事」

これなどは、むしろ、人をだまして金を儲ける方法を教へるやうなものである。その當時は勿論のことであるが、現今でも、これに似た方法を講じたならば、きつと成功すること請合である。

### 兩用心記に書かれた詐欺方法

凡そ、他人の意志に反して、他人に屬するものを奪ふ方法に四種類ある。第一は所謂強盜であつて、暴力を以て他人を無力にして奪ふ方法をいひ、第二は所謂竊盜であつて、他人の居ないところ、又は他人の意識の全然働かない時間を選んで奪ふ方法をいひ、第三は所謂拘摸であつて、他人の意識にスキの出來たチャンスをとらふか、或は他人が意識しない程の早業によつて奪ふ方法をいひ、第四は所謂騙盜詐欺であつて、他人に接し他人をだまして奪ふ方法をいふのである。このうち強盜は尤も野蠻な方法であり、竊盜、拘摸、詐欺は段々進化した方法だといふことが出来る。何となれば拘摸は窃盜よりも腕の熟練を要し、詐欺は拘摸よりも頭の働き即ち智慧を要するからである。

同じく詐欺のうちにも、亦、下等な方法と上等方法がある。たとへば人をだまして、そのあけくに言ひがかりをしたり、先方の弱點に乗じて脅喝を行ふのは下等な方法であり、チャンスを利用して詐欺を働くのも、比較的下等な方法であるが、之に反して、先方の慾心に乗じたり、迷信に乗じたりするのは比較的上等であり、こちらを十分信用させて然る後悠々として詐欺を働くものは最も上等な方法であるといつてよからうと思ふ。又、同じくチャンスを利用する詐欺にも色々な階段があつて、



例へば「杜騙新書」の中に、豚を四頭曳いて行く百姓に向ひ、その中の一頭を買ひたいと言つて、その豚を近づけて検査する風をして、わざと手を放し、豚が逃げ出すのを百姓が追ひかけて居る隙に、残りのうちの二頭をもつ、放し、一頭を奪つて去るといふ話があるが、これなどは、掏摸とあまりちがはぬ方法である。然し、同じ書に、ある町で、澤山の兩替屋が椅子と机を出して換錢を行つた居るところ、そのうちの一人の机は頗る古びて、錢を入れた箱がこはれかけて居たが、その男が隣りの兩替屋に頼んで、晝支度をしに行つて居る留守に、一人の詐欺師が大工に化けてその兩替屋から修繕を依頼されたやうに装ひ、机をかついで行つて、その中の錢を奪ふ話があるが、これなどは、同じくチャンスをとねらふ詐欺でも、前のよりは優れた方法であると言へる。

さて、晝夜、世間、兩用心記に記された詐欺方法に就て調べて見ると、詐欺手段の殆んど全體を網羅して居ると言つて差支へなく、そのうち最も多いのは、チャンスをとねらふ詐欺であるが、細かに分類すれば、一、先方の弱點に乗じて言ひがかりする詐欺。二、チャンスをとねらふ詐欺。三、共謀詐欺。四、迷信に乗ずる詐欺。五、先方の慾を利用する詐欺。六、こちらを充分信用させて後行ふ詐欺等をわけることが出来るのである。今左に、この一々の詐欺の例證を兩用心記から取り出して順次にならべて見ようと思ふ。

一、先方の弱點に乗じて言ひがかりする詐欺。晝夜用心記にこんな話がある。本町の現銀吳服店は

頗るよくはやる店であつた。あるとき一人の侍が中間をつれて紅絹を買ひに来たが、店員の目を盗んで左の袖口から一疋懐へ入れた。店目付がこれを見つけて、その侍のそばに寄り先刻懐中された紅絹を御出しなさいときめつけた。侍はそんな覺えはないといふ。彼此議論するうち、店の者が無理に侍の懐へ手を入れて取り出し、これさへ取戻せば用はないから御歸りなさいと突き出した。すると侍は中間に命じて二丁目の絹布屋和泉屋與助を呼ばしめ、受取證を出し、最前その方の家で買った紅絹を懐へ入れて居たら、こちらのものを盗んだといふ話だから、鑑定してくれといつた。與助は検印まで捺しましたから間違ひありませんといつて、見ると、いかにも検印が捺してある。なるほどこちらの店でもよく調べて見ると紅絹は紛失して居ない。これは誠に相濟みませんとわびると、侍は盗人よばはりされた無念に、店員を残らず斬つて自分も切腹しようとして、たけり出した。そんなことをされてはたまらないと番頭は侍に五兩握らせたところ侍は案外にもこりとして中間を連れて去つた。全く初めからたくらんだ仕事であるとはわかつて、店がふさがる損にかへられないので、番頭が氣轉をきかせたのであつた。

次に世間用心記にこんな話がある。中ぬき町に堀江屋新四郎といふ小判市のやりくり問屋が出来、大けさな賣買を始めた。ある夜寄手が大ぜい集つて、小判十萬兩の賣買をし、間金貳百兩を預けて歸り、翌日の相場を案じて來て見ると、亭主が留守で、どこへ行つたか更にわからず、午後になつても



歸つて來ぬので、これはてつきり、亭主が間金を持ち逃げしたにちがひないと、戸棚の錠をねぢきつてあけて見ると、二百兩たしかにあるので、扱は不思議と話し合つて居ると、ふらりと亭主が歸つた。戸棚の錠のねぢきつてあるのを見て大に驚き、自分は親戚に病人が出来たので見舞に行つたが誰が一人戸棚をあけた？ なに、みんなしてあけたと？ これはしたり、みんなの間金の外に自分の持金を三百兩入れて置いたが、それをどうして呉れた？ 知らぬとは言はさぬぞ返してくれねば訴へるぞとおどかしたので、たうとうみんなが頭割りにして金を出さねばならなかつた。

一、チャンスをねらふ詐欺。晝夜用心記に凡て十種、世間用心記に五六種ある。先づ晝夜用心記から始めるならば、『世の中の婆といふ婆』では、三條の橋詰に居た乞食婆を、自分の母親だとあがめて宿へ迎へて來、よい着物を着せて呉服屋へ行き、澤山の品物を買ひ入れ、同役のものに見せたいから一寸借りて行く、その代り母親を残して置くから、あとで、よい品柄でも見定めてもらつて下さいといつて、まんまと逃げてしまふ。『萬見通して御印』では、萬病をなほす祈禱をやるふれて、ある富豪の女房の難病を水神の御とがめでであると判定し、川の中へ壇を設けて、金拾兩御出しになれば七日の間に必ずなほす、若しなほらなければ必ず御返しするといつて、拾兩を身につけ、夜分祈禱最中に、どぶんと川の中へとびこんで、何處とはなく逃げてしまふ。『松茸は平家の侍』では、あき家を陣取で大盡暮しをし、諸方から色々なものを運ばせ、潮時を見はからつて、品物を持つて逃げてしまふ。『晝

の白藏主』では、出家の風を装つて弟子をつれ、扇屋や衣屋で澤山の品物を注文し、手代に持たせて來る途中で、手代を他の店へ使ひにやり、その間に、扇子や衣のはひつた箱を石や瓦をつめた箱と摺りかへ手代をまいて逃げてしまふ。『女護島とは爰』では、ある行商人の留守中、妻女が、辻井戸へ水を汲みに行つたあとへしのびこみ、手早く蒲團を裏返しにたゝんで背負ひ、玄關に立つて、妻女の歸つて來るのを見て、蒲團を買つてくれませんかといふ。妻女は見知らぬ男から蒲團などを買つては氣味が悪いから、いらぬといつて斷る。すると、さやうならばと悠々と去つてしまふ。『嫁入前の染絹屋』では、一人の老婆が下女をつれて、呉服店に立寄り、姪が嫁入するからといつて澤山の品を買ひ、一應本人に見せたいので、横町の宅まで手代衆に行つてもらひたいと、下女に手代を伴はせてつかはしやがて、二人はある家にはひる。手代が入口に待つて居ると下女が出て來て、七十旬ほど負けてもらひたいとのことだから一走り行つてきて來てくれといふ。程なく手代が返事をもつてかへつて來て、只今の女の人に逢はせてくれといふと、髭男が出て來て染絹を賣りに來た女ならもう歸つたといふ。さてはと店に戻つて待つて居る老婆をきめつけようとすると、最前、便所を借りたいといつて奥へ行つたまゝ戻らぬとの事、捜して見るともぬけの殻。その實、こやし取る男が來て、肥たごの中へ老婆を入れて去つたのである。『世界は一夜の乗合船』では、旅へ出た人の留守へ行き、飛脚を装つて、御主人が途中で卒中で起されたからといつて告げ飛脚賃をかたる。『御縁日は清水北野』では、天満宮



の祈禱所に多分の金を寄附して娘の安産の祈禱を頼み、明日御洗米を頂きに帰ると言つて歸り、扱盃日祈禱所にあがり込んで居ると、絹屋が註文の羽二重を持つて来る。今、取こみ中だから後程代金を取りに来てくれと手代をかへす。扱手代が後に祈禱所へ代金を取りに来ると、そんな品は註文した覚えがないといふ。扱は祈禱を頼みに来た男はかたりだつたか『割附銀は長老迷惑』では、寺町通りの白蓮寺が破損修理の奉賀をすゝめて居ることをきいて、室町の某ですが、大門を私一人で寄附させて貰ひたいと申出る。住持は大に喜んで男を招き入れると、男の連れて来た大工は門の測量にかゝつた。あくる日川原町の古木屋の足が澤山来て門をこはしかけたので、驚いてきいて見ると、昨日檀家總代から門を買受け、代金まで支拂つたといふ。『思ひの外の御能筆』では、ある兩替屋へ西國大名の使者男が供をつれてやつて来て、金子百兩を銀で買ひたいといつた。金子は大徳寺へ施物にするのだから包みの上書を立派に書いてほしいとの事。手代たちが上書をして中々うまく書けぬので、どうか御自分で御書きをとの事に、筆を取つて書くと、中々の能筆。で、供の者に向つて銀の包を出せと命ずると、扱は銀箱を取り出して包みを四つ五つ出したが、こりやいかぬ、この銀箱ではなかつた、間違つたから取り替へて来い。はいといつて、包みをもとにもどす拍子に、兩替屋の金を包んだのまで入れる。これ粗忽をしてはいけない、それは御店の金だよ。さうでしたかと扱は頭を叩いてかへす。かへす拍子に持つて来た包の方を出す。同じ男の上書だから、誰にも氣附かれない。さて取り

かへに歸つた扱は中々戻らぬので、使者男は、よろしく頼んで一先づ歸るが、兩替屋では二三日待つても音沙汰がないので、包を開くと中から出たのはにせ小判『東山に於て無茶の食』では、東山へ遊山に來た人たちの留守へ、旦那から羽織を取つて來いでしたといつて、かたり取る詐欺が書かれてある。

次に世間用心記の物語から、チャンスをとねらふ詐欺を選ばなければ、『子供でねぶらした千年館』では、福島屋の子太郎市が道で遊んで居るのを見て、なれ／＼しく近寄つた一人の女が、太郎市に玩具を買つてやり乍ら、抱いて香具屋へ行き鼈甲の櫛を買ひ、福島屋のものですから、あとで代金を取りに來て下さいといふと、こちらでは太郎市を知つて居るので何氣なく渡す。それから女は、福島屋へ行き香具屋のものですが、坊ちやんが、遠あるきして居られたからつれて來ましたといつて置いて行く。あとで、香具屋の手代が代金を取りに來て、福島屋の内儀との間にとんちんかんな會話の初まつたこととは言ふ迄もない。『高蒔續のさけ重』では、芝居小屋の雑沓に乗じ、茶屋の手代が客の棧敷に置いて行つたさけ重をすぐ後から、間違へたから取り替へて來ますと持つて行く『三の膳の祝言ぶるまひ』では、料理屋で集つて飲んで居る席へのこ／＼あがり込み、客の間を取り持ち、客には料理屋の手代と思はせ、料理屋には客の供人と思はせ、客のぬぎ捨てた羽織を盗む『格氣の藥ちがひ』では、夜半に醫者の家をどん／＼叩いて急病だから來てくれと言つておびき出し、いゝ加減の場所へつれて行つ



て追剥をする。「衣の袖にくらべたる羽二重」では、質屋八右衛門方へ立寄つた坊さん、弟子二人をつれ、下町の呉服屋六右衛門方へ行くのだが、どうにも暑いから、小袖を脱ぐによつて一時預つてほしい、おつつけ割符を持つて呉服屋から取りによこすからといつて、法性寺と紙に書き、半分ちぎつて、一つは質屋の手代へ渡し、あとの一つは自分に懐中して、禮を言つて立ち出で、それから呉服屋へ行き、加賀絹をどつさり誂らへ、小袖に仕立て、ほしいから、手本をとり、宿の質屋へ行つてほしいと割符を出して先刻の小袖を取寄せ、さて、も一人の同役に相談したいから、この品を一時貸してほしい、代金は明日質屋へ取りに来てくれといつて、自分の小袖を残し、呉服屋の品物を持つて、いざこさらば。

讀者は世間用心記よりも、晝夜用心記の方に、遙かに多くの珍趣向のあることを知られたであらうと思ふ。

三、共謀詐欺。晝夜用心記の中には、「金子貳兩と品玉」として、穴藏屋をかたる話がある。穴藏を作るとして、供を連れた中小姓が来て、手つけ金として二兩渡したのに喜んで、穴藏屋が御馳走すると、折しも呉服屋が表をとほつたので呼び入れ、澤山の品を注文して、相役のものに見せて置きたいからとて、供と呉服屋の手代とに品物を持たせて相役のところへ使ひにやる。あとで三人が酒をのんで居ると、中小姓は腹痛がするからといつて便所に行く。長い間経つても便所から歸らぬのに不審をいだ

いて居ると、呉服屋の手代が、品物をかたられたといつて飛んで来る。扱はと思つて便所へ行つて見ると侍は居ない。呉服屋は怒つて穴藏屋はきつと共謀にちがひないと攻めつけ、品物の代を出せとねだる。たうとう公儀へ訴へると、不思議にもその呉服屋をしばれとの事。果して呉服屋は中小姓と共謀になつて穴藏屋から金を奪ふつもりだつたと白状した。「一盃喰うたる伊丹諸白」では、伊丹の酒家へ西國の旅人が伊勢參宮の途次立寄つて、酒をのんだところ、勘定の段になつて財布をすられたことに氣付き、腰の物を預け、なほ三兩借りて、戻りに立奇るといつて去つた。主人がその腰のものをみると、目もさめるばかりの拵らへ、なまやすいものではないと思つて居ると、本阿彌の何某が通つたので鑑定してもらふと千兩の値打はあるといふ。日ならずして先の旅人が立寄つたので、手放してもなかつたのを百兩で買ひ、さて京の本阿彌家へ見せに行くと百文の物でもないといふ。即ち鑑定した男と、旅人との共謀詐欺であつた。

世間用心記の中には、「疝氣のむしを頂いた五拾兩」と題してこんな話がある。須田町の酒屋に杉といふ下女があつた。よく働らいて、一粒の米もおろそかにせず、慈悲心深く世間の評判となつた。ある日、羽黒山の山伏が二人すぎ様に逢ひたいといつて酒屋へ来たので、主人が驚いてわけをたづねると、湯殿山で大日如來に願かけしたところ、満願の日に、大日如來の仰せには、われを拜まうなら、須田町の酒屋のすぎといふ下女を拜めとの教だつたから、拜みに来たとの事であつた。で、いやがる



杉をつれて出ると二人は疊に頭をすりつけて拜んで出て行かうとしたので、湯殿山の話をかかせてくれといつてとめると、それではといつて山伏は色々話をし酒屋商賣は米を粗末にするから酒屋地獄へ落ちるが、あなたもたしかに地獄へ落ちる運命になつて居る。もし地獄へ落ちたくなければ千人の僧の供養なさい。五六十兩御出しになれば私たちが代つて供養してあげようと告げた。主人は喜んで早速五十兩を出すと二人は供養を引受けて歸つた。あとで主人は杉を呼び、「おい杉うまく謀つたな。山伏の一人は兄で一人は良人だらう。顔見合せた時の眼付でわかつたよ。さあひまをやるからいそいで出て行つてくれ、今頃、二人の山伏は小判が温石となつて居るのに驚いて居ることだらう。それにしても酒屋地獄とはうまいことを言つたものは、」

四、迷信に乗ずる詐欺。晝夜用心記には「駿河に沙汰ある娘」と題しこんな話がある。藪井笹右衛門といふ竹細工商の娘が十八で死んで、両親の涙のうちに西空寺へ葬られた。四十九日に近い比、十六七の美男が来て、住持に向ひ娘と戀中であつたことを語り、悲みの果、墓で自害しようとしたので、住持は墓を掘つて死骸の腐敗した有様を見せたら戀もさめるであらうと思つて、下男に墓を掘らせると死骸にだきついてなけき、然し、自害はせずに歸つた。話變つて、藪井方では四十九日の法要をねんごろに營んで居ると一人の法師が来て、御宅の娘さんが夢にあらはれ、悪道に沈んで居るから、懇ろに供養してほしいとの事、目がさめて見ると枕もとに、この短刀があつたといつて見せると、笹

右衛門は大に驚き、これは娘の死骸と共に葬つた國次の守刀、さては貴僧の仰せは尤もと、澤山の金を出して供養を頼むのであつた。「仕出し菓子屋」では、ある菓子屋へ、時々惣髪のお客が来て、菓子を買つては、錢を過分に置いて行く。亭主が不審に思つて、ある日手代に跡をつけさせると、男は稻荷山の奥の穴へはひつたが、穴の中には公家めいた四五人が喜んで菓子をたべかけた。よく見るといづれにも尾がはへて居るので、手代はびつくりして歸り、このことを告げると、扱は幸福にも御稻荷さんに見つけられたんだ。早速、御まつりをするがよいと、燈明をあけたり油揚げをそなへたりして居ると、果して五人が御いでになつたので大喜び、大御馳走を振舞ふと、何でもよいから望みを申せとの事。主人はかしまつて、七百兩稼ぎたためましたが早く千兩にしたう御座いますといふ。うむ、それは易いこと、その七百兩を出しなさい、千兩にしてあげますからと、亭主に七百兩を出させ、紙に包んで壇にならば、祈禱をして歸つたあとで、包みを開いて見ると、七百兩はみんな偽金とすりかへられて居た。

世間用心記には「去年からの清盲」と題して、こんな話がある。善光寺の開帳の前に、Aといふ男が急に眼が見えなくなる。開帳のとき、供物をあつくして祈願すると不思議に眼が見えるやうになつた。これをきいたBといふ男は、いざりを連れて来て、澤山の供物をAに渡し、どうか一しよに祈願してくれといふ。Aは、自分が受取るべき筋ではないといつて拒んだが無理に押しつけて歸つたとこ



ろ、不思議にもいざりの腰がたつた。これを傳へきいた世間の人々は、Aのところへ澤山の供物をもつて来て、病氣を祈つた。即ちAとBといざりとは共謀だつたのである。

五、先方の慾を利用する詐欺。晝夜用心記には「妻子分別の種」と題して次の話がある。ある男が妻子を養はんために一儲けしようと思つて奸計をめぐらした結果、出入の豪家から黄金の香爐を借り受け、これがある有徳人のところへ持つて行つて、この眞鍮の香爐は重代の寶物ですけれど、賣り拂ひたいと思ふがどうでせうかといつて見せた。見ると黄金だから、つぶしにしても三百兩のものはある。多分持主は知らずに眞鍮だと思つて居るだらうから、七十五兩に賣れと言ひ出した。男は兎にも角にも承知して一旦持つて歸り、御幸町の細工師のところへ、色から形から全く同じの眞鍮の香爐を二兩二歩で作らせ、それを有徳人へ届け、原物は豪家へ歸した。後に有徳人が眞鍮であることを發見して男を責めると、はじめから眞鍮だといつたではありませんかと空嘯いて居た。「始めの囁き後悔千萬」では、ある兩替屋へ度々来る男が本當の金を見せて、これは自分の作る眞鍮だといつて兩替屋をそののかし、兩替屋に澤山の資金を出させてそれを奪つてしまふ。兩替屋は訴へることもならず泣寢入になつた。

世間用心記には、先方の慾心を利用する詐欺物語の適當な例は見當らない。

六、こちらを充分信用させて後行ふ詐欺。これは兩用心記の中に三つばかりづつあるがあまり長く

なるから一つづつ例を擧げることにする。晝夜用心記には「利易の金貸屋」としてこんな話がある。ひらた町に美津屋徳四郎といふ町人があつた。細君は非常な美人であつたがその素性知れず、三年前にことし十一になる男の子を残して死んだ。ある時、男の子が手代をつれて戻ると、途中で、供をつれた立派な服装をした男が、そばへ寄つて、この子の母の名はこれこれで三年前になくなつた。どうも妹の顔そっくりだといつて、器粟銀七八十粒を渡して去つた。手代が歸つて徳四郎に告げると、徳四郎は早速その男をたづね、それから段々懇意になり、近所に借家を見つけてやると、細君の兄といふその男は豪奢な生活をした。ある時その男が小聲で、實は自分は大阪の穢多村の吉六の金貸を頼まれて、五萬兩自分一手で引受けて居る、薄利で貸せるから借り手を周旋してほしいとの事、徳四郎が之を言ひふらすと、兩替屋、萬問屋など凡そ七八十人争つて申込んだ。で、何月何日、各々三ヶ月分の利子を持つて来てほしいとの事に、當日、皆々が集ると、早朝来るべき金が晝過ぎになつても来ない。飛脚を出すと夕方には來るとの話、迎ひ旁々東山燈明庵で夕飯をあけたいからとて打連れ立つて行くと、酒宴半ばにその男の姿が見えない。扱はと皆々が、男の借家に歸つて見ると錠が下りて居る。つまりみんな利子として持つて來た金を全部かたり取られたのである。

世間用心記には「樽肴持つて急度御禮」と題し、次の話がある。月代屋秋右衛門といふ男が、金を拾つたから、落し主は自分のところへ申出て貰ひたいといふ高札を出したら、世間の人々は正直な人も



あるものだと感心した。その年の暮に、家主が秋右衛門をたづねると頗る當惑さうな顔をして居る。どうしたのかとたづねると、この暮に到着すべき國元の金が正月二十日頃でなくては手に入らぬことになつたので困つて居るのだと答へた。それならいつそ拾つた金を開いて一時借りて使つてはどうだといふと、いや、年の暮のことであるから落し主が來たら申し譯がない、でも、あなたが證人にもなつてくれるならつかつてもよい。では證人になつてやらう。それならばといつて開くと六十兩ばかり出たので、早速それをもつて諸方の支拂を濟すと、ひよつくり落し主が來てどうしても返してくれといふので、家主は證人になつた以上一時取りかへて、秋右衛門から落し主へ手渡した。後に家主から秋右衛門に返濟を請求してもいつかな返さない。返さないも道理、それは秋右衛門がはじめから企んだ仕事であつた。

### 曲亭馬琴の『青砥藤綱摸稜案』

『青砥藤綱摸稜案』は文化八年の冬から翌年にかけて出版されたものであるから、三比事の出版後凡そ百年を経過して居る。その間に文學の中心地は上方から江戸に移り、小説の形式も大に變化した。従つて、同じく棠陰比事から材料を供給されたとはいへ、三比事と摸稜案とは、叙述の形式に於ても、

材料の取扱ひ方に於ても全くその趣を異にして居るのである。三比事の物語が、殆んど皆、事件の簡単な説明であるに反して、摸稜案の物語は所謂「照應あり、波瀾あり」で、讀んで非常に面白く、こゝにも、物語作者としての馬琴の非凡な技術を十分窺ふことが出来ると思ふ。摸稜案も三比事と同じく一種の裁判物語である。犯罪の顛末が先に述べられて、然る後事件の解決が裁判官によつて行はれるといふ書き方は、三比事と其の軌を一にして居るけれども、筋の立て方が極めて巧妙であるために、現今のこの種の歐米探偵小説に、頗る似通つた面白味がある。この書は前集と後集に分たれ、前集には青砥藤綱本傳の外に三つの中篇小説と三つの短篇小説とを收め、後集は一つの長篇小説から成つて居る。各篇を通じて、名判官青砥藤綱の明快なる裁判振りが描かれて居るけれど、所謂「事件探偵」の経路は比較的簡単に述べてあるばかりで、且つ又「探偵」の要素として「偶然」がだいぶはひつて來て居る。

この小説中の事件は、青砥藤綱を出す關係上、鎌倉時代の出來事として描かれてあるけれども、その實、青砥藤綱は江戸時代の名判官大岡越前守をモデルとしたものであつて従つて摸稜案の中には越前守の取り扱つた事件が可なり多く織り込まれてあるらしい。現に、後集に收められた長篇「蠶屋善吉の事件」は、大岡政談の中で、人口に膾炙されて居る「越後傳吉の事件」を書いたものである。青砥藤綱はもとより實在の人物であつたけれども、その政談はあまり多く傳はつて居ない。だから



ら、作者自身も、藤綱傳の終りに、

『……藤綱が潔白清廉なること、すべてかくの如く、されば時宗、貞時二代に仕へて、久しく評定衆の上坐にありといへども、理世安民の政道正しく、善には主君を稱し、悪をば身に負ひて、民をして北條ぬしの、仁恵をらしめつゝ、努々主の非をあらはして、わが名を取らんとすることなれば、萬民ますくその徳を慕うて、これを思ふこと赤子の母を慕ふがごとし、夫必ず人にすぐれたる所あらん、惜哉記者筆を絶て、その全行を見るに足らず、今僅に、太平記、北條九代記、鎌倉志、この餘軍記雜籍に載する所を抄録し、更に街談巷説を編纂して、これを摸稜案と命けたり、蓋し摸稜は、蘇味道が故事を取るにあらず、作者摸稜の手に成すのみ、姑く虚實を問はざれ。』

と書き加へて居る。摸稜とは事を明白にしないで曖昧にしておくことであつて、馬琴もなか／＼うまい題名を見つけたものである。然し、題名は摸稜であつても、青砥藤綱（即ち大岡越前守）の裁判は決して摸稜ではなかつた。大岡越前守は常識を巧みに應用して裁判を行つたといはれて居るが、摸稜案に描かれた藤綱の裁判にも、常識と理知とが鋭く働いて居る。私は最初に、馬琴の描いた藤綱の『裁判』に對する態度について述べて見よう。

### 青砥藤綱の裁判に對する態度

摸稜案の卷頭に『青砥左衛門尉 藤綱傳』が物されてあることは既に述べたが、この中に作者馬琴は、藤綱の性格を述べると同時に、藤綱の裁判時に於ける態度を記して居る。その態度は裁判心理學の立場から見て、極めて合理的であるから左に原文の儘引用しようと思ふ。

『……されば藤綱は、訴陣に臨みて、理非を沙汰する毎に、始終眼を閉て、訴人の面を観ることなし、人みなその意をしらず、ある人言の序に、その故を問しかば、藤綱答へて、さればとよ、人の容止と心とは似ざるものにて、はじめ、うち見るより、いと憎さけなるあり、又あはれらしきあり、信らしきあり、頑しきあり、その品多くして、いくばくといふ數を知らず見るところの眞らしきと思ふ人のいふことは何事も實と聞え、頑しと見ゆる人のいふ事は、何事も偽りと見ゆ、又哀らしき人の訴は誣られたる事ある如く思はれ、憎さけなる人の争ふは、巧でいひなすならんと見ゆ、これらの類は、わが見る所に心も移されて、彼此いまだ言葉を出さざる先に、はやわが心のうちに、彼は邪ならん、此は正しからん、是ならん、非ならんと、わが心を師として思ひ定むる程に、訟の言葉を聽くに至りてはわが思ふ方に引れて、聞誤つこと多かり、訴陣に臨みては、哀らしきに憎むべき



ものもあり、憎さけなるに憐むべきことあり、眞らしきに偽りあり、頑しきに直なるあり、此さか  
 ひ特に多し、人の心の知り難き、形貌をもて定むこと稱ふべからず、古の訴を聴ものは、氣色に  
 よりて聴ことあるよし、物には見えたれど、それは聊も覆るゝ所なき賢人のうへにこそ、藤綱が  
 如きは、常に覆るゝこと多し、この故に、始終眼を閉て、訴人の面を見ず、只そのいふ所を聞わか  
 ちて、是非を定むるのみ、むかしある女房、八幡殿（義家）を評して至極の悪人なりといひしと  
 ぞ、けに義家朝臣は、弦を鳴らして、物の怪を消伏したる勇將にをはせしかば、武備面に見れつゝ、  
 いと逞しくこそありつらめ、婦幼の目をもてこれを見れば、悪人とも見えたるなるべし、色好みなる  
 心より、悪人ならんと見られたる、義家の氣性、媚す、へつらはず、武をもて朝廷のおん衛となり  
 給へる、その人となり、思ひやらるゝかし、又、訴陣に出るもの、誰かおそろしと思はざらん、し  
 かるを、まうす事の理にたがへりとして、頭人いたく、彼を罵り懲すときは、そのものますく、  
 て、遂に情を得述す、その情を得述べざるときは、理にして非とせらるゝもあるべし、又、心しふ  
 とく、言を巧て、まうし掠めんとするものをば、いかばかり罵懲すとも、姑くは口をもつぐめ、眞  
 實に歸伏するは稀なり、こゝをもて、藤綱訴陣に理非をわかす毎に、威をもて懲すことをせず、只  
 理を推て彼にその非を知せんと思ふのみ、辭を安寧にして、民を安せよと、曲禮にも本文あるにあ  
 らずや、といひしかば、問者そゝに感涙を流して退きけり」

更に藤綱は、最明寺時頼の諸國行脚を難じて「むかし最明寺殿の諸國を行脚したまひしは、只その  
 目を頼み耳を憑み給ふ、おん誤とこそ思ひ候へ、凡そ人の目は物として見えざることなけれど、  
 紙一重隔つれば絶て見えず、耳は聲として聞ざることなけれども、數町の外は聞えず、よしや國々を  
 遍歴し給ふとも、見る所と聞く所に限りあり」と斷言し、なほ「只目に見、耳に聞く所をもて、政  
 を天下に布んと思召すは、管もて蒼天を窺ふより猶疏なるべし」と建言して居る。  
 これ等の言葉は今の裁判官にとつても甚だ尊い教訓である。「人相によつてある程度までその人の心  
 を窺ひ知ることとは出来るが、それは賢人のことで、自分ごときものは、却つて人相のために誤解を生  
 じやすいから、法廷では眼をふさぐ」とは、實に心得たものである。グロースの「犯罪心理學」の中  
 にも誤斷に陥り易い條件として五つをあけ、そのうちの第一にこの自然的先入見 Natural prejudice  
 を數へて居る。而もかやうな先入見は極めて去りにくいものであつて、ハルトマンも「感覺から生ず  
 る偏見といふものは、之を消すことが至難であつて、例へば地上に出かけた月も中天にある月も同じ  
 大きさである、何百遍注意をして見ても、依然として、地上に出かけた月は中天にある月よりも遙か  
 に大きく見える。」と言つて居る。そしてかやうな偏見は裁判の際、裁判官に甚だ起り易いのである。  
 前掲の文の中には、ある女が八幡太郎義家の顔を見て極悪人だと言つた話があけられてあるが、西洋  
 でも誤認の例として、ある女が馬を見た話がよく引用されて居る。それは即ち、ある百姓の女が長



五六間ほどの厩の前の入口から一疋の馬が頭を出し、後ろの入口から他の馬が尻毛を出して居るのを見て、毛色が同じであつたため、同一の馬の頭と尻毛だと見誤り「なんて胴の長い馬だらう！」と叫んだといふ話である。これに類した誤認は百姓女ばかりでなく誰にもあり得る話である。だから、裁判官は偏入見に左右されないで、只管に理に従つて裁判を行はねばならないのである。

摸稜案に書かれた藤綱はこの先入見を恐れると同時に、人間の感覺の頼みにならぬことをよく知つて、理智によつて、獄を断じようとした人である。彼が如何に「道理」を愛したかは、嘗て夜分、川の中へ十文の錢を落したとき、五十文の松明を費して捜し出させたことでもわかる。ある人が彼のこの行爲をあざ笑ふと、藤綱は、川へ落ちた十文は捨て、置けば永久失はれてしまふが、自分の費した五十文の錢は商人の手に渡つて、永く使用されるから、つまりは天下の利益ではないかと反駁した。よく考へて見ると、少し變である。けれども理窟はとほつて居る。又彼は極めて清簾潔白な性質であつて、ある時最勝園寺殿貞時が鶴岡八幡宮へ通夜した曉の夢に、一人の老翁があらはれて、青砥左衛門を重用せよと告げたので、近國の莊園八箇所を藤綱に與へようとする、藤綱はそのいはれを聞いてそれでは夢に、藤綱の首を切れといふ御告げがあつたならば、罪のない私の首を御きりになりますか？」と詰つて、それを受けなかつた。

かういふ調子で彼は數々の事件を取り扱つたのである。以下、私は摸稜案に收められた二三の物語

の内容を紹介しようと思ふ。

### 『摸稜案』の最初の物語

摸稜案の最初に收められた「縣井司三郎」の事件は、棠陰比事の最初の物語がその骨子となつて居るやうである。棠陰比事の物語は極めて短く事件も至つて簡單であるが、それを基として作つた「縣井事件」は極めて複雑で且巧妙に出来て居る。私はそれ故、馬琴が如何に想像力の發達した人であるかを示すために、先づ棠陰比事の物語を左に譯出しようと思ふ。

「丞相向敏中が西京といふ所の裁判官をして居た時のことである。一人の行脚僧がある。村にさしかかると、日がとつぷり暮れたので、ある家に一夜の宿を求めたところ、主人が許さなかつたので、せめて門外に休ませてくれと頼むと、主人は澁々ながら承諾した。すると夜中に、その家に盗人がはいつて、一人の女に澤山の財寶を持たせ、垣を越えて出て行つたので、行脚僧は自分に盗人の嫌疑がかつては困ると思ひ、夜の明けぬ先に立出でて、野中をすん／＼急ぐうち、誤つて古井戸の中に落ちこんだ。ところが、ふと、氣がついて見ると、先刻盗人と同行した女が、同じ井戸の中に切り殺されて居たので、はつと思つて逃げようとしたけれども、深い井戸のことゝて、どうするこ



とも出来なかつた。そのうちに夜が明けると、件の家の主人は盗難に氣ついて追跡して来たが、やがて古井戸を發見して、中に居た僧を捕へ、役所に訴へ出た。行脚僧の衣の裾には生々しい血がついて居たので、役人たちが、嚴しく責め立てると、行脚僧はとても罪を免れることは出来まいと覺悟して、女と共に彼の家にしのび込んだが、發覺を怖れて女を殺し、井戸の中へ投げ込まうとした拍子に自分も誤つて落ちこんだと自白した。贓品と女を殺した刀とは井戸の傍へ置いたけれども、何人が持ち去つたか自分は知らないと言明したので、役人たちはそれを眞實の自白だと思つた。ただ、裁判官の向敏中だけが、贓品と刀の無いのに不審を抱いて、色々に僧を問ひつめると、僧も包み切れずに、何事も因縁と諦めて無實の罪を背負ひ込んだ旨を告げた。そこで向敏中は部下の役人に意を含めて、眞實の盜賊の行方を捜させたところ、部下のものが、村の茶店に休憩して居ると、老婆が茶を出しながら、この頃捕へられた行脚僧はどうなりましたかと訊ねた。役人が僞つて昨日死刑に處せられたよと答へると老婆は嘆息して、若し本當の賊が出たらどうなりますかとときいた。そこで役人は、僧が殺された以上たとひ眞犯人が出てもかまひなしだと告げると、老婆は、それならばと申しますが、あの女を殺したのは此村の誰それですよと教へた。役人は忽ちその者を捕へ、行脚僧は放免されたのである。」

この事件では、この物語の趣向は、後の部分に出て来るだけであつて、中心となる事件は全く別の

趣向である。

伊勢國鳥羽の湊に、縣井魚太郎といふ商人があつて、毎年鯉節や茶や山田の塗折敷などを持つて船で鎌倉に行商し、大小の武家を得意先として廻り乍ら、凡そ半年ほど逗留するのが例であつた。彼はその性質が至つて實直に商人に似合はず和漢の學に通じて居たが、少しもその才を誇ることがなかつた。

ところが魚太郎と同郷の商人に金刺利平二といふ男があつた。この男もやはり、魚太郎と同じく鎌倉の行商に出たが、うはべは潤達に見せて居ても、心の中は非常に吝嗇で、魚太郎の商品よりも高かつたけれども、口先がうまいために商賣は繁昌した。そして魚太郎と同じく和漢の學に通じて居たので、人々は彼の話に釣ひ込まれ、いつとなく丸めこまれる程であつた。

あるとき縣井魚太郎と金刺利平二が同船して鎌倉に行く途中、魚太郎は何となく塞ぎ込んで居たので、利平二がその理由をたづねると、魚太郎の言ふには、實は自分には小太郎といふ男の兒があつたが、先年母の大病の時、佛菩薩に祈願して、母が平癒しますれば、小太郎を出家させますと誓つたところ、幸に母が平癒したので、小太郎が八歳のとき寺に遣したが、程なく住持と共に筑紫へ行つてしまつて、今年で三年になるが何の音沙汰もなく、母は先年死んで、女房は去年女の子を設けたが生れて間もなく死に、その後また女房は妊娠して、今八ヶ月であるから、女房のことを思つて氣が勝れ



ないといふのであつた。これを聞いた金刺は大に同情し、實は自分の女房も今八ヶ月の身重であるから、思ひは同じである。かうして同じ商賣をして居る以上、いつそ生れる兒同志を許嫁にして親戚の縁を結ばうではないかといひ出したので魚太郎は大に喜んで、その場で親戚となることに決した。

かくて二人が前後して鎌倉から歸ると、縣井の女房は男の兒を生み、金刺の女房は女の兒を生んだので、男の兒を司三郎、女の兒を十六夜と名けて許嫁とならしめ、兩家はめでたく親戚となつた。ところが司三郎、十六夜が七歳のとき、縣井魚太郎は重病にかゝつて、とても恢復の見込が立たなかつたので、金刺利平二を枕元に呼んで、鎌倉の得意先を譲り、司三郎のことをくれぐれも頼んで、程なく死亡した。利平二は約束を守つて魚太郎の遺族を親切に待遇し、司三郎に學問を授けたので、十一歳の頃には司三郎は大ていの書物を讀むほどになつた。

その頃鎌倉では北條顯時が、金澤なる稱名寺のほとりに文庫を建て、各方面の圖書を蒐集して學問所を開いたので、全國の各地から、多くの學徒が集つて來たが、適當な學頭がなくて困つて居たところ、金刺利平二は商人に似ず學問が勝れて居たので、顯時は利平二を召して、學頭になる氣はないかと話した。利平二は大に喜んでその場で御受けを致し、すぐさま鳥羽へ歸つて事情を話し、女房と十六夜と、老僕の繁市と、その娘の弱竹とを連れて鎌倉へ参り、金澤文庫のほとりに大きな邸宅をかまへ、若黨十人あまりを召使つて金刺圖書の名を貰ひ學頭としての威嚴を示した。はじめ人々は、彼が

商人であることを知つてあまり寄りつかなかつたが、上流の人々にほつ／＼金を貸したりしたので、後には執權時宗にも見参し得る程の勢力となつた。

これに引きかへ、縣井司三郎とその母は、金刺に去られてから、何の音沙汰もなかつたので、二人は芋を續いだり、磯網を編んだりしてその日／＼を食しく生活せねばならなかつた。司三郎は母に孝行する傍、學問に餘念なかつたので、年を経るに従つて、金刺圖書などよりも遙かに上達することが出来たのである。かくて、司三郎が十八歳の時、母は我が子の將來を憂ひ、ある日司三郎に向つて、貯へた十貫文の金を渡し、鎌倉へ行つて金刺に身を任すやう勧めたので、司三郎は母と共に、鎌倉へ参り、一先づ旅宿に落ついて、翌日司三郎一人で、金刺圖書を訪問した。

ところが圖書は司三郎の姿を見てあまり喜ぶ様子もなく、今日は忙しいから、追て沙汰する迄宿に居るがよからうと告げて、すけなく歸してしまつた。圖書の妻はその時屏風の蔭から司三郎の姿を見ると、男振もよく、動作も立派なので、司三郎が歸つてから、何故もつと親切にしてやらなかつたかと詰ると、圖書は、娘十六夜を北條殿の一族のものへ與へたい願であるとして、却つて妻を叱るのであつた。

一方司三郎は旅宿へ歸つて、圖書の不機嫌であつたことを母に告げたが、母は圖書の内儀の心を信じて、まだ四五貫文の金が残つて居るから、金刺圖書から呼出しのある迄待つやうにすゝめた。とこ



ろが三十日経つても圖書からは使ひが来ないので、司三郎は不安に感じ、毎日、金澤文庫のほとりを徘徊して、學徒たちの講書の聲をきいて心を慰めて居た。

ある日の夕方、彼が金刺の第宅の後ろを通ると、恰度、その時、十六夜は腰元の弱付と二人で庭に出て居たが、弱竹に教へられて、司三郎の姿を見て、大いに顔をあからめ、司三郎もその時十六夜の姿に心を奪はれてしまつた。で、その後司三郎は毎日金刺の第宅の裏をとほつて居たが、そのうちに弱竹の媒介で、ある夜人目をしのんで、十六夜の許に一夜を明し、あくる朝、別れ際に十六夜は、玳瑁の笄と、白銀の指環を、生活の助けにもといつて司三郎に與へた。司三郎は、今後、毎晩訪ねて來ることを約束して歸つたが、どうした譯か、十日ばかり姿を見せなかつた。

話變つて、金刺圖書の第宅から百歩ばかり東の坊に、一軒の質店があつた。主人は子母家利三郎と呼ばれて、裕福に暮して居たが、司三郎と十六夜とが會合してから恰度十日過ぎた夜、件の質店へ一人の行脚僧がたづねて來て、一夜の宿を求めた。小僧たちは夜も大分更けたことであるから、宿を斷ると、僧はせめて軒下でも貸して頂きたいと言つて其處にしがんで朝を待つた。するとその夜二人の大男が質店に盗みにはひつたので、これを見た僧は大に驚いて、自分に嫌疑のかゝることを怖れ、あつた軒端を逃げ出したが、あまり急いで野中の古井戸に落ちこんでしまつた。(この邊、棠陰比事の小説である)

一方、金刺の裏庭では腰元の弱竹が、今夜こそは司三郎が來るかと思つて居たところ、垣の外に蹙音がしたので、さては司三郎であらうと思つて呼びかけると、意外にも一人の大男がぬつとはひつて來た弱竹は大に驚いて「盗賊、盗賊」と叫ぶと、賊は刀を抜いて弱竹を切り殺し、次で十六夜の室にはひつて、衣類調度を手當り次第に奪つて立ち去つた。

やがて金刺圖書の家では大騒動となり、老僕の繁市は娘弱竹の死骸を抱いて歎き悲しみ、人々は盜賊の行方を捜したが、もとより知れる筈はなかつた。あくる日弱竹の葬式をすましてから、圖書は繁市に向ひ、自分はどうも司三郎が怪しいと思ふから、娘の菩提のためにも、司三郎の様子をさぐつて見よと告げるのであつた。翌日繁市が司三郎の旅宿を窺はうと思つて出かけると、道で與野四郎といふ小間物賣に出逢つたが、與野四郎が、頭に玳瑁の笄をさし、左手に銀の指環をさして居たのに不審を抱きかねて、十六夜のものだと知つて居たので、繁市は與野四郎に向つて、それをどうして手に入れたかと訊ねた。すると與野四郎は、昨日ある旅宿の前をとほると、中から若者が出て來て之を買つてくれといつたから買つたのだと告げた。それを聞いた繁市はその若者が司三郎であることを知り、與野四郎を連れて來て、圖書にその委細を告げた。

金刺圖書は目の前に十六夜の所持品を見て、弱竹を殺したのは司三郎にちがひないと思ひ、妻が諫めるをもきかずに、鎌倉へ行つて、主の顯時に事の次第を告げ、文注所へ訴へたのである。



青砥藤綱は訴への文書を読んで、圖書と與野四郎とに事情をたづね、彼等を退せてから、直ちに人を遣して司三郎の逮捕に向はしめた。かやうなことは夢にも知らず、司三郎は十日程前から母親が急病に罹つたので、晝夜その枕元に付ききつて居たが、そのうちに旅費が盡きたので、昨日、通りかかつた小間物屋に、十六夜から貰つた筭と指環を賣り、今日その金で藥を買ひに出かけると、途中で捕手のために縛められてしまつた。

司三郎が文注所へ引張られて來ると同時に質屋利九郎が先頭になつて、一人の法師に繩をかけ、この法師は先夜私の家に泊めてくれと申して來ましたが、斷つたところ、その夜家内へのび入つて、多数の品を持ち去り、行方不明になつて居ましたが、天罰を免れることが出來ず、三四町彼方の古井戸の中に落ちて居ましたから、引き連れて參りましたと訴へ出た。

藤綱は先づ司三郎を召し寄せて訊問し、この僧は多分汝の同類であらうときめつけた。そこで司三郎は自分の生立を始め、金刺圖書との關係や、筭と指環は十六夜から貰つたことなどを述べた。藤綱は之をきいて打ち笑ひ、然らばどうして十六夜に面會したかときき込むと、司三郎ははたと返答に行き詰つた。

そこで藤綱は一方の法師に向ひ、その身許をたづねると、法師がいふには、自分は筑前のもので景空と申しますが、此度師父に別れて東國に行脚しましたところ、路銀がなくなつたため悪心を起し質

屋をはじめ、金刺の家へのび入りましたが、その時女に見つけられましたので一刀のもとに切り殺しました。ところが逃げのびる途中で誤つて井戸に落ち、かうして捕へられました。すべて私一人の仕事で、こゝに居る若人とは關係のないことですから、どうかこの若人をゆるしてやつてくれと意外な自白をした。

これをきいた藤綱はにこりと笑つて、然らばその贓品と刀とは何處にあるかとたづねた。この質問に僧ははたと行詰つたらしかつたが、暫くしてから言ふには逃げ出して井戸へ落ちたときに落ちてしまつたと答へた。藤綱は利九郎たちに向つて、井戸の近所に何か落ちては居なかつたかとときくと、この頭陀袋と菅笠一枚きりでしたと答へた。藤綱はその二つの品を手を取つて暫らく調べて居たが、やがて打ちうなづいて利九郎等を先づ退かせた。

あくる日藤綱は司三郎を召し出して、十六夜との關係について詰問したので、司三郎も今は包み切れずに密通の次第を物語つた。そこで藤綱は金刺圖書を呼び出して十六夜と司三郎との關係を告げた。圖書は大に怒つて娘は決してそんな淫奔なものではないと言ひ張つた。そこで藤綱はたうとう十六夜を呼び出して訊問したところ、十六夜は非常に恥かしい思ひをしながらも、事實のまゝを申述べた。圖書はこれを聞いて、事の意外に驚いたが、如何ともする術なく、たゞ畏つて居るより外はなかつた。



これで司三郎に罪のないことはわかつたが、法師の景空の自白が信じ難かつたので、藤綱は圖書父娘を鎌倉にとり、司三郎と景空を文注所に居らしめ、その間に、雑色二人に計略を授けて金澤へ遣して眞犯人を捜させた。二人の雑色がある茶屋に憩ふと、茶屋の老婆は先日捕へられた二人の犯人はどうしましたかとたづねた。(この邊棠陰比事の趣向である。)二人はこゝぞと思つて、二人とも由井濱で首を刎ねられたと告げると、老婆はしきりに念佛を唱へたので、二人がその理由をたづねると老婆は眞犯人が外にある旨を告げた。そこで二人が偽つて、もはや眞犯人の名を告げても罪にはならぬと語ると、老婆は、我來八と與東太といふ無頼漢の仕業だらうと言つた。そこで、忽ちその二人を捕へて吟味したところ、彼等は包み切れずに何もかも白状して、贓品を提供したのである。

これでもう残る疑問は景空の虚偽の自白であるが、それは藤綱が景空の頭陀袋の中にあつた度帖を見るに及んではつきり解決された。即ちこの僧こそは、司三郎の實兄で、祖母の病氣平癒と共に出家し、後筑紫へ行つた小太郎であつた。近ごろ夢見が悪かつたので師僧に乞うて郷里へ歸つて見ると、母と弟とは鎌倉へ移つたとの事で、又もや遙々たづねて來ると、圖らずも文注所で弟の司三郎に逢つたので、それといはずに弟を助けるため、無實の罪を自白したのである。

かくて事件はめでたく落着し、景空は法華堂の別當に補せられ、司三郎は金刺圖書に代つて金澤文庫の學頭に任せられ、十六夜と結婚することになり、司三郎の母はうれしさのあまり日ならずして、

大病も癒えた。

縣井事件の紹介が意外に長くなつたけれど、讀者はこれによつて、棠陰比事の短い物語を骨子として曲亭馬琴が如何に巧妙に、その筋を立てたかを知られたであらうと思ふ。摸稜案は、數多い彼の作物中で、さほど有名なものではないが、物語作者としての馬琴の腕は、こゝにも十分に認め得られると思ふ。

暗號解讀

暗號が屢ば探偵小説の題材となつて居ることは今更言ふ迄もなく、すでに鎌倉比事の中にも取り扱はれて居ることは前に述べた所である。摸稜案の中にも暗號解讀に似たやうな『遺言判讀事件』があるから、それをこゝに紹介して置かうと思ふ。

これは青砥藤綱が北條時宗の命を受け、京都に赴いて裁判した三ツの事件の一つであつて、短篇小説の形になつて居る。三條の醫師山道某が死んで庶子の加古飛丸とその姉の鏡岱との間に遺産相續の争ひが起つた。加古飛丸は母と共に法廷へ出たが、母の陳述するところによると、山道は年五十に至るも本妻との間に子がなかつたので、彼女を妾として加古飛丸を擧げた山道は大に喜んで加古々々



と呼んで大に愛したが、本妻の手前さすがに家へ出入はさせなかつた。ところがいつの間にか本妻はこれをきゝ出して、嫉妬のあまり良人にすゝめて自分の姪を養女として長ずるに及んで鏡岱を聲に迎へたのである。然し五年前本妻が死んでからは本宅に出入りするやうになつたが、どういふ譯か鏡岱夫婦はそれを喜ばず、いつも不快な思をせねばならなかつた。すると去年山道が病氣にかゝつたので加古飛丸母子は看病したく思つたが鏡岱夫婦が之を許さず、やがて山道が死んでも、遺言状を楯に葬式にも列することを許さず、況んや一文の財産も分ち與へなかつたが、何分遺言状があるので度々訴へても御取り上げがなかつたといふのである。

そこで藤綱は、法廷に呼び出した鏡岱夫婦に向つて、何故に加古飛丸母子を近づけないで、山道の實子であるにも拘はらず財産を別ち與へなかつたかと詰ると、鏡岱の言ふには、それは全く父親の意志であつて、彼は臨床の時に鏡岱を呼んで、加古は實を言ふと自分の子ではない。加古の母は淫奔な性質で他に情夫を拵らへて居るらしい。それ故、自分が死んでも決して財産を分與する必要はないと言つてその通り譲り狀に書いたから、たゞ父親の意志に従つたに過ぎないと答へた。

そこで青砥藤綱は、然らばその譲り狀なるものを見せよといつたので、鏡岱が恐るゝ差出すと、藤綱は暫らく讀んで居たがやがてにこりと笑つて、「この譲り狀を見ると、加古飛丸こそ、山道の家を繼ぐべき者である。汝等は實に、思ふに似合はぬしれものである」と叱つた。

これをきいた鏡岱は、決してそんな筈はありませんと言つたので、藤綱は然らばこゝで讀んで見よといつて譲り狀をさしつけた。その文句は次のやうに書かれてあつたのである。

可家業相續讓受資財事

加古非吾兒家財悉與吾女婿外人不可爭奪者也仍如件

年月日

山道判

これを鏡岱は次のやうに讀んだ。「家業相續して資財を譲り受くべき事。加古は吾が兒に非ず、家財悉く吾が女婿に與ふ。外人爭奪すべからざるもの也。仍て件の如し」

藤綱はこれをきいて頭を左右に振り、この讀み方はちがつて居る。かう讀むのが正しいといつて、次のやうに讀んだ。

「加古非は吾が兒なり、家財悉く與ふ、吾が女婿は外人、爭奪すべからざるもの也、仍て件の如し」藤綱はなほも言葉を續けた。「思ふに、汝等は父に迫つて、汝等の都合のよいやうに譲り狀を書かせたのであらう。だから父は斷り兼ねて、加古飛の飛を非にかへて、汝に譲るやうに見せかけたのだ。さすがに醫師だけあつてその頓才には感心すべきである。どうだそれにちがひなからう。さすれば、財産は加古飛に皆與ふべきである」

かういつて藤綱は鏡岱夫婦を追放の刑に處し、加古飛丸に山道家を相續せしめたのである。純然た



る暗號ではないけれども、遺言状の読み方が主になつて居るだけに頗る興味が深いやうに思はれる。この外、藤綱が六波羅で行つた裁判事件の中に、今一つこれに似たやうな事件があるけれど、あまり長くなるからその紹介を省略する。

以上私は、馬琴の探偵小説材料の取扱ひ方について述べたから、次には、摸稜案にあらはれた犯罪心理、ことに女性の犯罪心理について考へて見たいと思ふのである。

### 『摸稜案』に書かれた女性の犯罪心理

#### 一

摸稜案の中には、三つの中篇小説があつて、そのうちの一つは、前回に紹介した『縣井司三郎』の事件であるが、その他の二つは、いづれも女性の犯罪心理をうかゞふに足る物語であるから、左にその梗概を紹介して、併せて作者馬琴の女性觀に就ても述べて見たいと思ふ。

先づ『牽牛星茂曾七殺害事件』から始める。相模國鎌倉郡池子村に、牽牛星茂曾七といふ農夫があつた。牽牛星といふのは綽名であるが、何故さういふ綽名をつけられたかといふに、家に牡と牝の二正の牛を飼つて居たのと、妻の専女が、年若い美人で機をよく織つたので、里人にねたまれたがため

である。さほど富んでは居ないけれど、少しばかりの田畑があつて、近頃までは弟の曾茂八が同居して居たが、嫂のことで、兄と仲が悪くなり、腰越村の式四郎といふ知己の家に身を寄せることゝなつた。

妻の専女は、やはり近村の生れであつたが、僅かの間に四人ほど亭主を持つて死に別れたので、その村では誰も彼女を貰ふものがなかつたのに、茂曾七は色ごのみの男であつたから、一目見て彼女を戀し、十五六も年下の女を妻として呼び迎へたのである。これを見た弟の曾茂八は、至つて正直な性質であつたから、世間で爪はじきされて居る女を貰ふことに極力反對したのであるが、兄は弟の諫言に耳を傾けずして専女を娶り、結婚後間もなく彼は、妻の讒言によつて、弟の曾茂八を體よく追ひ出したのである。

曾茂八が身を寄せた式四郎は小動といふ一人娘と暮して居たが、老年にもなつたことではあるし、曾茂八が實直に働くのを見て、聳にしたいと思ひ、その旨を曾茂八に告げると、喜んで承諾をしたので、一家はその後圓滿な日送りをする事が出来た。

一方池子村の茂曾七は、前に述べたごとく年來、二正の牛を持つて居て、そのうちの一つは黄牛で牡、今一つは青牛で牝だつたから、黄牛を弟に牽かせ、自分は青牛を牽いて、田を耕やし、時には江の島詣での旅客を乗せて、駄賃を取つて居たが、弟曾茂八が居なくなつたので黄牛を賣るのも惜し



く、村はづれに字平といふ二十八歳の獨身の男があつたのを幸ひに、専女と相談して、雇ひ入れることにしたのである。字平は牛を牽くことが極めて上手で、頗る忠實に働いたので、大に主人夫婦の氣に入つた。

さて、その年も暮れて春も彌生の末となつたある日、茂會七は、青牛を牽いて七里濱に起き、江の島詣での客を乗せようと思つて、朝から晩まで海濱を徘徊したが、生憎その日は一人の客をも乗せ得なかつたので、非常に落膽して歩いて來ると、忽ちうしろから「その牛に乗らう」と呼ぶ者があつた。茂會七が振り向くと、それは若宮巷路の賣卜者「貝の翁」と呼ばれる人で、もとは鶴岡若宮の禰宜をして居たが、年老いたので賣卜を事とし、春になると貝を拾つて來ては、都人の土産に賣り、今日も、貝拾ひに來て、あまりに多く取つたので、牛を雇はうとしたのである。

茂會七は喜んで翁を乗せ、やがて若宮巷路へ來ると、翁は錢を與へて、ふと茂會七の顔を眺め「其許のたすけで、澤山の貝をうちへ持つて來ることが出來たから、その御禮に一寸話して置かう。其許の顔色を見ると、遠からず横死する相がある。だから今のうちにその禍を除かねばならない」と告げた。茂會七は大に驚いて、「その禍を除くにはどうしたら宜しいでせうか」といふと、翁は「外に術はない、たゞ、さめを捨てたらよい」と答へたまゝ、疲勞のためにその場に寢入つてしまつた。茂會七はなほよく事情をきゝたいと思つたが、翁は熟睡したのでそのまゝ、歸路についた。これ迄翁

の言ふことはよく適中するといふ評判なので「さめを捨てよ」といふ言葉をいろ／＼考へた結果、さめとはこの青牛のことであらうと考へ、然し捨てるのも惜しいから、誰かに賣らうと決心して延明寺の辻のところく來ると、思ひがけなくも、久しぶりに、弟の會茂八に出逢つた。

兄弟同志のことゝて、二人はたちまち、親密に話し合つたが、やがて弟は、家の牛が病死したので、今日戸塚の牛市へ出かけたが、思はしいのがなかつたと告げた。これをきいた兄は大に喜んで理由あつてこの青牛を賣りたいからこれを牽いて行かないかといふと、弟も非常に嬉しく思ひ、その價を問ふと、まあいゝから牽いて行き、序の時に錢を届けてくれと言つて、その儘青牛を渡してやつた。茂會七は心にかゝる青牛を弟に渡して、ホツとしながら家に歸り、事の次第を専女と字平につけると、二人は口を揃へてあざ笑ひ、ことに、専女は、弟會茂八に賣つたことを難じて、恐らく、牛の代金は呉れまいから、明日は取りかへしに行つて來なさい、と勧めた。然し茂會七は易者の言が氣になるので、たとひ弟から代金を届けなくても、身の禍さへのがれればそれでよいと言つて肯かず。黄牛一つになつたから、明日から字平には暇を出さうと言ひ出した。これをきいた専女は大に驚いて字平を解雇することに極力反對したが、茂會七は一旦言ひ出したからには後へ引かず二ヶ月分の給金を與へて、たうとう字平をかへしてしまつた。

ところが、専女の豫言が當つたのか、十日あまりを経ても、會茂八の方から何のたよりもなかつた



ので、ある日茂曾七は牛の代金を受取り、かた／＼弟の家をたづねようと思ひ、この旨を妻に話し、酒一瓢と、乾魚一籠とを黄牛の背につけて、午の貝吹く頃、わが家を立ち出でたのである。

恰度その同じ日、貝の翁は、いつものやうに海濱に起きあちらこちらを徘徊して居ると、はるか彼方の浪打ち際に溺死人が浮き沈みして居るので、驚いて駆け寄り、渚に引き揚げて用意の定心丹を口中に塗りつけ、頻りに呼び活したけれども、多量の水を飲んで居るらしいので、何とかして水を吐かせようと思ふと、突然彼方から一疋の主なき牛が来たので、大に歡び「死骸を牛の背中に、うつむきに横はらせたなら、水を吐くだらう」と思ひ、牛を連れて来て死人を抱き上げ、よく見ると、その人もその牛も、先日、自分のところへ来たものたちであつたから、自分の豫言の當つたことを不憚に思ひ、息を吐き返したら手當をしてやらうと覺悟して、再び貝を拾ひにかゝつたが程なく頭を上げて見ると、牛の姿が見えなかつたので、はつと思つて由井が濱の方へたづねに走つたけれども、もはや何處にも見つからず、そのまゝ、若宮巷路の我家に歸つた。

話變つて、腰越村の曾茂八は、兄から譲つて貰つた青牛を牽ひて我家にかへり、養父式四郎と妻小動に事情を話すと、二人とも大に喜び、早速明日にでも牛の代金を持つて行くがよいとすゝめたので、あくる日は朝から土産物などの用意をしたが、式四郎は曆を見て、来る二十八日は丑の日で『よろづよし』とあるから二十八日にせよといつたので、その言葉に従つたが、二十七日の夜に突然式四

郎は卒中で半身不随となり、そのため思はず日數を過してしまつた。

ところが、兄から譲り受けた青牛は、どうかすると繩を脱け出して、東の濱邊へ二三度も行つたがその都度曾茂八は追ひ留めた。牛でさへ、故主の恩を慕つて歸らうとするに、自分が恩義を忘れては相すまぬと、心ははやつても病人を残して出ることならず、又兩三日を送ると、青牛は再び繩を抜け出し、その日に限つて病人の容態がわるかつたので、曾茂八夫婦は少しもそれに氣附かなかつたのである。

夕方になつて、雨が降り出したので小動が牛小屋へ見に行くと、牛の居らぬのに大に驚き、良人に事情を告げた。曾茂八は、直ちに簑笠とつて打かつぎ、濱邊を東に追つて行くと、向ふから主なき牛が一疋こちらへ歩いて来た。さては青牛かと喜んで近よつて見ると、意外にも見覚えのある黄牛で鞍の前輪に、酒と乾魚とを附けて居た。よつて多分兄の茂曾七が後から来るにちがひないと、暫らく待つて居たけれども、その姿が見えぬので、一先づ黄牛を我家に牽いて来てつなぎ、小動に事情を話して、兄の來訪を待つのであつた。

あくる日になつても何の音沙汰もないので、曾茂八は兄の家を訪ねようと思つたが、養父の病が急に重つたので出抜け難く、雇ふべき人足もないので心配のうちに夜になつてしまつた。すると五更のころ、捕手の兵士が五六人、字平を先に立たせて、曾茂八の家に窺ひより、彼の在宅を見つけ、門の



戸を破つて亂れ入り「兄を殺して牛を奪つた曾茂八、索にかゝれ」と呼んで召し捕らうとした。曾茂八は大に驚き、少しも身に覚えのないことだと言ひ譯すると、捕手の兵士はこゝに證人があるといつて字平を指した。

字平は進み出て、曾茂八に向つて言つた。

「貴様は嫂に心をかけ、戀のかなはぬ意趣ばらしに、家の物をさらつて逐電し、式四郎の婿となつても、兄が物を返さず、剩へ、先日延明寺の辻で兄をだまして青牛を奪ひ、兄がそれを取り返すつもりで黄牛に酒肴を負はせて、この家へ来ると、一層の悪念を起して兄を殺し、死骸を青牛に負はして、海底に沈めるつもりだつたらうが、天網はのがれ難く、青牛は主の屍を負つて池子村へ歸つて來たのだ。そこで俺は、貴様の所爲だらうと思つて、昨夜ひそかに、こゝへ來て牛小屋の中をうかゞふと果して黄牛が居るではないか。だから俺は、汝の所爲だと思ひ、雇はれた恩義に報いるために、専女後家を助けて事の趣をおかみに訴へたのだ」

曾茂八は兄の横死をきいて胸が塞がり、その上冤罪に陥られたので、あまりのことに黙つて居ると、兵士どもは程なく彼と黄牛とを引き立て、文注所へ連れて來た。

時に建治元年四月九日、青砥藤綱は曾茂八を獄舎から引出させ、訴人の専女字平等を呼寄せて吟味を始めた。先づ曾茂八を近く召し寄せてたづねると、彼は、池子村を立ち去つた理由から、黄牛を我

が家へ連れて來た顛末まで残らず物語つた。藤綱はしづかにそれをきいて居たが、やがて曾茂八に向ひ、青牛を兄から買つたとき何故貝の翁に吉凶を問はなかつたか、又十日あまりも何故兄のところへ音づれをしなかつたか。汝の言ふ所には證據が更にないではないかといひ懲し、次に専女と字平等を近くに召し寄せ、専女に向つて、青牛が良人の死骸を乗せて歸つたときの爲體と青牛を賣つた次第とをたづね、曾茂八の死骸の着て居た衣服をとりよせて検査し、次に字平に向つて、汝は右の食指を布の片で包んで居るがそれはどうしたのかとたづねた。すると字平は、先日鯉を切るとて刃を走らし、傷をしただので御座いますと答へた。

そこで藤綱は二人に向ひ、汝等の言ふ所も頗る胡亂である。曾茂八が貝の翁に諭されて青牛を賣らうと思つたのならば、曾茂八がかたり取つたのではないぢやないか。又、昨日、汝等が訴へたとき、曾茂八はもはや療治が届かなかつたかとなつたかとなつたなら、死んで時がたつて居たので薬はのませなかつたと言つたが、今この衣服を見ると薬の匂がするのは、どういふ譯か、なほ又、この衣服は雨に濡れただけならば一晩竿にかけて置けば半ばは乾くのに、今なほ大へん濡れて居るのは潮水につかつた證據である。して見ると、字平の推量とはちがひ、曾茂八は海へ沈めたものを再び引揚げて牛に負せたこととなるが、それはどう説明したらよいかと詰問すると専女はもとより、字平も適當な説明を與へることが出来なかつた。



そこで藤綱は、人を若宮巷路へ走らせて、貝の翁を呼ばしめようとする、丁度その時貝の翁自身が出頭したので、藤綱が喜んで來意をたづねると、今日文注所で、しかじかの罪人の審問があるとき、その冤罪を救ふために來ましたと答へた。

「先日、あの牛飼の人相を観ましたところ、女難の相があつたので、女房を捨てたらよいと思ひましたが、あからさまには言ひ難いので、さめを捨てよと申しました、さめの字は添言葉でたゞ、め即ち妻を捨てよといふ意味で御座いました。ところが、その後、海濱で貝を拾つて居ますと溺死體が打ち寄せられましたので、助かるものなら助けようと藥を口の中に塗りますと、舌の上に妙な物がありまして、殺されたのであらうと思ひ、後の證據に取り出して、懐へをさめると、主なき青牛が來たので、始めて先日の牛飼であると思ひ、水を吐かせるつもりで牛に負はせましたが、そのうちに牛の行方がわからなくなりました。ところが今日、腰越村の曾茂八といふものが兄を殺して死骸を牛へ乗せ海に沈ませようとしたことが發覺して吟味されるとき、ましたので、冤罪にちがひありませんから、曾茂八を救はうと思つて參りました。これが、死骸の口中にあつた物で御座います。」

かう言つて貝の翁は、蛤貝の中へ入れたものを差出したので、藤綱が開いて見ると、人の指がはひつて居た。

藤綱は直ちに左右のものを顧みて、字平と専女とを捕縛せしめると、字平は大に抗辯したが、食指

の繃帯を解かしめめたところ、果して噛み切られて居たので、翁の持つて來た指が動かぬ證據となつた。然し中々實を吐かぬので、先づ専女に鞭一百を加へると苦痛に堪へず自白した。それによると彼女は去年から字平と密通して居たが、良人曾茂七を殺したことは字平一人の所爲で、私は知りませんと言つた。それから字平を鞭つて二百に及ぶと、彼もたうとう白狀した。その日は由井濱に待伏して、後から曾茂七の咽喉を絞めにかゝると、誤つて右の食指を彼が口中に突入れ、その際噛み切られたが、遂に縊め殺して海に投げ入れ、曾茂七の家に行つて専女と樂みを取つて居ると、青牛が死骸をのせて歸つて來たので、一旦は驚いたけれども、曾茂八に罪をきせるには好都合であると思ひ、曾茂八のところへ來て見ると、黄牛が居たので、専女をすゝめて訴へさせたといふのである。で、藤綱は次の宣告を與へた。

「……字平はもとより、雇夫にて、主従の義なしと雖も、犯す所の罪、もつとも輕からず、又専女は字平とともに曾茂七を殺さずといふとも、既に字平と密通して、不義の情欲より事起りて、曾茂七を殺すに至る、その罪は字平と又何ぞ異ならん、これ亦決して赦し難し、彼彼もろ共に、近日、由井濱に引出して、誅戮すべきものなり……」

かくて、曾茂八の放免されたことはいふ迄もなく、養父の病さへ五六日が程に本復した。以上の筋書を讀まれた諸君は、最後に至り曾茂七殺しに専女が關係して居ないことを知つて、頗る



意外に思はれたであらうと思ふ。始めに、専女の淫奔な性質を述べて、犯罪性に富んで居ることを暗示して置き乍ら、終りに至つて情夫のみの犯罪としたことは、頗る物足らぬ感がある。而も、字平については、實直に働いて主人夫婦の信用を博したと書かれてあるから、愈よ以て奇怪な感じを抱かせられるのである。作者馬琴は「青砥藤綱摸稜案」に於ても、彼のもちまへなる勸善懲惡主義を鼓吹しようとして居るらしいから、犯罪者の性格などには重きを置かず、只管事件の推移に心を懸けたのであらうが、若し、正直な字平が専女のために、だん／＼深みへ引き入れられ、遂に専女にそのかされて、茂會七を殺すといふ風に書かれてあつたならば、その方が遙かに自然であるやうに思はれる。尤も馬琴の書いたやうな事實が世の中に決して無いといふことは斷言出来ないが、それならば、そのやうに、物語の始めに暗示を與へて置くべきである。例へば字平が専女との不義の現場を茂會七に見つけられたならば殺害の動機は成立する。又字平が茂會七の少しばかりの財産に目をかけ、それを専女もろ共我がものにしよとするのでも殺害の理由にはなり得るのである。利慾を離れた純然たる性的犯罪ならば、女に教唆されて大罪を犯すといふ風に書いた方が、どう考へて見てもいゝやうである。ことに、茂會七の弟のところへ出立することを知つて居るのは専女ばかりであるから、専女がそれを字平に知らせて、良人を殺させるやうにしたならば筋の通りも遙かに良い。

一般に馬琴の作物の中にあられる人物の性格は、あまりはつきりして居ない恨みがあつて、女性

犯罪者のうちでも、八犬傳の船蟲などは比較的よく書かれては居るが、この物語の専女などは随分ぼんやりした描き方だと思ふ。犯罪者にも善心があるといふことはこれ迄よく紹介されて居る所であるが、それは多くは男性犯罪者に通用することで、女性犯罪者ことに所謂毒婦と稱せられる女子には、善心は殆んど認められないといつてよいからである。だから毒婦を描く場合には徹底した悪性を帯びしむるのが適當であらうと思ふ。この一つの物語から馬琴の女性觀を判斷するのはもとより亂暴ではあるが、ことによると、馬琴は女性犯罪者には男性犯罪者と同じ程度の善心は必ず存在するものと考へて居たのかもしれない。

## 二

「茂會七殺害事件」とちがつて、これから述べようとする「鐘馗申介の事件」には、女性の犯罪性が可なり正しく描かれてゐると思ふ。

肥後の菊池家の浪人に庶木申介といふものがあつた。文武の道に通達して居たが、若い時から畫を好み、唐宋諸名家の筆意を寫して、自然にその妙要を會得し、中にも黄筌の鐘馗の圖を珍重して、來來模寫すること數千幅に及び、遂にその皮骨を得たので、人々は彼を鐘馗申介と呼ぶに至つた。ところが、當代の菊池武房は武道一ぺんの人で繪畫の賞翫などをしなかつた。申介は華洛に赴いて繪を以て一家をなさうと、主君に暇を乞つて、女房の年青、娘の小匙を連れて上洛したが、



申介の畫のかきざまが、あまりに風韻が高いため、却つて賞翫されず、たうとう仕方なしに心あつたりの人をたづねて平城へ來たが、生憎その人も死んで居ないので、根深由八といふ客店の二階をかりて親子三人が一時落つくことになつたのである。

ところが、悪い事は續くもので、七歳になる娘の小匙は突然、妙な熱病に罹つた。この子は五六歳の頃から、教へぬのに畫をかくほどの伶俐な性質なので、申介夫婦は一生懸命に看護し、少しばかりの所持金も大かたつかひ果して藥を飲ませたが、少しも治らなかつたので、申介は、かねて、鐘馗の繪が鬼邪を治すといふことをきいて居たので、精進齋して小匙の衣服の裏に、朱を以て鐘馗を畫き、それを着せると、不思議にも奇病は日ならずなほつてしまつた。

娘の病氣は治つても、生活の方法は一かう見つからず、宿錢を拂ふことさへ困難になつて來たので、ある日、夫婦は宿の女房機白を招いて、何かよい方法はあるまいかと相談した。すると女房は、年青の容色が美はしいから、いつそ給事でもなさつてはどうだと勧めたが年青はどうしても氣がすすまなかつたので、それではといつて、新羅琴を知つて居るのを幸に、琴の師匠を始めることにさせた。で、翌日から、彼女は二階の一室で、宿の女房の借りて來てくれた琴を弾じ、先づ娘小匙に組歌を誨へたが、顔が美しい上に聲も美しいので、聞く人が耳を敬てた。

ある日宿の主人由八は外からにつこりして歸つて來た。そして女房に言ふには、むかひの客店に

逗留して居る、攝津國天王寺の富豪紫米鬼九郎といふ人が、今日自分を招いて言ふには、お前の家で琴を弾いて居る女は一目見ても忘れられず、何とかして手に入れたらと思ふが盡力をしてくれないか、成功の曉は金を山に積んで御禮をするといつて、袖一疋と碎銀一掬を呉れたから、自分は、あの女は人の妻だけれども日數さへ相當に待つて、くれ、ば、計策がないではありませんと答へて來たと告げると、機白は大に喜んで良人に賛成し、それから二人は、その計畫について色々談合するのであつた。

それから幾日かを経て、由八は申介に向つて、近ごろ興福寺の客殿が修覆されたが、襖や天井に繪をかく適當な人がないから困つて居られる様子だ、あの寺には私の知つた人がないから手引きも出來ぬが、いつそ直接先方へ當つて見られたらどうでせうと告げた。申介は大に喜んで翌日寺へ行つたが、いひよる術がなかつたので、その次の日は辨當持ちで出かけ、食堂へ行つて湯飲所をのぞくと、無地の屏風が一雙あつたので、法師等のとめるをもきかず、懷から筆を出し、傍の硯の墨をつけて畫うとすると、皆々よつてたかつて引き放したので、證方なく、左の袖をのばして筆の墨を拭つて懷へ收めた。これを見た殿司の老僧は申介を常人ではないと認め、皆々に話して兎に角屏風にかゝせて見ると、果してみごとな春日野の鹿を畫いた。殿司は愈よ感心して申介の身の上をきき、それでは明日までに相談して、天井、襖の繪一切を畫いてもらふやうに取計らはうと言つた。



申介が宿に歸つてこの幸運を物語ると年青は更なり由八夫婦も別の意味で喜んだ。翌日になつて申介が寺へ出かけようとする、娘の小匙がついて行き度いと言ひ出したので、まだ平城の名所も見せてないから、序に見せてやらうと思つて興福寺へ行くと、殿司は快く迎へて、相談の結果貴殿に書いてもらふことになつたから、これからすぐ取りかゝつてくれと言つた。申介は驚いて、まさか今日からは思はなかつたので、娘を連れて來ましたといふと、殿司は十歳未満の女ならば寺に止宿しても差支ない。ことに繪心があるならば、繪具を措らせなどしてはどうだとの事に二人はそのまゝ寺で厄介になることにした。

申介の妻年青は、その日から良人の歸らぬのを心もとなく思ひ、由八にそのことを話すと、由八はいまに澤山の御金を持つて歸つて來られるから待つて居なさいと慰めたが二三日の後、年青に向つて言ふには、今日、興福寺へ立寄りましたら、御二人とも恙なく晝くべきものが澤山あるから、この月中は歸れないとのことでしたと告げた。

それから二十日ばかり過ぎて、良人は歸つて來なかつたので年青は由八に向つて、見て來よがしに謎をかけたが、由八はたゞ冷笑するだけで取り合はぬので、これには何か理由があるかも知れぬと、女房の機白にたづねると、機白は嘆息して、

「いふまいと思ひましたけれど、あまりに御氣の毒ですから御話し致しませう。御主人は寺で晝料

を澤山御貰ひになつたため、悪友に誘はれて、きつぢの廓へ足をふみ入れ、何とかといふ遊女と深い仲になられたさうです。そのため寺から貰つた金もすつかりつかひ果し、娘さんまで人買ひの手に渡されたといふ噂さへ立ちました。私たちも宿錢の貸がある、内々心配して居たところですよ」

と、まことしやかに告げるのであつた。これをきいた年青は、良人に限つて、そんなことをする人ではあるまいと思つても、何となく嫉妬の心も起り、娘の身の上も心配になるので、由八と相談して、あくる日機白と共に興福寺をたづねることにした。

案内役の機白はもとより興福寺へ行かず、年青の知らぬを幸に元興寺へ行つて、鐘道申介といふ晝師は見えぬかとときと誰も知らぬと答へたので、機白は、それでは大方、きつぢの廓へ行つて居られるにちがひないといつても更に二人で廓の方へさがしに行くのであつた。

話變つて申介は、好きな仕事に心を奪はれ思はずも二十日ばかりを過し、もやは大方晝き果てたので、もう一二日過ぎたら久し振りに宿に歸らうと楽しんで居ると、由八の許から使が來て、急用があるから歸つてくれとの事に、小匙を残して宿へ來ると、由八は右の腕を布で包んで柱にもたれて居たが、年青も機白も出て來ないのに不審をいだきながら、事の次第をたづねると、由八は仔細があつて妻機白を離別した旨を告げ、それもあなたの奥さんから起つたことだと言つた。……實は



奥さんがゆうべ宿を出られたまゝ、御歸りになりませんので、興福寺へ御行きになつたかと思つたら、さうでもないで、私の女房が密夫の媒約をしたにちがひないと思つて、奴めを鞭ちましたが、その際右の腕をくぢいて、このとほりの始末です所詮奥さんの行方がわからぬので、女房を追ひ出して、私の潔白を立てることにして、機白を去りましたが、腕をくぢいたので離縁状が書けません。すから、私に代つて書いて下さいませんか」と、言ひも終らず硯箱を引き寄せて頼んでのだ、申介も、妻はそんな人間でないと思ひ乍ら、由八の言葉をいなみ兼ね、離縁状を書いて渡し、一先づ、興福寺へ引き返した。

由八は申介が歸るのを見送り乍ら舌を出し、離縁状を開いて由八の由の字を申に、八の字を介になほし、宛名を切り取つて、年青殿と書き、女房たちの歸るのを待つて居ると、二人は廓でも申介を見つけることが出来ず大に落膽して歸つて来た。由八は即ちかの離縁状を出して年青に渡すと、年青は良人の筆蹟を見て、大にうらみ、その場に泣き伏した。

由八夫婦は傍から年青をいたはると同時に男心の變り易いことを罵り、なほ由八は申介の言ひ置いて行つたことだと言つて、金のなくなつた苦しきまぎれに娘を賣つたが、なほそれでも金が出来ぬので、年青をある人の側室に賣つたから、竹輿が来たら渡してやつてくれとの事であると告げた。年青はこれを聞いて、愈よあきれ歎き悲しみ、いつそ殺してくれと泣きわめいたので、由八夫婦

が色々なだめすかして居ると、折しも其處へ紫米鬼九郎が一挺の竹輿をつらねて迎ひに來た。年青が見ると、年の頃四十あまりで色が黒く丈の低い賤しげな男であつたから、まるで鬼にでもとられるやうな心地がしたが、なまじ反抗しては恥の上塗になるから、暫らく心を許させて、又なすべきこともあらうと覺悟を定め、たうとうその竹輿に打乗つたのである。この鬼九郎といふ男は津國荒墓のほとりに住む悪漢で勾引しや人買を業として居たが、ふと年青の容色を見て、由八を慾で誘ひ、計策を行はせてまんまと手に入れたのである。然し、天は悪漢に與せず、平城を出て明暗巖にさしかゝると、暗の中から狼が二疋飛び出して、駕籠昇にかみつき次で他の一疋が鬼九郎をも殺し、年青だけが、竹輿の中に残されて生命拾ひすることが出来た。

一方、申介は年青が密夫と駈落したとばかり思ひ込み、大に悲しんで興福寺へ歸り、母を慕ふ小匙をなだめ、その夜殿司に向つて暇を告げると、殿司は、四天王寺の僧もあなたの畫を見て書いて貰ひたいと言つたら、近いうちにたづねておいでなさいと、紹介状をくれた翌日、申介は小匙をつれて寺を辭し、一旦由八の許に身を寄せ、次の日四天王寺をたづねることにした。

由八はその夜、妻に向つて、若し申介が四天王寺へ行つたなら、そのそばの荒墓山に居る年青に逢ふかもしれない。さうすればこちらの罪がばれるが、どうしたらよからうと相談した。すると女房は、明朝薄ぐらるうちに立立させて、途で殺してしまひなさいと告げた。



かくて由八は申介父娘を暗いうちに出立させ、自分は先廻りをして般若坂に待ち受け、首尾よく申介をだまし打にしたが、小匙を殺さうと思ふと、忽ち小匙の背から、一道の赤氣がたちのほり、身長一丈餘の鍾馗の像が俄然としてあらはれ、小匙をかへて逃ける由八を引つかんで大地へさどりと投げつけた。

時に建治元年秋八月二十六日、青砥藤綱は、大和へ巡歴せんために、きのふ六波羅を發足し棹山に一泊して、朝早く般若坂にさしかゝると、小匙が父の屍に取りついて歎き、傍に由八が氣絶して居たので、従者たちに言ひつけて息を吹きかへさせると、由八は逃げようとしたので引き捕へきびしく問ひつめると、遂に今迄の悪事を残らず白状した。よつて、藤綱は人を走らせて機白を逮捕させ、更に紫米鬼九郎を召捕らせにやると、程なく鬼九郎の死骸と年青を伴つて歸つて來たので、別に面倒な詮議もいらず、由八と機白を般若坂で死刑に處し、鬼九郎の首と共に斬臍けさせ、年青と小匙は首尾よく對面して、この一件はつひに落着いたのである。

さてこの事件に於て、中心となつて居る犯罪は、年青を鬼九郎に取り持つことである。そしてこの「取り持ち」は性的ではなくて、利慾的である。性的の「取り持ち」はドイツ語で Kuppelrei と呼ばれ、中年の女性ことに身體の不具な女性によつて屢ば試みられる所である。本篇に於て、由八の妻機白は、別に醜婦とも不具者とも書かれてはないが、はじめに年青の美貌を見て、給事を勧めたとこ

ろなどを見ると、この「取り持ち」には多少性的色彩を認めてもよいであらう。

女子と男子が共謀して犯罪を行ふとき、男子が發起人であり、女子がその計畫者であることは、實世界に於ても多數の例證があるが、文學にあらはれた最も著しい例はシェークスピアの「マクベス」である。發起人たる男子は計畫を遂行する途中に於て、屢ばその決心がにぶり、動もすれば、中止しようとするものであるが、かやうな時、女子は、あく迄男の心を鼓舞して、男子を深みへ引きずり込み、計畫を遂げさせるのである。マクベスが國王殺しを幾度か躊躇すると、その都度マクベス夫人は或は罵り或はすかして、遂に非望を果させたが、本事件に於ても、機白が計畫者であつて、遂に由八にすゝめて申介を殺させるに至つた。

女子が犯罪を計畫する場合、その方法は常に小説的であつて、時には奇を極めることがあり、且つ頗る複雑である。本篇に於ても、讀者は、由八夫婦の計畫、否、主として機白によつて企てられた犯罪の一幕の階段が甚だ巧妙で全體として極めて複雑して居ることを知られたであらう。この點に於て馬琴は、前の物語よりも、女性犯罪の描寫に成功したといふことが出来るが、機白や由八の性格がはつきり出て居ないことは前の物語と同様である。

鬼九郎が狼に噛み殺されたり、小匙の背より鍾馗があらはれたりするのは、多少不自然な構想といへばいひ得られるけれど、例の勸善懲惡主義から見れば、讀む人をして痛快がらしめるに十分であ



る。この物語の終りに、作者馬琴は次のやうに書いて居る。

「立同陳人批して道らく、人おのく嗜欲あり、しかしてその嗜欲同じからず、もしその嗜むこと酷しければ、必ず敗れを取るに至る、庶木申介が如き、絶て悪なし、その嗜む所、中庸ならず、祿を辭し漂泊し、身を殺してはじめて休む、況て由八鬼九郎等がごとき、利を嗜みて人を虐げ、遂にその身を戮せらる。善悪邪正その差あり、輪廻應報一定ならず、しかれども嗜欲の蔽、おのく亦脱れがたし、且申介が畫に妙ある。鍾馗を圖して子を救へど、わが身を救ふことかなはず、譬ば人一藝ある。妻子を養ふに足るといへども、智を肥すに足らざるが如し、彼由八等は虚耗の鬼歟、人をたふしておのが家を倒す、庶木は終南憤死の人歟、生涯志を得ずして、名を後に聞ゆ、これを慎めよこれを慎みて、只ねがはくは道により、徳により、さて藝に遊ばん」

馬琴の物語を作る態度はこの中に十分あらはされて居ると思ふ。「只ねがはくは道により、徳によりさて藝に遊ん」といふ言葉は申介を批評したものであるが、一方から言へば、馬琴の藝術観と見られぬでもなく、従つて馬琴は、犯罪を描くに當つても、犯人の罰せられるところに重きを置いたのであるから、馬琴の作物を犯罪學的に論ずるのは或は當を得て居ないかもしれない。とはいへ、馬琴が、可なりに深く人性を研究して居た人であることは、この『摸稜案』を通じてもたしかにうかゞふことが出来る。

### 犯罪文學と怪異小説

所謂探偵小説と稱せらるゝ文學の中で「怪異」を取り扱つたものが「謎の解決」を取扱つたものと並んで、數多くあるのは、更めて言ふ迄もないことである。謎の解決を取扱つたものは主として人の好奇心を満足せしめ、怪異を取り扱つたものは主として人の恐怖心を満足せしむるために愛好せられるのであつた。恐怖心を満足せしむるといふ言葉は少しく安當でないかも知れぬが、人が平靜なる生活を営みつゝあるときには、恐怖によつて非常なる愉快を覺えるものであるから、強ち意味が通じないでもなからうと思ふ。恐怖を感じて満足する性質は、原始時代から人間にこびりついて離れないものであつて、例へば嬰兒に向つて、突然「バァー」と叫んで之をどすと、嬰兒は身體を揺ぶり乍ら嬉しがる。而もこの性質はどんなに世の中が進んでも、人間の存する間は決して消えるものではないらしく、従つて怪異小説はその起原が古いと同様に、將來益々流行するものと見なして差支ないであらう。

怪異小説のうち最も重要を部分を占めて居るものは幽霊小説である。強ち怪異小説に限らず一般文學にも幽霊の出て來るものは甚だ多い。中にもシェークスピア、ヂッケンスの作物にあらはれる幽霊



は世界的に有名である。而してこの幽霊には、特定の人にのみ見える幽霊と、誰にでも見える幽霊との二種類があつて、例へば沙翁の『ハムレット』の中に出るのは、幾人かの眼に觸れるけれども『マクベス』の中に出るのは、マクベス一人にしか見えないのである。前者は即ち客觀的に存在する幽霊であつて、後者は即ち主觀的に存在する幽霊であるが、むかしの文學には、多くの場合、客觀的に存在する幽霊が取扱はれ、主觀的な幽霊を取扱ふ場合にも、作者はやはり幽霊なるものが獨立に存するものと信じて居たらしい。

ところが主觀的に存在する幽霊と客觀的に存在する幽霊とは、心理學的には大きな差異がある、即ち、主觀的の方は幻覺又は錯覺によつて説明することを得る、けれども客觀的の方は、心靈科學ならば、いざ知らず、心理學的には頗る説明の困難なるものである。即ち前者は理知に背かないけれども、後者は理知を超越して居る。理知を超越して居るからといつて、強ちその存在を否定することは出来ず、又文學の内容たり得ないといふ譯はないけれども、理知に背かぬ幽霊であるならば、その點だけでも、それを取扱つた文學に餘計の藝術的價値があるやうに思はれる。

錯覺又は幻覺による幽霊は、通常良心の苛責、思念の迷執の際に見られるものであつて、人を殺した者が、殺された者の亡霊を見て、それに悩まされる例は、文學の上でも、實際の上でも、夥だしい數である。従つて、かやうな幽霊を取扱つた文學は犯罪文學として論ずる價値がある。で、私はこ

れから、日本の過去の怪異小説のうち、犯罪と關係あるものについて紹介しようと思ふのである。

### 江戸時代怪異小説

怪異を取り扱つた日本文學として、古くは今昔物語、宇治拾遺などを擧げることが出来るが、怪異小説の最も流行したのは江戸時代である。曩に私は、櫻陰、鎌倉、藤陰の三比事を紹介したとき、これ等の犯罪文學は、支那の棠陰比事が日本に輸入され、棠陰比事物語として翻譯されて大に世に行はれて後、それにならつて作られたことを述べたが、江戸時代の怪異小説も、支那の『剪燈新話』が天文の頃に我國に渡來し、淺井了意によつて翻譯され『御伽婢子』の中に取り入れて出版され、大に世に歓迎されたのが、その流行の魁となつて居る。御伽婢子の出版された寛文六年は棠陰比事物語よりも僅かに十五年の後であつて、この點に於て怪異小説は三比事と甚だ縁が深いといつてよい。

さて御伽婢子が出てから、怪異を取り扱つた物語は、棠陰比事物語が出てから三比事が出たこととはではなく、實に雨後の筍といつてよい程澤山あらはれたのである。實に天和以後享和に至るまで約百二十年の間に約四十種の怪異小説があらはれて居る。今そのうち數種の名稱をあけるならば、浴下寓居の新御伽婢子(天和二年)井原西鶴の諸國咄(貞享二年)山岡元隣の古今物語評判(貞享三年)



淺井了意（御伽婢子の作者）の狗張子（元祿四年）林文會堂の玉簪木（元祿九年）青木鷺水の御伽百物語（寶永三年）北條團水（晝夜用心記の著者）の一夜船（正徳二年）近路行者の古今奇談英草紙（寛延二年）烏有庵の當世百物語（寶曆元年）上田秋成の雨月物語（安永五年）速水春曉齋の怪談藻鹽草（享和元年）などであつて、御伽婢子の流れを汲むものと百物語の流れを汲むものとの二大系統にわかつことが出来る。このうち最も人口に膾炙して居るものは、御伽婢子と、英草紙と雨月物語の三つであつて、就中、英草紙と雨月物語とは江戸讀本の父として激賞する人さへある。

御伽婢子は剪燈新話全部二十篇の文章中から、十八篇を抜いて、地名人名悉く日本式に改め、わが國風に向くやうに翻案され少しも譯文らしい臭味がない。それは恰も、明治時代に黒岩涙香が西洋の探偵小説をその獨特の明文によつて翻案したのに比すべきであつて、淺井了意と黒岩涙香とは、日本の探偵小説界に同じ位置を占めて居るといつても差支ないのである。御伽婢子は、前記の十八篇の外になほ四十九篇の物語が收められて、全部で十三卷となつて居り、雨月物語なども、二三題材をここに仰いで居る。序ながら、剪燈新話の部分的な紹介翻案は御伽婢子以前に奇異雜誌集のあることを申添へて置く。

いづれにしても御伽婢子は江戸時代怪異小説の源泉であつて、その他の小説に收められた物語の題材はこれに似たりよつたりのものである。而してこれ等の怪異小説の描くところの内容は、どれも皆

奇怪な、不可思議な幽幻境の中に、空靈を活躍せしめ、或は因果應報の理を説き、或は訓誡の意を寓せしめし居るから、見やうによつては一種の宗教小説であり又教訓小説であつて、前に紹介した三比事、兩用心記がやはり一種の教訓小説であると同じやうに、現今私たちの求める探偵小説とは多少その趣を異にして居るのである。然し怪異小説は裁判小説詐欺小説とちがつて、人の恐怖心を刺戟することが主眼となつて居るのであるから、その點に於いて、現今の所謂探偵小説的色彩がより濃厚であるといふことが出来る。

然し乍ら、これ等の怪異小説は、幽霊や化物を取り扱ふについても、殆んど皆客觀的實在を是認して、主觀的の怪異を描いたのは、曉天の星の如く寥々たるものである。従つて客觀的の化物を家常茶飯事と心得て居るやうに思はせ、文學として甚だ價値の少ない、比較的劣劣な藝術たらしめて居るのである。時として凄味たつぷりな叙述に身の毛をよだたしめても、やがて、却つて滑稽な感を抱かしめ、折角の凄味を打ち壊してしまふ場合が少くない。この點に於て比較的多くの効果を收めて居るのは、古今奇談英草紙と雨月物語であつて、ことに雨月物語のうちには、エドガア・アラン・ポオの作品を思ひ起させるものがある。

これから私はこれ等の怪異小説から、主觀的怪異を取り扱つた物語、ことに、犯罪と關係ある物語を選んで、その内容を記述し、特に、英草紙と雨月物語とに就ては比較的委しい紹介を試みたいと



思ふのである。

### 主観的怪異を取扱つた物語

順序としては當然、淺井了意の御伽婢子を紹介すべきであるが、江戸時代の怪異小説の先祖とその大成者たる上田秋成を對照せしめて述べた方が面白いと思ふから、後に兩月物語を紹介するときにしよに述べ、こゝでは先づ、櫻陰比事の作者たる西鶴の諸國咄から二三の物語を選んで見ようと思ふ。諸國咄は一名大下馬とも呼び、怪異小説と稱することの出来ぬ物語も澤山はひつて居る。又、怪異を取扱つたものでも龔に櫻陰比事を紹介したときに述べたやうな、西鶴一流の冷やかな筆づかひがしてあるので、怪異小説の要素たる凄味があまり出て居ないのである。例へば「鯉のちらし紋」と題する一篇を見ても、よくその全般を知ることが出来る。

「川魚は淀を名物といへども、河國ノ國の内助が淵の雜魚まですぐれて見えける。この池昔より今に水のかはく事なし。此堤に一つ家をつくりて内助といふ獵師、妻子も持たす只ひとり世を暮しける。つねづね取溜めし鯉の中に、女魚なれども凛々しく、慥に目見ざるしあつて、そればかりを賣殘して置くに、いつのまかは鱗に一つ巴出來で、名をとるると呼べは、人の如くに聞きわけて、自然となつ

き後には水を離れて一夜も家のうちに寝させ、後にはめしをも食ひ習ひ、また手池に放ち置く。はや年月を重ね、十八年になれば、尾頭かけて十四五なる娘のせい程になりぬ。或時、内助にあはせの事ありて、同じ里より年がまへなる女房を持ちしに、内助は獵船に出しに、その夜の留守にうるはしき女の、水色の著物に立浪のつきしを上に掛け、裏の口よりかみ込み、我は内助殿とは久々の馴染にして、かく腹には子もある中なるに、またぞろや此方を迎へたまふこの恨やむ事なし、いそいで親里へ歸へりたまへ、さもなくば三日のうちに大浪をうたせ、此家をそのまゝ池に沈めんと申し捨て、行方しれず。妻は内助を待ちかね、恐しきはじめを語れば、さら／＼身に覺えない事なり、大かた其方も合點して見よこの淺ましき内助に、さやうの美人靡き申すべきや、もし在郷まはりの紅や針賣のかには思ひ當る事もあり、それも當座々々に濟まなければ別の事なし、何かまほろしに見えつらんと又夕暮より舟さして出るに俄にさゝ浪立つてすさまじく、浮藻の中より大鯉舟に飛び乗り、口より子の形なる物を吐き出し失せける。やう／＼に通け歸りて、生簀を見るに彼の鯉はなし、惣じて生類を深く手馴れる事なかれと、その里人の語りぬ」

すなはち、一種の教訓小説であつて、凄味などは眼中に置かれて居ないかの觀がある。なほ又、この外に、怪異を取扱つた物語でも理實味が頗る多い。「傘の御宣託」では、慶安二年の春、紀州掛作の觀音の貸傘を、藤代の里人が借りて和歌吹上にかゝると、玉津島の方から、神風がどつと吹いて來て



それがためその傘が吹きとばされ、肥後國の奥山、穴里といふ所へ落ちた話が書かれてある。さて穴里の人々は、傘を見たことがないので、何だらうかと色々評議をするとその中に小賢しい男があつて、この竹の数は四十本、紙も常のとはちがつて居るから、名に聞いた日の神内宮の御神體だらうといつたので、皆々大に怖れ鹽水を打つて、荒策の上に据ゑ奉り、宮を作つて御まつり申上げた。するとこの傘に性根が入つたと見え、五月雨の頃になつて社壇が頻りに鳴り出したので、御託宣をきいて見ると近頃里人は寵の前を汚なくして油蟲をわかしたからいけない。早く一疋も居ないやうにせよなほ、里の美しい娘を一人神宮に奉仕させよ、さもなければ七日が中に車軸を流して人種のなくなる迄降り殺すぞとの事に、人々は怖氣をふるつて、娘どもを集めて相談すると、誰一人進んで出るものがなかつた。するとその里に一人の美しい後家があつたが、これをきいて、神様の事だから、私が若い娘の身代りになると申出で、宮所に夜もすがら待つて居たところが、一向神様の御情けがなかつたので、件の後家は大に腹を立て、御殿の中へ驅け入つて、彼の傘を握り上げ、「この身體たふし奴が！」と叫んで、引き破つて捨てた。

この短かい物語にも西鶴の人生觀が浮み出て居るやうに思はれる。ちやうど『好色五人女』の三の巻で、おさんと茂右衛門の駈落ちを叙し、「やうく日數ふりて丹後路に入つて、切戸の文殊堂に通夜してまどろみしに、夜半とおもふ時、あらたに靈夢あり、汝等世になきいたづらして、何國までか其難

をのがれ難し、されどもかへらぬ昔なり、向御浮世の姿をやめて、惜しきと思ふ黒髪を切り、出家となり、二人別々に住みて悪心去つて菩提の道に入らば、人も命を助くべし、とありがたき夢心に、するく何にならうともかまはしやるなこちや是がすきにて身に替へての脇心、文殊さまは衆道ばかり御合點、女道は曾てしろしめさるまじと言ふかと思へばいやな夢覺めて、橋立の松の風ふけば塵の世ぢや物となほなほやむ事のなかりし」と同じ筆法である。夢の中で文殊さまにまで盾つかせて居るなどは、随分徹底して居ると思ふ。

いや、思はずも話が横道にそれたが、西鶴の怪異を取り扱ふ態度は、怪異を種に人生を擲擲して居ると認めても差支ないであらう。従つて、怪異小説の本來の目的からは少々遠かつて居ると言つてもいい。これに反して御伽婢子の流れを汲んだ『玉箒木』の如きは、少くともその體裁に於て、怪異小説の目的になつて居る。即ち、その文章の一例をあけるならば、『果心幻術』と稱する物語に、『居士（果心居士）つと座をたち出で、廣縁を歩み前裁の方へ行くとぞ見えし、俄かに月暗く雨そほふりて風さらに蕭々たり。蓬窓の裡にして瀟湘に漂ひ、荻花の下に潯陽に彷徨ふらんも、かくやと思ふばかりなり、物悲しくあぢきなき事云ふばかりなし。さしも強力武勇の彈正も、氣弱く心細うして堪へ難く、如何にしてかくはなりぬらんと、遙かに外を見やりたれば廣縁に佇む人あり、雪透き誰やらんと見出しぬれば、細く瘦せたる女の髪長くゆり下げたるが、よろくと歩み寄り、彈正に向ひ



坐しけり、何人ぞと問へば女太息つき苦しけなる聲して、今夜はいと寂しくおはすらん。御前に人さへなくてといふを聞けば疑ふべくもあらぬ、五年以前病死して飽かぬ別れを悲しみぬる妻女なりけり。彈正餘りに凄まじく堪へ難きに、果心居士いづくにあるぞや。もはや止めよやめよと呼はるに、件の女忽ち居士が聲となり、これに待ると云ふのを見れば居士なりけり。もとより雨もふらず月は晴れ渡りて曇らざりけり』

とあつて、きびくした漢文口調をまじへ、凄味もかなりに出て居ると思ふ。この玉簪木の中には史實を取り入れた物語が甚だ多く、このことは後に説く英草紙にも影響して居るやうである。題材は多く支那小説から取つたものらしく、離魂、幻術、狐妖、因果の理など、別に目新しいものはないが、中に現實味の豊かなものが數篇加はつて居るので、それを特に紹介して置かうと思ふ。

『東叢山觀音出現利益の事』では、ある老人が孫娘の行末を祈らうとして清水堂に參籠すると、ある夜觀音様から夢の御告げがあつた。それによると、汝の誠心に感じたから來月十七日の拂曉に姿をあらはさう。不忍池のほとりを、青い衣を着て白い馬に跨つてとほるものがあつたら、わが身だと思へといふことであつた。で、愈よその日になつて近隣の人に語りあひ、百人あまりの者が不忍池に行くと果して、御告げのとほりの若武者が通りかゝつたので、一同はその場にひざまづき、手を合せて禮拜したすると件の武士は大に驚いて、走り過ぎようとする、一同は彼を幾重にも取り圍んだので

詮方なく刀を抜いて圍みを切り抜け一目散に逃けて行つた。群集もびつくりして散々になつて歸つたが實はその武士は比類のない悪人で、その朝偶然そこを通りかゝつたに過ぎないのである。その後彼は不審が晴れずいろ／＼と聞き探つて見たところ、上記の事情がわかり、扱は觀音さまが自分を救ふための方便にあのやうな方法を御取りになつたにちがひないと、それからは大に改心して別人の如き正直な人間になり後にはかの老人の孫娘を妻として榮えた。

次に『山中妖物實驗の事』では、ある武士が、讚州金比羅山は怖ろしい魔所で登ることが出来ぬときいて、冒險を試みるために、ひとりで出かけてその絶頂に一夜を明さうとした。すると別に、何の怪しいこともなかつたが明け方になつて歸らうとすると、怪しい物音がして、誰か歩み寄つて來るやうであるから、いち早く物蔭にかくれて様子を覗ふと、何者とも知れず息使ひ荒く登つて來て、手にもつて居たものをポイントと草蔭に投げて、また慌しく引き返して行つた。手搜りに拾ひ上げて見ると生々しい人の首だつたので、傍の堂の縁の下に投げこんで、そのまゝ山を下つた。それから四十年の歲月が経て、彼は藝州に仕へて居たが、ある日詰所で奇談を話しあふ序に、この話をするその座に黙つて聞いて居た六十ばかりの侍が、その首を捨てたのは自分だと言ひ出した。事情をきいて見ると、その時父の仇を打つたのであるが一旦山に逃れて首を棄て、一里ばかり歸つてから、人に發見されては不利益だと思つて引き返して見ると首がない。定めし天狗でもさらつて行つたのだら



うと思つたが、今の御話で四十年來の疑念が晴れたといふのであつた。

この後者の物語は現代の探偵小説の構想としても立派に通用するのである。ことに「禪僧船中横死 附 白晝幽霊の事」になると、犯罪學の立場から見ても頗る興味がある。

篠塚某といふ武士が、ある禪僧と同道して京に上る途上琵琶湖を渡る船中で、僧の所持金に目くらみ、闇を利用して金を奪つて海に突き落した。その後、彼は仕官して榮えたが殺した僧の怨念に付き纏はれて遂に大病に罹り、露命が旦夕に迫つた。そこで彼の息子は心配して、江州多賀神社に参籠して父の命に代らうと祈つた。するとある日一人の旅僧が飄然として篠塚の邸をたづねて來たので、取次のものが重病だといつて斷ると、僧は、その病氣のことで逢ひに來たのだと告げて押し通つて病室へはひつた。これを見た篠塚は、あれこそ殺した僧の亡霊だといつて愈よ苦悶し展轉したので、旅僧はにつこり笑つて、實はあの時自分は死ななかつたのだと語り始めた。水練が達者であつたために命が助かり、それから東國を行脚することに決し、貴殿が都に時めいて居られることは噂にきいて居たけれど何も因縁とあきらめて、少しも怨まず御たづねもしなかつた。ところが先日多賀の神から御告げがあつて委細を知つたので、今日御訪ねした譯であるが、貴殿の病は貴殿の心のために起つたのであるから本心に立ち歸りなさいと忠告するのであつた。これを聞いた篠塚は大に前非を悔い、先年奪つた金に利息をつけて僧に返し、僧は初願のごとくそれで觀音像を作

つた。

この物語の興味は、白晝の幽霊だと思つたものが、實在の人間に過ぎなかつたといふ點にある。良心の苛責に悩んで居るものが、まのあたりに殺したのを見たときの驚きは如何ばかりであつたであらう其處がこの物語の中心となつて居るのである。孝行の志を語り、利慾を誠める教訓小説である外に探偵小説としても見どころのある作品である。

御伽婢子の流れを汲むもの、諸國物語の流れを汲むもの、百物語の流れを汲むものうちこの外には取りたてゝいふべきものはないやうである。たゞ百物語の形式について一言述べて置くならば、御伽婢子に、「百物語には法式があり。月暗き夜、行燈の火を點じ、その行燈は青き紙にて張りたて、百筋の燈火を點じ、一つの物語に燈心一筋づゝ引取りぬれば座中漸々暗くなり、それを語り續ければ必ず怪しき事怖ろしき事現はるゝとかや」とあつて、ビーセトンの小説に出て來る「何々クラブ」の談話の模様と頗る似寄つて居る。探偵小説の形式にも昔も今も變らぬところのあることは頗る興味が深い。

### ラフカヂオ・ハーンの翻譯



徳川時代の怪異小説は、前にも述べたごとくそれ自身さほどの文藝價値を持たないのに、一たびラフカヂオ・ハーン(小泉八雲)の手に翻譯されて、英米に紹介されると、世界的の名聲を博することが出来た。それはいふまでもなくハーンの天才によつて、翻譯とはいふものの一種獨得の詩味を持たされ、到底原作からは得られぬやうな夢幻的な美感を與へられるからである。私は英米の怪奇小説を愛好する、讀者に、是非、ハーンの作物を御勧めしたいと思ふので、特にこゝに紹介して置くのである。

怪異小説を取入れたハーンの物語集には Kwaidan, Kotto, A Japanese Miscellany, Shadowing, In Ghostly Japan などがあるが、この中 Kwaidan が最もポピュラーになつて居る。この中には臥遊奇談から取つた「耳なし保一の話」夜窓鬼談から取つた「お貞の話」「鏡と鐘」怪物輿論から取つた「ろくろ首」百物語から取つた「貉」新選百物語から取つた「極秘」玉すだれから取つた「青柳の話」の外に、ハーンが直接、地方の農夫などから聞いた話が收められて居る。中にも「貉」は極めて短いけれども、珠玉のやうな作品である。

京橋の某商人が、ある夜遅く紀伊國坂をとほりかゝると御堀のそばに一人の女が、頻りに泣いて居た。彼はそれを哀れに思つて、近づいてよく見ると、立派な服装をした良家の若い娘であつた。

「お女中、どうしたのですか」と、彼は聲をかけたが、彼女は袖に顔を埋めて、泣き續けた。

「お女中、どうしましたか。お話をさい」

彼女は立ち上つたけれども、相も變らず彼に背を向け、袖に顔を埋めて泣いた。やがて彼は彼女の肩に手をかけて「お女中、お女中」と頻りに呼ぶと、彼女ははじめて振り向いて袖をおとし、手をもつてその顔をつるりと撫でた。見ると眼も鼻も口もないのつべら棒の顔であつた。

「ヒヤッ!」と言つて彼は夢中になつて駆け出した。紀伊國坂にはそのとき一人一人とほつて居なかつたが、彼は暮地に走り走つた。と、前方に提燈の灯が見えたので、ほつと思つてかけつけて見ると、それは蕎麥賣りの灯であつた。

「あゝ、あゝ、あゝ」と彼は叫んだ。

「これ、もし、どうしたんです」と蕎麥賣りの男はたづねた。

「あゝ、あゝ」

「強盗にでも逢つたのですか」

「いや、いや、お堀のそばで、若い女に、あゝ、その顔が……」

「えゝ? ではその顔は、こんなでしたか?」

かういつたかと思ふと、蕎麥賣りの男は、その手で顔をつるりと撫でた。見ると、眼も鼻も口もない、のつべら棒。

はつと思ふと提燈の灯が消えた。



これはもとより逐字譯ではないが、全篇がみな、かうした鹽梅に引きしめて書かれてある上に、ハーン獨得の詩的な而もわかり易い文章を以て物されてあるから、思はず釣りこまれて讀んでしまふのである。

### 古今奇談英草子

英草紙は前に述べた如く、兩月物語と共に江戸時代怪異小説の双璧である。作者近路行者は本名を都賀庭鐘といつて大阪の醫者である。水滸傳最初の譯者たる岡島冠山、小説精言、奇言等の著者たる岡白駒と共に、同時代の支那小説紹介の三大功勞者と稱せられて居る。彼は英草紙の外に『古今奇談 繁野話』と稱する怪異小説を書いて居るが、讀本としては前者の方が面白いやうである。英草紙は五卷九話から成つて居て、各々の物語がその長さに於ても、御伽婢子などより遙かにまさつて居るから頗る讀みごたへがある。歴史を取り扱つたものと世事を取り扱つたものとの二種類にわかれて居るが、いづれも比較的現實味に富んで居るから、これを怪異小説の中へ數へぬ人さへある。ことに歴史物は世事を取扱つたものよりも現實味に富んで居て、怪異分子に乏しいから、私は世事を取り扱つたものの中から、その一つを選んで述べて見ようと思ふ。

英草紙の文章は支那小説の影響を受けて居るだけに、漢文口調であつて、多少ごつ／＼したところがある。以下私は、『白水翁が賣卜直言奇を示す話』の一篇によつて、その文章と構想とに就て述べて見よう。

『文明の頃、泉州堺に白水翁といへるものあり。よく人の禍福吉凶を決し、成敗興衰を指すこと差はず、常に大鳥の社の邊に行きて卜を賣る。一日一人の士こゝに來りて其卦を問ふ。白水翁其年月日時を聞いて、卦を鋪下し、考を施して言ふ。『此卦占ひがたし、早く歸られよ』といふ。此士心得ぬ體にて、『我卦何のゆるに占ひがたき。察するに、卦のいづる所よろしからず、あらはにしめしがたきことあるか。いむことなく示されよ』といふ。翁もとより言葉を飾らず『拙道が卦による時は、貴君まさに死し給ふべし』此士いふ『人死せざる道理なし。我幾年の後か死すべき』翁云ふ『今年死し給はん』今年の中、幾の月に死すべき』今年今月に死にたまふべし』『今月幾日に死するや』『今年今月今日死にたまふべし』此人心中怒を帯びて再び問ふ『時刻は幾時ぞ』『今夜三更子の時死に給はん。』此人おほえず言葉を勵くしていふ『今夜眞に死せば萬事皆休す。若し死せずんば明日爾をゆるさじ』翁いふ『貴君明日恙なくば、來つて翁が頭とり給へ』此人彼が詞の強きを聞いていよいよいかり、翁を床より引きおろし、拳をあけて打たんとす。近邊のものはしり集りてなだめ、此士をこしらへかへし、翁にむかひ『爾しらすや、彼人は此所に執りはやす侍なり彼人の



氣色を損じては、爰にあつて卦店をひらき難からん。かへすくも、爾應變なき人かな、人の貧富壽夭は數の定る所ならんに、卦には如何に出づるともすこしは詞をひかへてこそよからん」といふ。翁一口の氣を歎じて言ふ。「人の心に應ぜんとすれば卦の言にそむく。卦の實を告ぐれば人の怒をおこす。此所にとゞまらずとも己自留る所あらん」と、卦舗を拾収めて別所に去りゆきぬ」

といつたやうな文章であつて、その會話など、近代文學的色彩が頗る濃厚に出て居る。さて、この白水翁に卜つてもらつた侍は、當所郡代の別官をつとめて居る茅沼官平といふものであつたが、白水翁の言葉がひどく癢にさはつたので、ぶんくして家に歸ると女房の小瀬は心配して、何か上役の御機嫌でも悪かつたのですかとたづねた。そこで彼が白水翁の話をすると、小瀬は眉をひそめて、「そんないゝ加減なことを言ふものを、何故追つ拂ひになりませんでしたか」といつた。

『随分腹は立つたが、人がとめたからゆるしてやつたよ。今日死な、かつたら、明日は彼をたづねていたしめてやらう』

「ほんとにさうなさいまし、そんなにびんくしていらつしやるのに、今夜死ぬなどとよくも言へたものです。もうもうそんなけがらしい言葉は、酒を飲んでお忘れなさいませ」

官平は女房のすゝめた晩酌に酔つて、まだ日も暮れきらぬその場で假寢した小瀬は女中の安を呼ん

で二人で官平を運んで、正しく寢させ、それから女中に、易者の話をして、今夜は針仕事しながら寢すの番をしようと云ひ出した。さて段々夜が更けて行く、と安がくらくくと眠り出したので、小瀬は揺り起しては夜の更けるのを待つと、やがて三更の太鼓がなつたので、「もう三更が過ぎたら大丈夫、さあ二人がもたれ合つて寢よう」と告げた。

するとその時、奥の間から、官平が白装束で寢間から飛び出して来て、あつといふまに、戸外へ走り出して行つた。すはとばかり、小瀬は安と共に手燭をともして良人の跡を追ひかけたが、女の足では追ひつことが出来ず、あれよあれよといふ間に官平は、ある大川の橋の上まで走つて、まんなかどころから、どんぶと飛び込んでしまつた。

二人の女は橋の上で、泣き悲しみ乍ら、聲をかけたが、丁度水の多い時分だったので忽ち良人の姿は見えなくなつてしまつた。彼此するうち近邊の人たちは物音をきいて駆け集つて来たが、最早如何ともすることが出来ず、小瀬をなだめて家に送りかへし、白水翁の言葉のあたつたことに皆々舌を捲いた。

あくる日近邊のものは死骸をさがしに行つたけれども海へ流されたと見えて行方が知れず、官平は狂氣して死んだと取沙汰されて事件は落着した。小瀬は安と共に亡夫の位牌を設けて追善に日を送つたが、百ヶ日も過ぎると、小瀬の親里から再縁のことをすゝめて来た。小瀬はどうしてもそれ



を受けなかつたが、あまりに勧められるので、「この家へ養子を迎へるならば兎に角、他家へ嫁ることとは、どうしても厭だ」と、その心底を打明けた。そこで父親も尤に思つて、然るべき養子を物色すると、丁度同じ國守の郡役を承る岸某の弟に權藤太といふのがあつて、官平夫婦をまんざら知らぬ間でもなかつたから、話をすゝめて見ると双方乘氣になり、こゝに縁談は首尾よくまとまつて、權藤太は名を官兵と改めて、茅沼の家を相續したが、夫婦の間は至つて圓滿であつた。或る夜夫婦は寢酒を飲まうと思つて、女中の安に酒の燗を命じた。安は眠たい眼をこすり乍ら、竈のそばへ寄ると驚いたことにその竈がぐらくと揺れて、一尺ほども地を離れた。見ると竈の下には人間らしいものが居て、髪を亂し、舌を吐き、眼に血の涙をうかべて、「安、安」と呼んだ。安はびつくりして悲鳴をあげて氣絶したので、夫婦が水をそゝいで甦らせて事情をたづねると、安は「前の旦那様が竈の下から御呼びになつた」と答へた。これをきいた小瀬は大に怒つて「厭々酒を温めるものだから、さういふ恐ろしい目にあふのだ」とたしなめ、ぶつ／＼言つて二人は寢室へかへつた。

そのことがあつてから、小瀬は安をきらひ、どこかへ嫁らせようと思つて居ると、幸ひに同じ郡に段介といふ商人があつたので其處へ仲人して安をかたづけやつた。ところがこの段介といふ男は非常な酒好きで博奕を好み、いつも安を官平の家に遣して金を借りさせたが、ある夜、また酒に酔つて、今からすぐ金を借りて来いと言ひ出した。で安は厭々ながら官平の家の門まで来ると、ふと上の方から「お前に金をやらう」といふものがあつた。見ると、屋根の上に一人の男が立つて居て、

「俺は死んだ官平だ。この袋の中に金があるからつかふがよい。それから、この紙に俺の末期の一句が書いてある」

といひ乍ら、その袋を投げて、何處ともなく消え去つた。安は怖ろしい思ひをしながらも、取り上げて見ると、先の主人の火打袋であつたので、家に歸つて事の次第を告げたが、段介はその金を消費したので、人には語らずそのまゝ、日を送つた。

話變つて、ある夜、國守は、夢に髪をのばした男が、頭に井戸をいたゞき、眼中血の涙をながして一枚の願狀を奉つたのを見た。その文に、

要知三三更事 可開二火下水

とあつたことを覺めての後も覺えて居たのでそれを紙に書いて市門に掛け、懸賞で、この意味を説くものを募集した、これを見た段介は、先夜火打袋にあつた一句がこれと全く同じだつたので、早速訴へ出ると、國守はその書附を出させて御覽になつた。ところがその書附は白紙になつて居たので段介は大に恐縮して、事の次第を逐一申述べた。



國守はそれから安を呼んで一切の事情をきとり、官平の家へ數人の人夫を遣して竈を毀させる。下には一個の石があり、更にその石を取りのけると井戸があらはれたので、中を探ると官平の絞殺死體が出て来たそこで國守は官平夫婦を詰問し、その結果夫婦は包み切れずして白状した。それによると、二人は先の官平の生きて居る頃、不義をして居たが、ある日官平が八卦を見て貰つて歸り、易者の言葉を告げたので、その家にかくれて居た權藤太は三更の頃、酔ひふした官平を絞殺して井戸の中へかくし、それから、髪をふりみだし、官平のやうに装つて、橋まで走り行き、大石を投げて、身を投けたやうに見せかけ、それから小瀬と計つて、井戸の上に竈をうつし、次で首尾よく養子をして不義の目的を達したのである。

これがこの物語の梗概であつて、可なりに超自然的な分子が濃厚であるけれども、探偵小説としては上乘のものである。易者の言を巧みに應用して、人々の眼をくらますやうな狂言を書いたところは頗る面白い。現代の探偵小説家ならば後半の超自然的分子を科學的にして相當な探偵小説を作るであらう。

### 淺井了意と上田秋成

淺井了意と上田秋成とは江戸時代に於ける怪奇小説の兩巨擘である。前者は伽婢子と狗張子を著して怪奇小説の元祖の地位を占め、後者は雨月物語を著して中興の祖となつた。雨月物語一集は、日本古今を通じての怪奇小説の白眉といつてよいから、中興の祖といふ言葉は或は適當でないかも知れない、適當でなければ何とでも改める。兎に角、怪奇小説の作者としての上田秋成は第一人者として奉つてもよいであらう。實に秋成の作品のあるものはボオの作品に比肩すべきであつて、而も秋成にはボオの作品に見られない秋成獨得の味がある。かの歴史的人物の亡靈を引つ張り出して、一層讀者の感興をそよるあたりは彼獨得の味といつてよいのであらう。否、彼獨得といふよりも、日本の怪奇小説に獨得な點であつて、すでに英草子あたりにも見られるところであるが、この點はむしろ日本人の好みから出て居るといつてもよく、現代でも所謂怪物が愛好せられるのは興味ある現象といはねばならない。

超自然的な事件を取扱つて凄味を多く出さうとするには、作者自身が超自然的なことを信ずる程度が深くなくてはならない。従つて怪奇小説を研究するには、作者の怪奇に對する信仰の如何をたしかめて置く必要がある。で、私は淺井了意と上田秋成の性格の一端を述べて見たいと思ふのである。ところがこの二人とも、その傳記があまりはつきりして居ないのである。ことに淺井了意に至つては、シエクスピーアと同じやうに、不明な點があつて、その性格などはむしろその作物から覗はねば



ならぬくらゐである。之に反して上田秋成には自叙傳風な著作があるので、可なりにはつきりその性格が覗はれ、その性格を知れば、兩月物語を生んだのも強ち偶然ではないと思はれる。

秋成が會根崎の娼家の妓女の子で、その父が知れぬといふことがたとひ虚傳であつても、幼より身體が弱く時々驚癇を發し、世間的にも随分苦勞して育つたことは事實であるらしく、又病的に近いほどの癇癇を持つて居て、世に背き人にすねたことも事實である。青年時代には遊蕩に耽つたが、酒は嫌ひであつて、この點が、ボオやボードレールのやうな怪奇小説作者とちがつた點である。秋成を天才 genius とするには異存のある人も多からうが、少くとも彼が天才 talent であることは争はれぬところであつて、天才と能才とを混同したロンブローの天才論式に觀察したならば、秋成が所謂天才型の人物であつたことは認めなければならぬ。それは、彼の「膽大小心録」を讀んでも、十分察することが出来るやうに思ふ。ボオは酒精中毒患者であつて、加ふるに阿片を溺愛し種々幻覺に悩んだ。ことにその「動物幻覺」は著しかつたらしく、ビルンバウムは彼の名詩「大鴉」もその幻覺から生れたものであると言つて居る。かやうな性質をもつた藝術家がアラベスクなまたグロテスクな多くの傑作を生んだのは無理もないが、酒の嫌ひであつた秋成が、兩月物語のやうなすぐれた怪奇小説を残し得たのは、彼自身に深い靈怪信仰を持つて居たからであらう。まつたく秋成は迷はし神や狐狸が人につくことを信じ切つて居たらしく、さういふ事の決して無いことを主張した中井履軒を口を極

めて罵つた。「膽大小心録」の中には次の一節がある。

「履軒曰、狐人に近よる事なし、もとより彼等に魅せらるゝといふ事はなき事なりとぞ、細谷半齋は性慇懃にて禮正しき人也、世人是を却りて疎むは、世人の性亂怠なる者なり、京師に在りて西本願寺へ拜走す、あした三條の油小路を出て、晝過ぐるに到らず、終に日暮れしかば、恍忙として家に歸りし事あり、是性の靜なるをさへ狐狸道を失はず、翁（秋成）又一日鴨堤の庵を出て、銀閣寺の淨土院に行くに、吉田の丘の北をめぐりて、又東に行く順路なき、道尤も狭からず、さるにいかにしてか白川の里に來りぬ、物思ひて惑ひしと心得て、やうく東南の淨土寺村に來りて、和尚圖南と談話のついでに此事を語る、和上、病なるべしよく慎み給へとぞ、歸路又、吉田の丘の北に來て、大道につきて西に庵に歸らんとす、いかにしてか百萬遍の寺前に至る、こゝに知る、狐道を失はせしよと。然れども心忙然たらすして、午後歸り着きぬ、また一日北野の神にまうづ。あしたに出で拜し、東をさすに、春雨蕭々と降り來りて、老の足弱く、眼氣つのりて、頭さし出づべからず今夜はこゝに宿すか、さらすば乗輿をめさんと云程、雨少しやむ、庵には十二三町の所也、常に通ひなるゝに勞なく思へば、雨おもしろとて門を出て東をさす、一條堀川に至りて雨又しきり也、傘を雨にかたぶけて行くに、苦しかれども行くに、大道のみにて迷ふべからず、雨に興じて來る程に堀川の榎木町に至りぬ、こゝに始めて心づきて、傘の傾きに東南をたがへし也と思ひ、又東をさすに



圖らずも堀川の西に歩む、又所を知りたれば、いかにしてとて心をすまして、遂に丸太町をただに東をさして庵に歸りぬ、日將に暮れんとす、病尼待ちわびて辻立したり、大賀（宗文の家）に在りしとのみ答へて入りたるが、足疲れ眼暗み心いよく暗し、燈下に牀のべさせて臥して、曉天に至るまでうまいしたり、是又狐の道失はせしか、半齋も我も精神たがはずして、一日忘る事、狐の術の人にこえたる所也、學校のふところ親父、たましくにも門戸を出ずして狐人を魅せずと定む、笑ふべし〜」

この文を讀まれた讀者は、『學校のふところ親父』たる履軒を笑つてよいか、又は秋成その人を笑つてよいかに迷はれるであらう。もし秋成が眞に上記のやうな經驗をしたとするならば、彼に多少の精神異常があつたと認めて差支なく、却つて彼が所謂天才型の人であつたことを裏書きして居ると言つてよいかも知れない。彼はなほこの外に色々の實例を擧げて履軒に喰つてかゝつて居るが、いづれにしても彼が妖怪とか幽霊とかを信じ切つて居たことは明かであつて、信じ切つて居つたればこそ、雨月物語のやうな凄味の多いものが書いたのである。勿論怪奇小説の目的は、凄味をあらはすことばかりではないかも知れぬが、凄味を唯一の目的として怪奇小説を書かうと思つたなれば、作者自信が、怪奇を信じ切らなければならぬ。若し、冷靜な、所謂科學的態度をもつて書いたならば、恐らく十分な凄味は出ないと思ふのである。

例へばかの山岡元隣の『古今百物語評判』は、『御伽婢子』の少し後に公にされた怪奇小説であるが、元隣は學者肌の男であつて、自分の宅で催はされた百物語の一幕に批評解説を加へ、その一斑を擧げるならば、

「哲人は狐にばかされずと言はよし、哲人の前に狐化けすと言はよからず。是眞人は火に入つても、燒けずと言はよし、眞人の前には火燃えずと言はよし、非なるが如し、燃ゆるは火の性、やけぬは眞人の徳、化くるは狐の術、ばかされぬは哲人の徳なり」

といつたやうな書き振りであるから、物語そのものに凄味が頗る少なくなる譯である。言ふ迄もなく、モーリス・ルヴェルの作品のやうに自然的な事件から凄味を發見したものは、書き方が科學的であればある程、却つてその凄味は強くなるのであるが、超自然的な事件によつて凄味を出すためには、作者が科學的態度即ち冷靜な客觀的態度を取ることが危険であらうと思ふ。尤も、前回に述べたやうに主觀的な幽霊、例へば犯罪者が良心の苛責によつて見るやうな幽霊を取り扱ふ場合は別物であつて、徳川時代の怪奇小説のうち、主觀的幽霊を取り扱つたものが、文學的作物として比較的見どころのあるのは、作者が幽霊を眞に信ずると否とに關係しないからであらう。

「御伽婢子」の作者淺井了意が秋成のやうに幽霊や化物の信者であつたかどうかといふことははつきり傳はつて居ない。晩年には洛陽本性寺の住職となつたといはれて居るが、僧侶であつたことが必ず



しも幽霊の信者であつたといふ證明にはならぬのである。彼は怪奇小説ばかりでなく、「堪忍記」や「浮世物語」のやうな教訓小説に加ふるに「東海道名所記」のやうな旅行文學をも著はして居つて、それ等の作物を通じて作者の心を推察して見るならば、少くとも秋成ほどの幽霊信者ではなかつたと思はれる。それにも拘はらず、彼が、秋成に次での怪奇小説作者であるのは、彼の文章の巧さが然らしめて居ると言ふべきであらう。後に委しく説くやうに、超自然的の事柄を取り扱つて凄味を多く出すためには、作者の主観状態と同じく文章の力即ち文章によつて作られる氣分が非常に大切なものとなつて居るのである。

なほ又、怪奇小説、ことに超自然的な事柄を取り扱つた作品の出来ばえは、作者の年齢が多少の關係を持つて居るやうに思はれる。ボオは四十歳の若さで斃れ、それ迄に約七十種の物語を作つたが「アシャー家の没落」、「リジア」の如き傑作は三十歳になるかならぬかに作られて居る。秋成の雨月物語が三十五歳の時に出来上つたことを考へると、二十五六歳から四十五六歳迄の間が怪奇小説を書くに最も適當でないかと思はれる。これは主として年齢と文章との關係から考察すべきものであつて、老齡になつて、所謂枯淡な文章を書くやうになつては、凄味を出すことが困難となるであらう。同じく淺井了意の作でも、狗張子は、御伽婢子より二十數年後に作られたのであつて、御伽婢子よりも劣つて居るといふ定評のあるのは、主としてやはり文章の枯淡になつた爲ではないかと思はれる。

御伽婢子そのものも、よくはわからぬが了意の五十以後の作であるらしく、若し彼が三十年代に筆を執つたならば或は、もつとく凄味の多いものとなつたかも知れない。怪奇小説に志す人は、須らく、年の若いうちに多くの作品を残すことに心懸くべきであらう。

### 御伽婢子と雨月物語の文章

如何に幽霊の眞の信者であつても、文章が拙くては、優れた怪奇小説を作ることが出来ない。作者が幽霊の信者であつても、讀者は十人が十人幽霊の信者でないから、讀者を強く戦慄せしめるためには、文章の力に依る外はないのである。御伽婢子や雨月物語の成功して居るのは、その美しい文章の力であつて、このことはボオの作品に就ても同様である。「アシャー家の没落」を讀んだものは、何よりも先にその文章の巧さに魅せられる。「雨月物語」の九篇の小説を讀んで、文章の妙味に酔はされぬ人は恐らく少ないであらう。

特種な妙文を書くには特種な感覺を必要とする。ボードレルは散文詩を創作し、人工美に極端な憧憬をいだいたが、遂に嗅覺に新しい詩的聯想を發見するに至つた。例へば彼は麝香をすつて緋と金色とを思ひ起させると言つたが、かうした特種な感覺は、やがて彼の文體に影響して、一種言ふに



いへぬ絢爛な熱情的な色彩を躍動せしめたのであるが、ボオに就ても、また秋成についても同じことが言へるであらうと思ふ。尤も秋成の文章にはボードレルほどの異常感覚は認められないが、秋成が文體といふことに可なり鋭敏な感じをもつて居たことは事實であつて、かの本居宣長との論争にもその一端が覗はれると思ふ。その音韻假名遣の論争の如きは、語學上の議論ではあるけれど、一面からいへば、彼が文章に對する熱情を認めない譯にはいかぬ。ロンブローはボオやボードレルの文章を、狂的發作の影響が然らしめたであらうと論じたが、實際狂的になる位にならねば名文章は書けぬかも知れない。

凄味を目的の怪奇小説は通常短いことがその特徴となつて居るやうである。寸鐵人を殺すといふ言葉のあるとほり、人の心をびりつと戦慄せしめるにはなるべく短い方が効果が多いうに思はれる。然しいふ迄もなく短か過ぎてはやはりいけない。長過ぎず短か過ぎず適當に書くのが作者の腕である。了意の御伽婢子が雨月物語に及ばぬのは、各々の物語が一般に短か過ぎるといふこともその原因の一つであらう。雨月物語に收められた九篇の物語は、四百字詰原稿用紙十枚乃至二十枚のもので一番長い『蛇性の姪』も約三十枚のものである。モーリス・ルエヴルの恐怖小説が日本語に翻譯して十枚乃至二十枚であること、比較して見ると頗る興味があると思ふ。もとより物語の長短などは、内容によつて定まることであるから、兎や角言ふのは野暮であるかも知れぬが、俳句や川柳が限られた

る字數の藝術であるところを見ると、怪奇小説の長さといふことに一考を費すのも、無意義なことではあるまいと思ふ。

短かい紙數の中に、作者の狙つた氣分を十分に漂はせることは甚だむづかしいことであつて、其處に怪奇小説作者の特別な技術が必要となつて来る。

『戊申の歳、五條京極に荻原新之丞と云者あり、近き比妻に後れて愛執の涙袖に餘り、戀慕の紈胸を焦し、獨淋しき窓の下に、ありし世の事を思ひ續くるに、いと悲しさがぎりもなし、聖靈祭りの營みも、今年は取わき、此妻さへ無き名の數に入ける事よと、經讀み回向して、終に出ても遊ばず、友だちの誘ひ來れども、心唯浮立たず、門に立て浮れをるより外はなし、

いかなれば立もはなれず面影の

身にそひながらかなしがるらむ

と打詠め涙を押拭ふ、十五日の夜いたく更けて、遊び歩く人も稀になり、物音も静かなりけるに、一人の美人其年二十許と見ゆるが、十四五許の女の童に、美しき牡丹花の燈籠持たせ、さしも徐やかに打過ぐる芙蓉の背あざやかに楊柳の姿たをやかなり、桂の黛、碧の髪いふ計りなくあでやか也、荻原月の下に是を見て、是はそも天津乙女の天降りて、人間に遊ぶにや、龍の宮の乙姫の渡津海より出で慰むにや、誠に人の種ならずと覺えて、魂飛び心浮かれ、自をさへ留むる思ひなく



愛で惑ひつゝ、後に随ひ行く』

とは、御伽婢子の中の、有名な『牡丹燈籠』の一節である。これを讀むと、この窈窕たる美人が幽霊であると知れない前に、何となくこの世のものでないやうな氣がする。又『野路忠太が妻の幽霊物語の事』の一節には、同じく妻を失つた男が妻の幽霊に訪ねられる有様を叙して、

『三日の後便りにつけて聞けば、妻風氣をいたはりて死せりと言、忠太悲しさ限なし、とかくして江州に歸り、其跡を慕ひ妻が手馴れし調度を見るに、今更のやうに思はれ涙の落る事隙なし、日比の心ざしわりなき中の其期に及びてはさこそ思ひぬらんと思ひやるにも、なにはにつけて歎きの色こそ深く成けれ、寢ても覺めても面影をだに戀しくて、

思ひ寢の夢のうき橋とだえして

さむる枕にきゆるおもかけ

と打詠じ、若し我戀悲しむ心を感じれば、せめて夢の中にも見え來りてよかしと、獨言して日にくらす、比は秋も半ば、月朗かに風清し、壁に吟するきりくす、草村にすだく蟲の聲、折にふれ事によそへて、露も涙も置き争ひ、枕を傾けれどもいも寢られず、はや更かたに及びて、女の泣聲かすかに聞えて、漸々に近くなれり、よく聞ば我妻が聲に似たり、忠太心に誓ひけるは、我妻の幽霊ならば何ぞ一たび我にまみえざる、娑婆と冥途と隔ありとは云へ共、其かみのわりなき契り

取ずとも忘れめやと、其の時妻は窓近く來り、我はこれ君が妻なり、君が悲しみ歎く心ざし、黄泉にあれども堪がたくて、今夜こゝに來り侍べりと』

と書いたあたり、幽霊の出て來る雰圍氣が、その美しい文章によつて巧みに醗酵させられて居る。

たゞあまりに文章がなだらかであるために出て來る幽霊が現實のやさしい人間と變りがなく、ために陰森凄愴たる感じを與へることが少ない。一口にいふと美しい刺繍の幽霊を見て居るやうであつて、この點から考へても、了意は眞の幽霊信者ではなかつたかも知れない。これに比べると、秋成の幽霊には一段の凄味がある。

『よもすがら供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をせめて、經文徐に誦しつゝも、かつ歌よみてたてまつる。

松山の浪のけしきは變らじを

かたなく君はなりまさりけり

猶心怠らず供養す、露いかばかり袂にふかゝりけん。日は没りしほどに、山深き夜のさま常ならで、石の床、木葉の衾いと寒く、神清み、骨冷えて、物とはなしに凄じきこちせらる。月は出でしかど茂きが林は影をもらさねばあやなき闇にうらぶれて、眠るともなきに、まさしく圓位圓位とよぶ聲す。眼をひらきてすかし見れば、其形異なる人の、背高く瘦おとろへたるが、顔のかたち



著たる衣の色紋も見えで、こなたにむかひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐しともなくて、こゝに来るは誰ぞと問ふ』

とは、『白峯』の一節であるが、その凄味に於ても、同じ題材を取り扱つた露伴の『二日物語』に、優るとも劣つては居ないやうな氣がする。『菊花の契』に於て、赤穴宗右衛門の亡靈が左門を訪ねて來るところなどは、まだ亡靈とはわからないのに、一種の凄味が漂つて居る。

『午時もやゝかたぶきぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿急ぐ足のせはしけなるを見るにも、外の方のみまもられて心酔へるが如し。老母左門をよびて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきは今日のみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき、入りて臥もして、又翌の日を待つべしとあるに、否みがたく、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出でて見れば、銀河影さきえぎえに、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる聲すみわたり、浦浪の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉てて入らんとするに、たゞ見るおほなる黑影の中に人ありて、風のまに／＼來るを、あやしと見れば赤穴宗右衛門なり』

簡潔にして要を得て居る所、ボオの文章を思ひ起せる。

すべて、超自然な事柄を取り扱ふに際し、西洋の作者でも東洋の作者でも、同じやうな背景を選ば

やうである。先づ最も多く選ばれるのは、前掲の諸例に見られるやうに夜分、而も月を配した夜である。次は人通りなき山中か或は訪ふ人もなき廢墟である。更にその次には暴風雨や霧である。秋成はそれ等のものを自由自在に組み合せて、愈々作品の印象を深からしめることに成功した。

『五更の空明けゆく頃、現なき心にも、すゞるに寒かりければ、衾被んと搜る手に何物にやさやさと音するに目さめぬ。面に冷々と物の零るゝを、雨や漏りぬるかと思れば屋根の風に吹捲くられてあれば、有明の月白みて残りたるも見ゆ家には扉もあるやなし、簀垣打頼れたる間より秋薄たかく生ひ出て、朝霧うちこほるゝに袖濡ちて絞るばかりなり。壁には葛葛延びかゝり庭は葎に埋れて秋ならねども野らなる宿なりけり』(淺茅が宿)

『松吹く風物をたふすが如く、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を距てて聲を掛合ひ、既に四更に至る。下屋の窓の紙に、さと赤き光さしてあな憎くやこゝにも貼しつるよと云ふ聲、深き夜にはいと、凄じく、髪も生毛も悉くそば立ちて暫らく死入りたり。』(吉備津の釜)

など、例をあければまだ幾らもあるが、同じやうな筆をつかひ乍ら、しかも巧みに一々の情緒を描きわけて居るのは、さすがに巨匠の腕かなと驚嘆せざるを得ないのである。

かやうな筆法はボオによつても採用された。かの『アシャー家の没落』の中には、廢墟に似た荒びた建物、嵐の夜の音又は月光などが、巧みに按排されて、いふにいへぬ美しい凄味が描き出されて居



る。たゞボオの作品にありては、彼自身の内側から發する病的恐怖が中心となつて居るために、一層深刻に描き出されて居るのであつて、超自然的怪奇小説の效果は、どうしても、作者自身の先天的性質の如何によつて定まるものと考へざるを得ない。だから同じ材料を取り扱つても、作者の素質次第でいくらでも、凄味を深からしめることが出来るのであつて、現に雨月物語に收められた作品の題材の中には、後に説くやうに、御伽婢子その他の怪奇小説から取つたものが可なりにある。だから現今に於て、雨月物語の内容をそのまま書き直しても、書き手によりては雨月物語よりも遙かに物凄いのが出来ても知れない。このことは強ち怪奇小説に限らず、一般の文藝作品に就ても言ひ得ることであるけれども、同じ凄味を取り扱つたルヴェルの作品の如きは怪奇の發見そのものに價值があるものであつて、若し同じ題材を取り扱つたならば單なる剽窃になつてしまふから、特に注意したまでである。之に反して御伽婢子に收められた物語の約三分の一が、支那の剪燈新話の翻案であり乍ら、それ自身に獨特の凄味をもつて居るのは、超自然的題材の剽窃が所謂換骨奪胎たり得ることを示すものといつてよい。

然し乍ら、現代に於ても、超自然的題材を取り扱つた小説が、果して喜ばれるか否かといふことは全くの別問題である。雨月物語やボオの作品からは、いはばたゞ美しく凄味を得るだけであつて、近代人が要求するところの、身顛ひするやうな戦慄といふものは得られないから、追々ルヴェルの作品のやうなものが、好まれるだらうと思はれるけれど、それはいまこゝで委しく論すべき範圍ではないのである。

### 御伽婢子と雨月物語の内容

超自然的な怪奇を取り扱つた作品の内容も、その形式と等しく頗る相通つて居る。御伽婢子と雨月物語の内容の似て居るのは當然であるけれども、ボオの作品にも相似寄つた點があるのは興味ある現象といはねばならない。中にも戀愛を取り扱つたものには類似の題材が多く、例へば御伽婢子の「眞紅の打帯」「剪燈新話の「金鳳叙記」を翻案したもの」と、ボオの「リジア」とは頗る似たところがある。越前の敦賀に檜垣平次といふ士があつた。その一族が織田信長に攻められたゆゑに、身をかくして上洛し五年間を暮した。彼には許嫁の女があつたが、別離の悲哀のために思ひ死にをしまつた。彼女の親は平次が出立の際與へて行つた眞紅の帯を彼女の死骸に結びつけて、野邊の送りをすませた後幾何もなく平次は歸つたが、彼女の死をきいて獨り物思ひに沈み乍ら暮して居ると、ある日彼女の妹が外出するに逢つたが、その時妹が乗物から落したものをみると見覚えのある眞紅の帯であつた。不思議に思ひながら家に歸ると、その夜妹が忍んで来てさまざまに掻き口説いたので、彼は



妹と駈落して三國の湊に行き一年ばかりを夢のうちに暮したけれども、良心の苛責のために、敦賀に歸り、妹を船にとめて、妹の両親に詫を入れると、両親は驚いて、帯はたしかに姉娘の死骸と共に葬つたこと及び妹は一年このかた重病で寝て居ることを語つた。こんどは平次が吃驚して船へ人を遣はして見ると、残して来た筈の妹は居なかつた。するとその時病床の妹は枕をあけて、姉そのまゝの聲を出し、「前世に深い縁があつたから、閻魔大王に暇を貰つて一年あまり楽しく暮しましたが、もう私は歸ります」といつて平次の手を取り、暇乞をして父母を拜み、更に「平次さんの妻となつても必ず女の道を守つて両親に孝行をなささい」といひ乍らわななくと頓へて倒れてしまつた。皆が驚いて顔に水を灑ぐと、妹は蘇生し病は忽ち平癒したが、何事も覚えがないといふことであつた。かくて妹は平次の妻となつて共に姉の跡を弔つた。といふのが眞紅の打帯の梗概である。ボオの「リジア」では、ある男が、容貌も知識も古今に稀なといつてよい位位女と灼熱的な戀をする。ところがその女は死なねばならぬ運命に際會した。彼女はジョセフ・グランヴィールの「人間は意志さへ強ければ天使にも死にも決してその身を委ねることはない」といふ言葉を三度迄繰返して絶命する。男は悲歎のあまり、ライン河畔を去つてイギリスの片田舎に渡り、阿片溺愛者となつたが、女の遺産で、東洋風な邸宅に住ふことになり、そこで二度目の妻を迎へた。この女は第一の妻とは比較にならぬほど教養が低く、男は頻りに先妻に戀ひこがれた。程なくして第二の妻も病氣にかつて

絶命するが、やがて甦つた姿は先妻リジアであつたといふのである。この二つの物語は、共に強烈な戀は死をも征服することを描いたものであるが、前者では姉の靈が妹の生靈に宿り、後者では遺志の強い女の靈が、血縁關係のない女の死體に宿つたのであつて、凄味は遙かに後者に多いけれど、ボオのやうな巨匠でないものが、かういふ取扱ひ方をしたならば恐らく失敗するに違ひない。

これ等の物語とその内容は少しちがふが、強烈なる夫婦の戀は雨月物語の「浅茅が宿」に美しく描かれてある。零落した男が家運再興のために上洛すると、その留守中に郷里は戦亂の巷となつた。八年振りに歸つて見ると、最愛の妻は昔のわが家に待ちわびて居たので、つもる話に夜を更かし、さて曉の夢がさめて見ると、自分一人が八重葎の中に臥して居て、妻の姿もわが家も見えなかつた。驚いて附近の人にたづねると妻はとくの昔に世を去つて居たといふ筋で、甚だ簡單である。然し、「たまく」此處彼處にのこる家に、人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね、いづれか我住みし家ぞと立惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて、雷に摧れし松の聳えて立てるが、雲間の星の光に見えたるを、けに我軒の後こそ見えつると、先嬉しきこゝちして歩行むに、家は故にかはらであり人も住むと見えて、古戸の間より燈火の影もれて輝々とするに、他人や住む、もし其人や在すかと心躁しく、門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞きとりて誰そと答む。いたうねびたれと正しく



妻の聲なるを聞きて、夢かと胸のみさわがれて、我こそ歸りまゐりたれ。かはらで獨自淺茅が原に住みつることの不思議さよ、といふを、聞知りたれば、やがて戸を明くるに、いといたう黒く垢つきて眼はおち入りたるやうに、結けたる髪も背にかゝりて故の人とも思はれず、夫を見て物をもいはでさめざめと泣く」

の一節などは、物語の簡單な筋を文章の妙によつて補つて餘りあると謂はねばならない。ことに「雷に摧かれし松」を持つて來た技巧は非凡である。

「淺茅が宿」は主として御伽婢子の「遊女宮木野」の一篇がその題材となつて居るらしいが、この「遊女宮木野」は、剪燈神話の「愛郷傳」の翻案である。又、雨月物語の中の「夢應の鯉魚」は、古今説海「魚眼記」の逐語譯と言つてよい。かういふ點を考へて見ると、超自然を取り扱つた題材といふものは、殆んど先人によつて搜し盡されたといつてよく、これからの怪奇小説の作者は、表現に新味を求めより外はないかもしれない。

雨月物語には「白峯」、「菊花の契」、「淺茅が宿」、「夢應の鯉魚」、「佛法僧」、「吉備津の釜」、「蛇性の姪」、「青頭巾」、「貧福論」の九篇が收められてあるが、このうち「青頭巾」はその前半には變態性慾といふ現實の怪奇が取り扱はれて居るし、又、秋成が理窟家であることを知るに都合がよいから、特に紹介して置かうと思ふ。この物語は衆道に墮して鬼と化した庵主が行脚僧によつて得度されると

いふ筋であつて、愛する少年の死を悲しんだ庵主は、「懐の壁を奪はれ、挿頭の花を嵐に誘はれしおもひ、泣くに涙なく、叫ぶに聲なく、あまりに歎かせ給ふまゝに、火に焼き、土に葬ることをもせて、臉に臉をもたせ、手に手をとりにくみて、日を經給ふが、終に心神みだれ生きてありし日に違はず、戯れつゝも其肉の腐り爛るゝを吝みて、肉を吸ひ骨を嘗めて、はた喫ひつくしぬ。寺中の人々院主こそ鬼になり給ひつれと、連忙しく逃去ぬる後は、夜な夜な里に下りて人を驚殺し、或は墓を發きて、腥腥しき屍を喫ふありさま、實に鬼といふものは、昔物語には聞きもしつれど、現にかくなり給ふを見て侍れ」といふ状態になつたのであつた。この狂妄の人に法を説いた行脚僧は、三年の後再び庵を訪れると、その人は、昔のまゝに葎の中に端坐して、教へられた通りに證道の歌を誦し、影のやうな人の聲ばかりが、生き残つて居るのである。僧が禪杖を振りまはすと庵主の肉身は立どころちに消えて青頭巾と骨ばかりが散ばつて居たといふ結末である。作者は勿論後半の超自然的怪奇の凄味を多からしめんがために、前半に現實の怪奇を述べて居るためでもあらうが、現實の怪奇を述べる筆は、上を示したごとく一かう物凄くも何ともない。して見ると超自然的怪奇を取り扱ふ時と、現實の怪奇を取り扱ふ時とは、作者はその態度をきつぱり變へてかゝる必要があるかもしれない。

それは兎に角、この一篇中に眼だつ所は、作者が人間が鬼になつた古今の例證を長々と擧げて居ることである。即ち、「楚王の宮人は蛇となり、王舎が母は夜叉となり、吳生が妻は蛾となる」といつた



り、又「男子にも隋の煬帝の臣家に麻叔謀といふもの、小兒の肉を嗜好みて、潜に民の小兒を嗜みこ  
れを蒸して喫ひしもあれど」などと書いて居る。これはかのボオの「早過ぎた埋葬」の始めの部分の  
實例記載や、「かねごと」の中の笑と死とに關する議論と同じやうなものであつて、一方から言へば作  
品の効果を多からしめるかもしれないが、うつかりするとペダンチックだといつて笑はれる。秋成も可  
成りに議論が好きであつたと見え「貧福論」の如きは怪奇小説にはちがひないが、始めから終ひまで  
議論で埋つて居て、こゝにもまたボオと秋成との類似が認められるのである。

さて、雨月物語にあらはれる幽靈を通覽するに、「吉備津の釜」にあらはれる人妻良磯の生靈が多少  
主觀的な色彩を帯びて居るだけであつて、あとは皆客觀的な幽靈である。それにも拘はらず、十分な  
凄味をあらはし得たのは偏に秋成の非凡なる手腕の然らしめたところであるといはねばならない。

### 近松巢林子とシエクスピア

前章までに私は、探偵味と怪奇味とに富んだ日本の犯罪文學を紹介したから、これから私は、犯罪  
心理の描寫にすぐれた犯罪文學を紹介しようと思ふのであるが、さうなるとその範圍が極めて廣くな  
つて、殆んど手のつけ様がないから、先づ徳川時代の「大衆文藝」とも稱すべき淨瑠璃を選び、その

最も秀れた作者であつた近松門左衛門翁の作品の解剖を試み、それと同時にシエクスピアの作品をも  
紹介して置かうと思ふのである。近松を日本のシエクスピアと呼ぶことの當否は、もとより私の關し  
ないところであつて、私はたゞ何となしに二人を並べて見たのに過ぎないのであるが、兩者の作品を  
比較研究することは、犯罪心理學上決して興味が少なくないのである。

さて、巢林子もシエクスピアも随分澤山の作品を遺して居るので、その中の犯罪を取り扱つたもの  
を一一紹介するのは不可能であるから、巢林子の作では「女殺油地獄」シエクスピアの作では「マ  
クベス」を選んで、兩巨匠の描いた犯罪者を考察して見ようと思ふのである。「女殺油地獄」の中  
には、河内屋與兵衛といふ環境によつて生じた犯罪者が取り扱はれ、「マクベス」の中にはマクベス  
といふ先天的犯罪者が取り扱はれてあるので、彼等が殺人の前後に於ける心的経過を比較するに頗る  
好都合である。

「女殺油地獄」は、巢林子の六十九歳の作であつて、晩年に於ける三名作「心中天網島」と「心中  
宵庚申」とを併せての一つであるばかりでなく、巢林子のあらゆる作中、最も優れたものであると  
さへ言はれて居る。それと同じく「マクベス」も、シエクスピアの三傑作「ハムレット」と「オセロ」  
とを併せての一つであつて、五十二歳で死んだ作者の、四十二歳の時の作物であるから、いはゞ作  
者の腕の圓熟した頃のものである。だから「油地獄」と「マクベス」はそれ／＼巢林子と沙翁の代表



作と見做すも差支なく、實際、犯罪文學の立場から言つても、この二つは傑作中の傑作といひ得るのである。ことに巢林子には、『油地獄』の外に取り立て、いふ程の犯罪文學はなく、『源氏冷泉節』の毒殺心理や『丹波與作』の窃盜心理などは『油地獄』ほど深いところまで立ち至つては居らないのであるから、巢林子の『犯罪觀』をうかゞふべき作品は、『油地獄』より外に無いといつてもよいのである尤も『心中』即ち復自殺の心理を廣義の犯罪心理と見做せば、いふ迄もなく、近松翁の作品には、應接に違のないほど取り扱はれて居る。

『油地獄』の中には、極めて我まゝに育つた青年が、金に困つて知人の細君を殺すといふ突發性の犯罪が描かれてあり、『マクベス』には、癲癪を持つたマクベスが、幻視によつて王位を奪ひ得るものと確信し、國王を弑するといふ、計畫された殺人が描かれてあつて、前者は當時の市井の出來事からヒントを得、後者はホリンシェツドの『編年史』から題材を得たのであつて、ことに『油地獄』に關しては、作者は別段の用意もなく、今日の新聞の三面種を取り扱ふほどの軽い氣持で書いたらしいといふ説をなす學者もあるが、すべて、天才は、たとひ不用意のうち筆を執つても、人間を観察する眼に狂ひがないから、やはり立派な作品が生れるのであつて、丁度、兩親の不用意のうちに作られた天才その人が、研究に値すると等しく、その天才の不用意の作品もまた深重に研究すべきものであると思ふ。

『女殺油地獄』は上中下の三卷からなつて居る。上卷には野崎詣り、中卷には山上詣り、下卷には端午の節句の鹽梅して舞臺効果を多からしめて居るが、劇としての『油地獄』を論ずるのが目的でないから、こゝではたゞ大たいの筋書きを紹介するにとゞめる。

大阪、本天満町、豊島屋七左衛門の妻お吉（二十七歳）が、三人の娘をつれて、野崎詣りの道すがら、ある茶店に休んで居る、とお吉の家の筋向ひに住む當年二十三歳の河内屋與兵衛（主人公）が二人の色友達とやつてくる。お吉は與兵衛に向つて『お前さんには、新地の天王寺屋小菊、新町の備前屋松風といふ御馴染がある筈、こんなときに何故一しよに連立つて御出でにならぬか。』とカマをかける。すると與兵衛は『連立つて來るつもりであつたけれど、松風は先約があるといふし、小菊は方角が悪いと逃げ居つたが、きけば小菊は會津の客につれられて、野崎詣りに來たといふことだから、小菊を待伏せして一出入するつもり』だと答へる。それをきいてお吉は『かね／＼私はあなたの御兩親から、與兵衛に意見をして下さいと頼まれて居ます。どうぞ人前で恥をさらさないやうにして御兩親を安心をさせてあげるやうにして下さい』

といつて去る。

間もなく小菊が會津の客とこちらへやつて來る。與兵衛たち三人は、その前に立ちはだかつて、小



菊を貰ふからさう思へと言ひ渡す。すると會津の客は、案内物に驚かず、與兵衛の二人の友だちの一人を川に蹴こみ、一人を追ひ散らしてしまつたので、遂に與兵衛は組打ちを始め、二人とも小川の中へまろび落ちてしまふ。丁度そこへ一人の武士が郎黨を連れ馬に乗つて代參に來たが、與兵衛のため泥水をかけられたので徒士頭の山本森右衛門が、與兵衛を捕へて見ると、與兵衛は自分の甥に當る故、一旦はびつくりしたが、身うちのものとなれば尙更容赦はならぬと、討ち捨てようとする、馬上の武士は、參詣の濟む迄は怪我をさせてはならないと押しとゞめ、一行は與兵衛を残して去つてしまふ。

與兵衛は、『南無三伯父の下向に切る、筈、切られたら死う、死んだらどうしよ』と氣も轉倒せんばかりに怖氣つき、兎にも角にも逃ようと思つたが、さて何處へ逃げたらよいだらうかと迷つて居ると折しも其處へ最前のお吉が戻つて來る、これ幸と與兵衛はお吉に向つて、『いゝところへ來て下さつた、わたしはかうして居れば切られてしまふから、大阪へつれて行つて下さい』と頼む。お吉は『いえ、私はまだ歸るのではありません。七八町行つたところ、あまりに人が多いで、良人待ち合せのために引き返して來ただけです。だが一たいその泥はどうなつたのです？』といつて、事情をき、『それでは洗濯をしてあげませう。』と茶店の奥へはひつて行く。そこへお吉の良人七左衛門がきて、姉娘から、お吉と與兵衛とが、茶店の奥で衣服を脱いだり、帯を解いたりして居ることを聞いて

大に嫉妬の情にかられるが、やがて奥から二人が出て來て、與兵衛が申譯をすると、七左衛門は碌に返事もしないで妻子を連れて去つてしまふ。と、折あしくも先前の武士の一行が歸つて來て、森右衛門が刀の柄に手をかけようとする、武士は鷹揚にかまへて助けてやれといふので、與兵衛はほつとする。以上が上巻の梗概である。

中巻では、與兵衛の家即ち河内屋徳兵衛の油屋の店が舞臺となつて居る。山上参り（吉野金峯山に登ること）の連中がどやどやとやつて來て、『與兵衛はどうした。今日俺達の歸つて來ることがわかつて居るに、出迎ひもせぬとは、どこか氣分でも悪いのか』といふ。徳兵衛が走り出て『うちのどろめは山上参りの行者講のと、今年も自分の手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫取つて、迎ひにも出ぬとはひどい奴どうぞ友だちとして意見をしてやつてくれ』と頼む。ところへ、奥から母親も茶をもつて出て、『與兵衛が山上さまへ嘘をついた罰が、妹娘のおかちにあたつて、十日ばかり風邪氣で寝て居ますけれど醫者にかゝつても一向なほりません、どうか皆さま御祈禱を頼みます』すると講中の一人は、『罰ならば與兵衛に當る筈、娘御の病氣は別のことだらうがそれには白稻荷法印といふ山伏を御頼みなさるがよい』といひ置いて去つてしまふ。

するとそこへ、與兵衛の兄なる順慶町の太兵衛がたづねて來る。太兵衛も與兵衛も、徳兵衛の生さぬ仲の子である。即ち徳兵衛の舊主人の子で、彼は舊主人の死後舊主人の内儀と一しよになつたの



である。太兵衛は徳兵衛に向つて、『今も道で母に逢つて話したことが、伯父森右衛門からの文面によると、先月與兵衛が御主人へ狼籍に及び、そのため居づらくなつて浪人したとの事、誠に以ての外人間、一日も早く勘當してしまひなさい。一たい、當日ごろ、親仁様の手ぬるい。自分の種でないといつたとて、母の良人である以上眞實の父だ。おかちを打たゝいても、あの馬鹿者に拳一つあてぬやうにしないので、却つてあいつのためにならない。たゞき出して來されば、どこかひどい主にかけて、ため直してやりませう』といふ。徳兵衛は無念顔、『親旦那の往生の時はそなたは七ツ、與兵衛は四ツ、徳兵衛どうせいかうせいといつたことを彼奴はちやんと覚えて居るのだ。伯父森右衛門殿の了簡で、是非にと言はれて、親方の内儀と女夫になり、そなたは立派に育つたが、與兵衛めはそれと反對で、商賣の手を擴めさせようと思つても、壹匁まうければ百匁つかふ根性、意見一言いへば、千言でいひ返す。誠にこの身の境界がづらい』と嘆く。太兵衛はそれからしきりに勘當をすゝめると折しも奥の方でおかちが眼をさまして苦しがり、門口へは白稻荷法印が見舞にやつて來る。太兵衛が去ると、入れちがひに、空樽をかついだ與兵衛が歸つて來て、法印に挨拶し親仁に向つて、『親仁殿おからの病より大事なことがある。跡の月野崎で伯父様にあつたら、主人の金を三貫目つかひこんだから返さなければ切腹だ、是非調へてくれとの事。その當座母に話したが今ふと思ひ出した、これからわたしが持つて行つてあけるから、是非出して下さい』といふ。たつた今太兵衛からきいたことがあ

るので、徳兵衛は相手にせず、法印を案内しておかちのところへ連れて行く。法印が祈禱を始めるとおかちは顔をあげ、『私の病直すには、聳殿の話をやめて、與兵衛の戀人を請出し、この世帯を渡してくれ』と、夢中になつて口走る。法印はそれを物ともせず祈つて居ると與兵衛が出て來て追ひ出してしまひ、さて、親仁に向つて、『親仁どの、今のおかちの言葉は死んだ父の死霊が言はせたのだ。死霊の言葉どほり、この與兵衛に世帯を渡したらどうだ』といふ。徳兵衛は怒つて、『渡せぬ』といふ。『扱は妹に聳を取つて世帯を渡すな？』『さうとも』これをきいて與兵衛はカツと怒り、徳兵衛を踏のめらし、肩や背中を足蹴にする。妹はびつくりして、『みんな兄様の言ひつけて死霊のついた眞似をしたのに、父さまを蹴るとはひどい』といつてとゞめようとする、與兵衛は妹をも踏み伏せる。折しもそこへ母親が歸つて、與兵衛のたぶさを引つかみ、横投げにのめらせて、目鼻の差別なくなぐりつける。さうして散々吐つたあけく、『半時も此内に置くことはならぬ、勘當ちや出てうせう』と涙ながらに打たゝく。與兵衛はこれをきいて、『こゝを出たら、どこへ行く所がない。』といふ。母が天秤棒で追ひ出さうとすると、與兵衛はそれを奪つて母に向つて打ちかゝる。徳兵衛は、今は見るに見兼ね、更にもその天秤棒を奪つて、息をもつがせず六ッ八ッ打ち續ける。さうして自分のつらい心持ちを訴へると、母は、『うぢく／＼ひろがば町中よせて追ひ出す』といつたので、町中といふ言葉に、さすがの與兵衛もびつくりして、ふらく／＼と出かける。徳兵衛はその後を見送り、『あいつが顔付背恰好、



成人するに従ひ死なれた旦那に生寫。あれあの辻に立たる姿を見るに付、與兵衛めは追出さず、旦那を追出す心がして、物體ない悲しいわいの』と涙ながして悲しむ。といふのが中巻の梗概である。下巻の舞臺は、河内屋の筋向ひ、豊島屋の店。五月四日の夜である。女房お吉一人三人の娘を寢させて留守番をして居ると、掛取りに出た良人七左衛門が中休みに立寄り、掛金として集つた五百八十目を預けて再び出かけて行く。と、其處へ勘當された與兵衛が、油二升入の樽をさけて来て、門の口から豊島屋をのぞきにかゝると、後の方で『與兵衛ではないか』と呼ぶ者がある。見ると上町の口入綿屋小兵衛、『あゝいゝところで出逢つた。順慶町へ行けば、本天満町の方だといひ、本天満町へ行けば勘當したといふ事だつた。お前さんが留守でも親仁さんの判、新銀一貫目、今宵延びれば明日は町へことわるからそのつもりで御いでなさい』といふ。與兵衛は驚き、『手形の表は一貫目だが正味は二百目、今夜中に返せばいゝぢやないか』さうとも、明日の朝六ツ迄にすれば二百目、五日の日によつと出ると一貫目』かういつて綿屋は歸つて行く。與兵衛がはたと當惑して居ると提灯をとほして親仁の徳兵衛がやつて来る様子、はつと思つて、彼は平蜘蛛のやうにつくばつてしまふ。徳兵衛は豊島屋の店へはひつて、お吉に向ひ、『與兵衛は此頃生みの母が追出したので止められもしなかつたですが、きけば今順慶町の兄の方に居るといふこと、若し狼狽へてこちらへ來ましたら、父親は合點だから、母にわびをして再び戻るやう意見して下さい。ここに三百女房に内證で持つて來

ましたから、私から出たといはずあなたの手で渡してやつてくれませぬか』と頼むるとそこへ母親お澤が裏口からたづねて来て、『徳兵衛殿、何しにごさつた。與兵衛にやるとして三百持つてごさつたのだらう。そのあまやかしがいけない。さあ／＼早くいなしやれ』と引立てようとする、徳兵衛が言ひ譯すると、お澤はなほも追ひやらうとする。歸るなら一しよに歸らうと、徳兵衛がお澤を引張ると、その途端に母の袷の懐から粽一わと錢五百が落ちる。お澤は狼狽し、『あゝ堪忍して下さい徳兵衛殿いくら鬼子でも、母の身でどうして憎からう。けれど、母が可愛い顔をしてはいかぬから、無理にやらくあたりました。私に隠して錢をやつて下さる心は口ではけん／＼いつても心では三度いたゞきました。私も實はあいつの可愛さに店の錢五百を盗んでお吉様に届けて貰はうと思ひました』と泣く。結局お吉の取計らひに任せて夫婦二人は歸つて行く。

兩親の歸るのを見届けた與兵衛は、『心一つに打うなづき、脇指抜て懷中に、さいたるくゞりさらりとあけ』、『七左衛門殿はどちらへ、定めし掛もよつたことでせう?』と言ひながらはいる。お吉は與兵衛の姿を見て、『あゝ、いゝ所へござつた。この錢八百と粽が、あなたに遣れと天から降つて來ました』といひ乍ら差出す。與兵衛は驚かず、『これが親たちの合力か』といふ。『ちがひます』『いやわかつて居る。先前から門口で蚊に喰はれて、親たちの愁嘆きいて涙をこほしました』『そんならよく合點がいつた筈、これからは心を入れ替なさい』『いや、孝行したくても、肝腎の錢が足らぬ。賣溜め



掛金がある筈だから三百目貸して下さらぬか』お吉はびつくりして、『それでは必ず直つたといへぬで  
 はありませんか、金は奥の戸棚に上銀が五百目あまりあるが、良人の留守には一錢も貸すことになりま  
 せん。いつぞやの野崎参りに着物を洗つてあけてさへ、不義したと疑はれ、言ひ譯に幾日もかゝりま  
 した。良人の歸らぬうちに早く去んで下さい』與兵衛はそばへにじり寄り、『不義になつて貸して下さ  
 い』といふ。『いけません』『是非』『女と思つてなぶらしやると聲を立てますよ』『實は先月の二十  
 日に親仁の謀判をして上銀二百匁今晩切りに借りたのです。明日になれば手形どほり一貫匁で返す  
 約束、而も親と兄を始め兩町の五人組へ先方でことわる筈とても、才覚出来ぬので自害しようと、  
 この通り脇指をさいて出ましたが、只今兩親の歎きを、死んだあとで親仁へ難儀のかゝることは不  
 孝の上塗りと知り、詮方なさに頼むのです。たつて二百目で與兵衛の命が助かります。どうか貸して  
 下さい』

お吉はこれを與兵衛のいつもの手と察し、どうしても承知しない。そこで與兵衛は考へて、『そんな  
 ら、せめてこの樽に油二升取替へてくれませんか?』といふ。『それは易いこと』とお吉が油をつめか  
 かると、與兵衛はお吉の後へしのび寄り、刀を取り出す。ピカリと光つたのでお吉はびつくりして、  
 『何でした』といふ。『何でもない』『いや、それ、急度目がすわつて、恐ろしい顔色、手を出し  
 て御覽なさい』與兵衛は刀を背後で持ちかへて手を出す。お吉は氣味を悪がり逃出さうとする。躍り

かゝつて與兵衛はお吉の咽喉笛を刺す。苦しい中から、お吉は『助けて下さい。三人の子が可愛い金  
 は入るだけ持つて行つて命だけは助けてくれ』と哀願する。『チ、死にともない筈。尤々。こなたの娘  
 が可愛程、己も己を可愛がる親仁がいとしい。金拂うて男立てねばならぬ諦らめて死んで下され。口  
 で申せば人が聞く、心でお念佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』と、たうとう殺してしまふ。かくて  
 與兵衛は死顔を見て、心を亂し、戸棚から金を盗み出して逃げ去るのである。

舞臺が變つて遊廓となり、與兵衛の伯父、森右衛門が近頃與兵衛の身持が一層悪くなつたとき、  
 ことに女殺して金取つたのも與兵衛らしいといふ世間の評判を心配して、備前屋の松風の許をたづね  
 ると、入れちがひに一人の男が出て来る。松風が、『つい先程見えられたが曾根崎へ用事があるといつ  
 て去られた』といふと『それではもう一つたづねるが、五月の節句前か後で、金を澤山つかつたこと  
 は御座らぬか』といふ。『金のことは知りません』といつて松風は奥へはひる。森右衛門は仕方なく曾  
 根崎の方へ去る。

與兵衛は小菊に逢ふため曾根崎の花屋に来ると、後方のお龜が出迎へて上らせ、それから油屋の女  
 房殺しの芝居の話をする。與兵衛が不安を覚えて、無茶酒をのんで居ると、友人が訪ねて来て、『お前  
 を侍がたづねて居るぞ』と告げる。びつくりして様子をきくと叔父らしいので、逢つては面倒と、  
 新町に紙入を忘れて来たといつはつて逃げ出す。その跡へ森右衛門がたづねて来て、花車に逢ひ、新



町へ去つたときいて残念がり、「こんど與兵衛が來たら、酒でも呑せて留め置き、本天満町の河内屋へ知らせせて貰ひたい只今來がけに櫻井屋源兵衛方へ立寄つてきくと、五月四日の夜に、大金三兩、錢八百受取つたといふことだが、こゝへ幾ら拂つたか」「私方へも大金三兩、錢一貫文」「その夜は何を着て参つたか」「廣袖の木綿袴、色はたしか花色だつたと思ひます」「よろしい」と森右衛門は去る。再び舞臺は廻つて、お吉の家では三十五日の速夜がつとめられて居る。同行の人々が、七左衛門をなぐさめて居る折しも、居間の桁梁を通る鼠が、反古をちらりと蹴落して行つた七左衛門が見ると、血のついた半切紙に一ツがき、十匁一分五リン、野崎の割付五月三日とあるどうやら見たやうな筆蹟た同行に見せると、河内屋の與兵衛の手だときまり、さては去る四月十日、與兵衛は三人づれで野崎詣りに行つたさうだが、その割付にちがひない。これでお吉を殺した犯人も知れました。亡者が知らせたにちがひありませんと喜ぶ。とその時、「河内屋の與兵衛です」と、當の本人がはひつて來て「三十五日の速夜になつても、犯人が知れぬで御氣の毒です」と弔詞をのべる。七左衛門は「おのれ、お吉をよくも殺した」と躍りかゝる。やがて格闘が始まり與兵衛が逃げ出すと、表に捕吏が居て難なく取り押へる。捕吏の後から森右衛門が聲をかけ、「もうかうなつたら潔よく往生せい。世間の風説をきいて、あらはれぬ先に自害をすゝめようと、新町や曾根崎をたづねたが、いつも後へばかり行つたのは貴様の運の盡だ。おい太兵衛その拾をこゝへ持つて來い。これは五月四日の夜に貴様の著たもの、所

所のきは付こはばり、お役所からの御不審、只今その證據調べだ。誰か酒を持つて來てくれい」酒をかけると果して朱の血潮に變つた。與兵衛も今は覺悟を極め、大聲を出して、「一生不孝放埒の我なれども、一紙半錢盗といふ事終にせず、茶屋傾城屋の拂は、一年半年遅なはるも苦にならず、新銀一貫匁の手形借り一夜過れば親の難儀、不孝の科勿體なしと、思ふ計に眼付、人を殺せば人の歎き、人の難儀といふことに、ふつゝと眼付かざりし、思へば三十年來の不孝無法の悪業が、魔王と成て與兵衛が一心の眼を眩まし、お吉殿殺し金を取しは河内屋與兵衛、仇も敵も一ツひぐわん。南無阿彌陀佛」といひ、繩を受けて、この一篇の悲劇は終るのである。

## 三

以上の梗概からもわかるとほり「油地獄」の最後の部分には探偵的興味まで加はつて、いはゞ一種の優れた探偵文學となつて居り、作品全體が濃厚な近代色彩を帯んで居て、鋭い人生批評が加へられてあるために、當時の興行上の効果は却つてあまり良好でなかつたといはれて居る。

この作に於て、作者は、如何に環境が犯罪性を醸成するかを痛烈に示さうとして居る。與兵衛の犯罪性には少しの遺傳的分子も加はつて居ない。實父、伯父、實母、實兄、すべて皆善人である。彼にはまた肉體的不具もなかつた。母親お澤が與兵衛を折檻する言葉に、「徳兵衛殿は誰ぢや、おのが親。今の間に、脚が腐つて落ると知らぬか、罰あたり、おとましやおとましや、腹の中から盲で生れ、手



足かたはな者もあれど、魂は人の魂。己が五體何處を不足に生付た。人間の根性何故さけぬ父親が違ひし故、母の心がひがんで、悪性根入るといはれまいと、さす手引手に病の種。おのれが心の剣で、母の壽命を削るわい」とあるを見ても、彼が圓滿な體格を具へて居たことがわかる。さうして、これをかのシエクスピアの「リチャード三世」の中で、不具者リチャードを生んだヨーク公爵夫人がリチャードに向つて言つた言葉と比較して見ると頗る興味がある。即ち「おのれは此下界をわしの地獄にするために生れて來をつたのぢや。生れる當座もわしを苦しませをつたのぢやが、頑是ない頃から我儘で、剛情で、學問を始めるやうになつてからは、怖ろしい亂暴な、氣の荒い子で丁年になつては大膽不敵で、向ふ見ずで、それが年を取つてからは、高慢で、狡猾で、慘忍で、以前よりは外面が溫和になりをつたゞけに、口と心とは裏表の不信不義、深切めかしては人を陥擠れるるだくみ！」(坪内氏譯による)とあつて不具變質者の犯罪性の發達の經路が遺憾なく述べられてある。與兵衛の母親の言葉の中には、「育ち」が犯罪性を作ることが言ひ表はされ、リチャードの母親の言葉には、生れながらの犯罪性は、自然に發展して行くものであることが述べられてある。先天的犯罪者リチャードは、子供の時分から狡猾であつて世間の表裏をよく知つて居たにかゝはらず、境遇によつて作られた犯罪者與兵衛は世間といふものを少しも知らぬ「坊ちゃん」であつた。氣儘に育つた彼は自分の欲望ならばどんなことでも叶ふものと思ひ込んで居たがために犯罪の何ものであるかといふことさへ知らなかつ

た。「まだ此上に根性の直る藥には、母が生肝を煮じて飲せよといふ醫者あらば、身を八ツ裂も厭はぬ共」といふくらゐの母親の盲目的な愛と、「此徳兵衛は親ながら主筋と思ひ、手向ひせす存分に踏れた。腹を借た生の母に今の様、傍から見ると目も勿體なうて身が震ふ。今打たも徳兵衛は打たぬ、先徳兵衛殿冥途より、手を出してお打なさるゝと知ぬかやい。おかちに入聲取といふは、跡方もないこと。エ無念な、妹に名跡繼せては、口惜と恥入、根性も直るか、一思案しての方便。あの子は餘所へ嫁入さすに、氣遣ひすな。他人どし親子と成は、よくく、他生の重縁と可愛さは實子一倍。瘡瘡した時日進様へ願かけ、代々の念佛捨て百日法華に成」といふ位の父親の義理を思ふ愛の中に育つたのであるから、彼の氣儘は極端に増長したのである。無論、同じ家に育つた兄の太兵衛が正直な人間になつたところを見れば、與兵衛には、我儘放埒に陥るべき先天的素質があつたと解釋しても差支ないけれど、少なくとも近松翁は、與兵衛を先天的犯罪者にしようとは思はなかつたやうである。

かくの如く、親子の眞の道を教へられなかつた與兵衛は、成長しても子供のまゝの野蠻性を失はなかつた。その野蠻性は野蠻詣りの場面に於いて喧嘩によつてはつきりあらはされてあるが、その喧嘩の當時、伯父に逢つたことを種にして、兩親を欺いて金を取らうとした奸智は、その野蠻性の發現とも見られぬでもないけれど、むしろ、悪友の感化によるといつた方が適當であるかも知れない。遊里に足を踏み入れた彼は、お定まりの金に窮し、始めて世の中が我が意の如くならぬことを知り、父母



を許かうと謀つたのである。さうして更にその奸智は進んで父の謀判を企て、妹に死靈のついた眞似をさせるに至つた。然しながら彼は決して盗みをしなかつた。彼が捕へられた時の述懐に『一紙半錢盗みといふ事終にせず』とあるを見ても、盗むことを悪いと考へて居たことは事實である。それにも拘はらず父の謀判を企てたのは、父を許したり、父に迷惑をかけたたりするぐらゐは罪惡であると思つて居なかつたのである。このことは『お坊ちやん育ち』の人が屢ば陥る危険の穴である。世間知らずの人が、他人に煽動されて、罪惡と知らず大事を取り出來すのは、法律上の罪惡を恐れて、道徳上の罪惡を怖れないからである、與兵衛は即ち、父母に對してどんな罪惡を行つても、それは當然許さるべきものであると思つて居たのである。

ところが愈よ勸當されるとき、母が『町中よせて追出す』と言つたのをきいた彼は、始めて自分以外に世間といふものゝあることを知つてぎよつとした。天秤棒に怖れなかつた彼も、世間の『法』には恐怖を感じたのである。愈よ勸當されて見ると、彼は始めて道徳の存在に氣が附いたのである。勸當された彼は、さしづめ兄の太兵衛の家に行つた。さうして『絶望』を感じて居たところへ、しみじみ意見され、兩親の尊いことを知り、ことに義理ある父は、一層尊敬せねばならぬことを悟つたのである。

さう悟ると共に、彼は、父の謀判したことを此上もない悪いことだと思ふに至つた。而も五月四日、

の晩までに返さねば五人組へも知らせるといふ貸主との契約であつたので、彼は居ても立つても居られず、金の工面が出来ねば自殺しようと思ひ、豊島屋へ來たのである。來て見ると、兩親たちは、自分の罪を悪むどころか、却つて慈愛ある處置を取らうとして居たので、愈よもつて父親に難儀をかけてはならぬと思つたのである。さうして彼は、如何なる手段を講じても、三百目の金を調へねばならぬと決心したのである。彼はその時一人殺す罪よりも、父親に難儀をかけるのが堪へられなかつた。で、お吉を殺して金を奪はうと突嗟の間に思ひ立つたのである。お吉が血に染りながら三人の子のあることを訴へても、もはや彼の心は動かかなかつた。さうして、『こなたの娘が可愛程、己も己を可愛がる親仁がいとしい』と彼は言ひ放つた。これをリチャード三世が、『亡兄の女と結婚をせにやならん。然うせんと、おれの王國は脆い硝子の上に載ツかつて居るといふ爲體だ。弟どもを殺しておいて、さうして其姉娘と結婚するといふのは、大ぶ際どい遣り口だ！ けれども血の中へ踏込んだ以上、罪惡を突つき出すのも止むを得ない。涙ほたほたの憐憫なんかは、おれの眼中にや住んで居ない』(坪内氏譯による)。といつた言葉と對比して見ると、リチャードは罪惡そのものに陶醉して居るに反し、與兵衛は、己むに己まれず罪惡を犯して居ることがわかる。

さて、一旦お吉を殺して見ると、今まで思ひも寄らなかつた恐怖が、お吉の死顔を見た瞬間からむら／＼と起つて來た。近松翁は、その時の與兵衛の恐怖を次の如き麗筆を以て述べて居る。



『日比の強き死顔見て、ぞつと我から心もおくれ、膝節がたたく胸を押しさけさけ、提たる鑑を追取つて、覗けば蚊帳のうちとけて、寝たる子供の顔付さへ、我を睨むと身も震へば、つれがらつく鑑の音、頭の上に鳴雷の落かゝるかと肝にこたへ、戸棚にひつたり引出すうちがひ上銀五百八十匁、宵に聞たる心當。ねぢ込ねぢ込ふところの、重さよ足もおもくれて、薄氷を履火踏此脇指はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見える沙汰、此世の果報の付時と、内をぬけ出一さんに、足に任せて』

これをかのフランスの大犯罪者ラスネールが、知己のシャルドンとその母を殺して寢臺を戸棚のそばに引き寄せ、戸棚の中の金をさがして居るとき、室の時計が『チン』と一つうつたのをよく覚えて居たこと、比較すると、先天性犯罪者と、偶發性犯罪者の心理の差異を知ることが出来る。

殺人罪を犯した與兵衛は、良心の苛責をのがれるために、只管、痛飲して、胸中の苦悶を消さうとした。花屋の後家が油屋の女房殺しの芝居の話をすると、彼はぎくりとして、

『後家たしなめちと人にも物云せい。生れて與兵衛こんなむさい床凡の上で、酒呑んだ事なけれど今日はず。東隣借足して、與兵衛が座敷分に一ツこしらや。材木諸色諸入目、見事に我等仕る。きつい物かく。エけびた此蒲鉾の薄切様は』と、いかにも狼狽した口調で出鱈目をしやべり、さうして叔父がたづねて居るときいて甚だしく恐怖し、逃げ出してしまつたのである。

遂に與兵衛は、良心の苛責に苦しむすべての犯罪者が行ふやうに、お吉の三十五日の連夜の晩、犯行の現場に顔を出したのである。つい三十五日の連夜になりました。殺した奴もまだ知れず、氣の毒千萬したが追付知れましょ」とその時の彼の言葉は、後來の探偵小説家にも屢ば採用される筆法である。かうして灯のまはりを飛んで居た蛾は、灯の中にはひつてしまつたのである。

かく觀察して來ると、近松翁は、この種の犯罪者の心的經過を殆んど遺憾なきまでに描き出したといつてよい。故意か偶然かは知らぬが、與兵衛の殺人の季節に、統計上、殺人の多い五月を選んだのも面白い。又、犯罪性を考へるには性的の煩悶を見逃してはならぬが、與兵衛は勝手次第に遊里に出入して居たのであるからその點を顧慮する必要が無からしめてある。お吉に借金を頼むとき、「不義に成て貸て下され」といつたのは、お吉の言葉に續いて言つたゞけで、別に深い意味は無かつたのである。

お吉を殺すとき、彼が後に自殺するつもりであつたことは前後の事情からして察せられるが、その決心が崩れてしまつたのは、お吉の死顔を見てからの恐怖のためである。彼の恐怖は全く豫期しなかつたものであつて、その點がこれから述べようとするマクベスの犯行後の恐怖と異なるところである。即ちマクベスは、自分の行爲が大罪であることを知り、當然、殺害後の恐怖を豫期して居たのである。従つて彼はその恐怖に打ち勝たうと用意した。ところが、彼は打勝つことが出来なかつたので



ある。其處に即ち、一層深刻な恐怖が見られるのであつて、その恐怖をシェクスピアが如何なる筆をもつて描いて居るかを、次章に紹介しようと思ふのである。

### 『マクベス』の研究

『マクベス』はシェクスピアの代表的傑作であつて、犯罪的方面、醫學的方面から見て多の興味ある問題が取り扱はれてあるから比較的委しく紹介したいと思ふ。『マクベス』の犯罪學的研究を述べためには、當然『マクベス』の梗概を書くべきであるが、この劇の筋はさほど複雑ではないから、筋を述べながら、醫學的、犯罪學的の觀察を下して行かうと思ふ。然し、若し讀者が坪内博士の譯書を片手にしてこれを讀んで下されば、一層よく了解して預けるだらうと思ふ。なほ文中に引用した原文の譯語は、すべて、坪内博士のそれに依つたのである。

悲劇『マクベス』の中には、二人の犯罪者の心理的發達が巧みに寫し出されて居る。即ちマクベス及びマクベス夫人がそれである。さうして從來この二人の性格について、その解釋が一定しなかつたある學者は、マクベス夫人を恐ろしい惡魔となし、又ある學者はマクベス夫人の行動を、夫婦愛の理

想化されたものであると觀察した。なほ又、マクベスその人に就ても、心から犯罪者になりきつた男であるか否かの決定が容易につかなかつた『猛將軍のマクベス』のは、運命などには目もくれず、武勇其者の秘藏子でもあるやうに、血煙の立つ大太刀を揮閃かして、幕地に敵中に割つて入りとうと敵將に邂逅はれました以上、いつかな告別辭を言はれ、ばこそ、臍から頸へ掛けてさつと斬割いて、其首をば胸壁に懸けられました」といはれるくらゐの勇者が、ダンカン王を殺す決心をしてから、血のついた短劍の幻影を見たり、兇行後、色々の錯覺を起したりするので、人々はその性格の判断に迷はざるを得なかつたのである。然し、マクベス夫人にしろ、マクベスにしろ、生理的、心理的の立場から、その性格の發展する原因と徑路とを研究したならば、何の矛盾を感じることもなしに、劇に書かれた彼等の行動を了解することが出来るのであつて、從來の心理學者は、彼等の性格を彼等の行動からのみ判断しようとしたために、種々の矛盾に突き當つた譯である。さうしてさういふ矛盾に突き當つた理由は、沙翁が、彼等の主要なる素質や體質をいはゞ挿話的に取り扱つたためであつて、彼等を醫學的立場から研究することが、比較的等閑になつて居た爲である。で、これから私は主として精神病學、性學の方面からして、この二人の犯罪心理を分析して見ようと思ふ。

### 二

悲劇は雷鳴電光の烈しい陰鬱なスコットランドの高地に於る三人の妖婆の出現から始まつて居る。



其處へ戦に勝つたマクベスとバンコの二將軍がダンカン王に復命すべく來合せる。この妖婆の場面はマクベスの心理と極めて重大な關係を持つて居るのであつて、當時スコットランドには妖婆の迷信が甚だ盛んに行はれて居たため、沙翁は妖婆を持ち出したのである。尤もこの妖婆の話は「マクベス」の種本なるホリンシェツドの「編年史」にその儘出て居るのであるから沙翁の創意ではないが、沙翁はこれによつてマクベスの性格を一層はつきり浮み上らせることが出來た。

マクベスが妖婆を見て、その言葉をはつきり聞いたのは、心理學的に言へばマクベスの幻視及び幻聽であつた。どんよりと曇つたスコットランドの風景を知つて居るものは、雨の日や雷鳴の夕に、人が妖婆の姿を見るのは當然のことだと考へるにちがひない。況んやマクベスは戦に疲れた歸りがけであるので、その心理状態が最も妖婆を見るにふさはしくなつて居たのである。ことにマクベスは後に述べるやうに、生れ乍ら癲癩の素質を持つて居た人であるから、尙更幻視幻聽を起し易い。

妖婆の姿はマクベスばかりでなく、バンコーも之を認めた。バンコーにはマクベスのやうな素質は無い筈であるが、これは所謂「群衆妄覺」と稱して、戦争などの際、兵士の一人が妄覺を起すと他の凡ての兵士が妄覺を起す現象によつて説明することが出來るのである。而もその幻聽たるや、マクベスに對しては、「萬歳マクベスどの？」「萬歳、グラミスの御領主？」「萬歳、コードアの御領主？」「萬歳のくく」は王さまとならつしやるマクベスどの！」バンコーに對しては、「マクベスどのよりは小さい

けれども一倍大きい」マクベスどのほどに運が好くはないが、一倍運が好い」王さまにはならつしやらんけれども、王さまをば幾人も生まつしやります」といふのであつて、二人ともダンカン王の最高の將軍で、今や謀叛人を平け、二人を一も二もなく信頼して居るダンカン王の弱々しさを思へば、かうした幻聽の生ずるのはまことに當然のことである。スコットランドの王位は世襲であつたけれど、若し王に丁年に達した皇太子がなくて王が崩御した場合には、法律上從弟に當るマクベスが繼承者となるのであつて、ダンカン王には實際年少の皇子しかなかつたのであるから、マクベスが王位を繼承することの可能は十分存在して居たのである。従つて彼が平素心の中に、それを望んで居たことは考へるに難くない。又、バンコーは無論マクベスが自分よりも有利な地位にあることを認めて居たが、マクベスには子が無いから、自分の子が王位を繼ぎ得る可能性はあると考へて居たらしく、さてこそ上記のやうな幻聽を起すに至つたのである。

さてゆく／＼は王さまとならつしやるべき時きたマクベスは、嬉しさのために有頂天になつてしまつて物を言ふことが出來ず、やつとバンコーに對する妖婆の豫言をきくに及んではじめて我に返つて、待て、もう一度言へ。父シネルが亡なつたから、子をグラミスの領主と呼ぶのは分つてゐるが、コードアとは何だ？ コードアの領主はまだ生きてゐる。榮えてゐる。それから國王になるなぞといふことは、コードアの領主になるのよりも尙一層信ぜられぬことだ。……と詰問した。然し妖婆はそれに答へな



いで消えてしまひ、二人は耳に残る言葉を口に繰返すだけであつた。

ところが妖婆の豫言の一部分は數分たぬうちに實現されたのである。そしてこゝにマクベスの犯罪性が芽生えるのである。即ちダンカン王の使者が来て、マクベスをコードアの領主にするといふ王の命を告げたのであつて、それを聞くと同時にマクベスの頭には、最後の豫言も實現されるべきであるといふ考がひらめき、「グラミスとコードアと！ 一番大いのが残つて居る」と獨語し、使者に對しては「たゞいやどうも御苦勞千萬で」といふに過ぎなかつた。然し、マクベスはそれと同時に、妖婆たちのバンコーに向つての豫言も思ひ出さざるを得なかつた。さうしてそれはマクベスにとつては可なり不愉快な豫言であつた。「君は、子供たちが、行く／＼王になるだらうとは思ひませんか？ わたしにコードアを與れた奴らが、君に然ういふ風に約束しましたぜ」と彼はバンコーに向つて言ふのであつた。

バンコーはマクベスよりも遙かに用心深い性質であつたので、その時、すでに錯覺の後作用から脱して居た、そこで彼は極めて冷靜に「それを本氣にお信じなされると、ついコードアだけでなく、王冠までも欲しくなりませうぜ。……が、こりや不思議なことだ。どうかすると、悪魔が、人間を邪道へ誘はうとしてわざと眞實の事を告げることがある。一寸した驗を見せておいて、重大な事でおとしめようために」といつて、うまくその場を取りつくらすのであつたが、マクベスは心中に湧き出て來

る想像と慾望とのために全く我を忘れてしまつた。さうして遂に奇怪な胸騒ぎを起し、最も怖ろしい考へにまで突き進んで行つたのである。「……善い事なら、何故如是な誘惑が萌して、怖い幻影が目に見えるか？ それを想像すると、身の毛が彌立つて、例になく心の臓が、肋骨へぶつつかるやうに鼓動する。現在の怖しさは想像の怖しさ程ではない。今は只空想だけで殺人を行つてゐるのだが、それが爲に予の心肉は擾亂を極めて、いろ／＼な臆測が分別を窒息させてしまつて、只空な考への外は何にも働かん」即ち彼の心の中に王を弑するといふ考へがむら／＼と燃え上つたのである、而も彼のその考へは彼にとつては恐怖であつた。即ちその考へは彼の心の中にある弱い人間の悉くを戦慄せしめたのである。殺人を考へてさへぞつとするやうな人間がどうして殺人を敢てするに至つたか、こゝがマクベスの性格の最も興味ある點だといふことが出来る。

彼はマクベス夫人に宛てて、妖婆の豫言を書き送つた。「約サレタル行末ノ光榮ヲ分ツベキ卿ガ、其慶ビテ知ラデ在スルヤウナル事アリテハト、此事知ラセ申スナリ。トクト考ヘタマヘ。サラバ。」といふ手紙の最後の文句は、彼が妖婆の豫言を信じ切つて居ることがわかる。彼とマクベス夫人との所謂夫婦仲は極めてよく、二人の間には少しの祕密もなかつた。あらゆる幸福は二人で分たうと決心したために、彼は自分の確信した幸福を、妻に告げ知らせたのである。

國王ダンカンは戰に勝つて大に喜び、嫡子マルコムを後嗣と定めて、カンバーランドの公子と呼



ぶことにし、これと同時に、功績ある人達の頭上にも、榮譽の章を與へようと、マクベスの居城のあ  
るインヴァネスに行幸しようと言ひ出した。これを聞いたマクベスは、『御役に立たんと思ひますと、  
休息してをるのが却つて苦勞でございます。小官が先觸役を勤めまして、お成の事を妻に知らせる喜  
ばせませう。では御免を蒙ります。』と表面では何喰はぬ言葉を用ひ、心の中では戦闘準備をせんがた  
め、夫人に一刻も早く告げたいと思つたのである。人のよい國王は、自分を厚遇するために早く歸る  
ものと心得て居た。然しマクベスは、カンバーランドの公子の設立が氣になつた。『カンバーランドの  
公子！ 此踏段で蹉躓くか、それを跳越すかだ、行く先に横はつてゐるのだから。……星よ、光を韜  
んでくれ、予の此眞黒な、重大な陰謀を照すな、手を目には見せんやうにしておいて、爲果せた時に  
なつて、見るの目が怖れるやうな事をしよう。』と彼は獨語した。この『見るの目が怖れるやうな  
事をしよう。』といふ考へはいつまでも彼の心に喰付いて離れなかつた。従つて愈よ王を殺すときに當  
つても、彼はなほこの幻想の中に在つたのである。

## 三

さて、手紙を受取つたマクベス夫人は、手紙を読むなり、マクベスを是非國王にしなければならぬ  
と思つた。彼女のその時の獨白はよく夫の性格を物語つて居る。『グラミスの領主でもありコードアの  
領主でもある、して見れば豫言通りの身分にもお成りだらう。けれども貴郎の氣質が心配になる。手

取早くやつてのけるには、甘過ぎる、柔和し過ぎる、偉い人にならうといふ希望もあるし、大望もな  
いではないけれどそれを遂げるには、是非共なくちやならん横道な心が無い無上に欲しがつてゐなが  
ら、不淨な手段は用ひまいとなさる、不義を行ふのを厭がつて居ながら不正な望を抱いておるでだ。  
グラミスどの、貴郎の手に入れたがつてゐるなさは「これが欲しければ、斯うくしなければ不  
可い」と呼んでゐますよ、けれども貴郎には、それを實行する勇氣は無いんだ、實行したくないので  
はないけれど。……實際この言葉の中にはマクベスの性格が完全に寫し出されてあつて、マクベス夫  
人ほど、良人をよく知つて居た妻は世の中に無いといつても差支ないくらゐである。マクベスの心の  
中には人間愛が充滿して居たため、國王を感動せしめることが出来たのであるが、その氣高い心に直  
接して、大犯罪に對する用意が横はつて居たのである。近世犯罪學の教へるところによると、どんな  
大犯罪者もその心が全部犯罪性で充滿されて居ることはないのである。同じく沙翁によつて描かれた  
リチャード三世の如き大犯罪者すらも、その心が全部犯罪性になり切つては居なかつた。  
マクベスは立派な英雄であつた。生えぬきの兵士でもあり、又、生えぬきの戰士でもあつた。英雄  
にはある種の功名心が必ず付き纏ふものであつて昔から英雄と稱せられる人はいづれもその長上の  
人又は臣下の者から賞められたいと希ふのが常であつた。さうしてマクベス夫人は良人に存するこの  
功名心をよく承知して居たのである。